

內閣統計局編纂



第四十八回

日本帝國統計年鑑



昭和四年刊行

76-書 750
 77-書
 D42A
 100
 107

正 誤

頁	表	欄	及	行	誤	正	
索引	裏	度量衡比較及合數並貨幣純分比價換算表中貨幣ノ欄佛蘭西(法)				0.38710	0.07860
15	6	測候所欄十五行目				高	地高
105	76	工業生產高七行目				綿	絲紡績
138	105	借主別欄十二行目				地	耕
157	127	簡易生命保險被保險者職業別欄				農	數
161	130	但書右側ノ欄七行目				明治三十二年以後	明治三十二年以前
172	138	欄外註				フィルムヲ作	フィルムヲ含
181	140	左品目欄三行目				毛	織物
189	151	同一加入區域内				前欄外通	前欄外通
198	162	自動車乗用ノ行昭和三年欄				話	時間
"	"	自動車荷積用ノ行昭和三年欄				40,063	40,281
"	"	自動車欄ノ宮城縣乗用ノ荷積用ニ、荷積用ノ乗用ノ誤				20,470	20,252
		欄	及	行	誤	正	
		昭和三年度末欄				7,569,576,900	6,447,355,669
						5,322,761,850	4,379,965,700
						419,535,600	419,401,550
						1,482,189,300	1,127,932,600
						120,837,600	120,821,650
						266,543,850	265,514,650
						2,794,484,550	2,296,297,175
		(從テ三十二頁ノ記述中國債欄ノ該當數ハ右ニ準シテ訂正ヲ要ス)				159,171,450	69,998,575
						1,453,393,107	1,451,295,357
						91,338,723	91,337,747
375	347					230,558,126	228,909,351
						244,075,000	222,672,747
						169,573,919	169,367,454
						272,537,968	272,347,398
						222,723,710	244,075,000
						85,933,862	14,625,131
						707,488,081	601,469,481
						109.08	103.79
						85.68	70.51
						23.40	23.36

5. 1. 23 後付

自動車欄ノ宮城縣乗用ノ荷積用ニ荷積用ノ乗用ノ誤

內閣統計局編纂

第四十八回

日本帝國統計年鑑

昭和四年刊行



昭和四年七月廿參日



7189471860

76-書 750
77

D42A

100

107

內閣統計局編纂

第四十八回

日本帝國統計年鑑

昭和四年刊行

正 誤

頁	表	欄 及 行	誤	正
索引裏		度量衡比較及合數並貨幣純分比價換算表中貨幣ノ欄佛蘭西(法)	0.38710	0.07860
15	6	測候所欄十五行目	高地	高知
105	76	工業生産高七行目	綿絲紡績	綿絲紡績
138	105	借主別欄十二行目	地耕	耕地
157	127	簡易生命保險被保險者職業別欄	農數	農業
161	130	但書右側ノ欄七行目	明治三十二年以後	明治三十二年以前
172	138	欄外註	フィルムヲ作ル	フィルムヲ含ム
181	140	左品目欄三行目	毛織物	毛織絲
189	151	同一加入區域内	前欄外通話時間	前欄外通話時數
198	162	自動車乗用ノ行昭和三年欄	40,063	40,281
"	"	自動車荷積用ノ行昭和三年欄	20,470	20,252
"	"	自動車欄ノ宮城縣乗用ハ荷積用ニ荷積用ハ乗用ノ誤		

昭和四年七月廿叁日



7189471860

例 言

本書は各官公署の統計報告を當局に於て蒐集し必要なる事項の要數を轉載摘録し又は若干集計を施して編纂したものである。而して其の比例平均等は間々右報告より轉載したのものもあるが多くは當局に於て算出したものである。

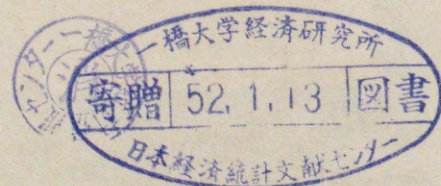
本書に於て内地と稱するは一道三府四十三縣の總稱であつて累年の總數には往々内地以外の計數を包含する場合があるが通例内地及内地外各地方名を明記し或は各地方の總數に「ゴジツク」を用ひたから直に其内容を識別する事が出来る。

土地の區別による事項を掲ぐる場合に於ては成るべく近接地方相互の現象を對照比較するに便ならしめむが爲東北に位する地方より西南にある地方に順次排列することを期した、即ち北海道、東北區(青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島)、關東區(栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川)、北陸區(新潟、富山、石川、福井)、東山區(山梨、長野、岐阜)、東海區(静岡、愛知、三重)、近畿區(滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山)、中國區(鳥取、島根、岡山、廣島、山口)、四國區(徳島、香川、愛媛、高知)、九州區(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿兒島)、及沖繩の如くである。

本年鑑に於て明治四十五年大正元年度又は大正十五年昭和元年度の事實を掲ぐる場合には便宜上之を大正元年度又は昭和元年度と略記した。

高級數位の計數は略數を掲げ往々千を以て單位とし未滿は四捨五入し尙其他に於ても四捨五入の結果内容と總數との符合せざるものがある、又「0」を以て示すは其數量一單位に達しないものである。

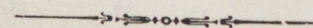
本書に掲ぐる計數の出所は之を「計數出所目録」として本書卷末に其書目を掲げ精密なる計數を知らむとする者の便に供した。



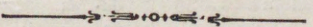
目 錄 概 覽

統 計 圖 (卷 頭)

略 說 (前 附)



摘 要 表.....	2—7 ^頁
1. 土 地 及 氣 象.....	8—17
2. 人 口.....	18—65
3. 農 林 及 水 產.....	66—96
4. 鑛 業 及 工 業.....	97—116
5. 商 業 及 金 融.....	117—160
6. 貿 易.....	161—183
7. 交 通.....	184—209
8. 社 會 事 業.....	210—220
9. 勞 働.....	221—246
10. 教 育 及 宗 教.....	247—289
11. 警 察、衛 生 及 災 害.....	290—305
12. 司 法.....	306—335
13. 財 政.....	336—388
14. 選 舉、官 公 吏、軍 事 及 恩 賞.....	389—419
國 際 統 計 表.....	420—449



索 引 (前 附)

換 算 表 (")

計 數 出 所 目 錄 (後 附)

內 閣 統 計 局 刊 行 書 目 (")

統計表目錄

表號	頁
摘要表	2
1. 土地及氣象	
1. 帝國ノ位置	8
2. 周圍及面積	9
3. 民有地	10
4. 北海道地積	13
5. " 年期地	13
6. 氣象總覽	14
7. 月別氣象	16
2. 人 口	
8. 帝國ノ人口	18
9. 世帯及人口地方別	20
10. 年齡及配偶關係別人口	22
11. 職業(中分類)及職業上ノ地位別本業者本業ナキ從屬者及家事使用人	24
12. 職業(大分類)別本業者本業ナキ從屬者及家事使用人	28
13. 推計人口	32
14. 市町村數及人口	34
15. 市ノ世帯及人口	35
16. 町村ノ世帯及人口	36
17. 民籍及國籍別人口	37
18. アイヌ人口	37
19. 婚姻、離婚、出生、死産、死亡總數	38
20. 婚 姻	42
21. 離 婚	44
22. 夫婦關係繼續期間別離婚	45
23. 出生身分別及死産	45
24. 死亡月別	47
25. " 年齡別	48
26. 乳兒死亡	48
27. 死亡原因別	49
28. " 職業別	48
29. 死因月別	49
30. " 年齡別	52
31. " 地方別	53
32. 生命表	56
33. 北海道移住者	58
34. 渡航者及歸航者	58
35. 國籍變更	58
36. 外國旅券下附人員	59
37. 移 民	59
38. 在外本邦人國別	61
39. " 本邦人職業別	62
40. 在留外國人國籍別	64
41. " 外國人職業別	65
42. 各國公館人員	65
3. 農林及水産	
43. 耕地段別	66
44. 農家戶數	67
45. 耕地所有者戶數	67
46. 東拓經營土地	67
47. 農産物作付反別	68

表號	頁
48. 農産物收穫高	70
49. " 反當收穫高	72
50. " 價額	73
51. 養 蠶	74
52. 家畜及家禽	76
53. " > 出産及斃死	78
54. " > 傳染病	78
55. " > 交易	79
56. 屠 畜	79
57. 搾 乳	80
58. 乳肉製品	81
59. 果 實	82
60. 林野面積	83
61. 森林及林産額	84
62. 狩 獵	85
63. 保安林	86
64. 漁業者及漁船數	87
65. 漁獲物	88
66. 水産製造物	90
67. 遠洋漁業	90
68. 水産養殖	92
69. 製 鹽	93
70. 産業組合	94
71. 同業組合及聯合會	96
4. 鑛業及工業	
72. 鑛 區	97
73. 鑛 産	98
74. 製造場數	100
75. 各種工業職工數	102
76. 工業生産高	104
77. 蠶絲生産	108
78. 織物生産高	109
79. " 種類別	109
80. 朝鮮人蔘	110
81. 臺灣製糖、樟腦及阿片	116
82. 石 炭	111
83. 石 油	111
84. 特許及登錄	112
85. 發明特許支實用新案種類別	112
86. 電氣事業	113
87. 發電所	113
88. 電氣需用	114
89. 瓦 斯	115
90. 度量衡器及計量器	116
5. 商業及金融	
91. 商業會議所	117
92. 取引所	117
93. 清算取引	118
94. 米穀取引相場(清算取引先物平均相場)	119
95. 物 價	120
96. 會 社	126
97. 銀行總覽	134

表號	頁
98. 日本銀行兌換券	136
99. 日本銀行金利	136
100. 橫濱正金銀行爲替諸手形	136
101. " 銀行券	137
102. 正貨現在高	137
103. 通貨流通高	137
104. 日本勸業銀行債券	139
105. " 貸付金	139
106. 農工銀行債券	139
107. " 貸付金	139
108. 北海道拓殖銀行債券	140
109. " 貸付金	140
110. 臺灣銀行券	141
111. 朝鮮銀行券	141
112. 日本興業銀行債券	141
113. 普通銀行營業狀況	143
114. 貯蓄銀行營業狀況	143
115. 信託業	144
116. 擔保付社債信託業	144
117. 無盡業	144
118. 手形交換高	145
119. 金 利	146
120. 外國爲替相場	147
121. 郵便爲替	148
122. 郵便貯金	149
123. 振替貯金	150
124. 造幣局受入金銀銅地金	151
125. 貨幣鑄造及發行	151
126. 保險會社營業狀況	151
127. 簡易生命保險	156
128. 健康保險	158
129. 郵便年金事業收入支出	159
6. 貿 易	
130. 輸移出入品總價額	161
131. 内外國産別及特別輸出入品價額	163
132. 輸出入種類別	163
133. 港別輸出入	164
134. 月別輸出入	164
135. 貿易船舶出入	164
136. 輸出入國別	165
137. 輸移出品々目別	167
138. 輸移入品々目別	171
139. 輸出品國別	177
140. 輸入品國別	180
141. 北海道移出入物品價額	182
142. 南洋輸移出入品價額	182
143. 金銀輸移出入	183
7. 交 通	
144. 道 路	184
145. 橋 梁	184
146. 通信局所	185
147. 內國郵便及電信	186
148. 外國郵便及電信	187
149. 通常郵便線路	188
150. 電信及電話線路	188

表號	頁
151. 電 話	189
152. 鐵 道	190
153. 鐵道運輸	192
154. 鐵道營業收支	194
155. 地方鐵道職員	194
156. 鐵道事故	195
157. 電氣軌道	195
158. 汽車軌道	195
159. 馬車軌道	195
160. 人車軌道	195
161. 諸車交通事故	196
162. 諸 車	198
163. 航 空	199
164. 航路標識	200
165. 入港船舶	201
166. 船舶噸數別	202
167. 船質及船齡別	202
168. 船舶地方別	204
169. 帆船石數別	205
170. 小 船	205
171. 港 灣	206
172. 造船所及船渠	206
173. 海 員	207
174. 海員審判所	207
175. 遭難船舶	207
176. 汽船會社營業狀況	209
8. 社會事業	
177. 社會事業施設別	210
178. " 獎勵助成金	212
179. " 事業費	214
180. 罹災救助基金	214
181. 恤 救	216
182. 養育棄兒	217
183. 行旅病及死亡	218
184. 釋放人保護	218
185. 勞務者救濟	219
186. 映畫檢閱	219
187. 娛樂場	220
9. 勞 働	
188. 勞働統計實地調査結果	221
189. 工場及從業者	224
190. 失業統計調査結果	228
191. 公設職業紹介	232
192. 營利職業紹介	234
193. 日傭勞働紹介	235
194. 家庭職業紹介	235
195. 勞働爭議	236
196. 小作爭議	238
197. 賃 銀	240
198. 職工平均賃銀手當賞與額	240
199. 鑛夫平均賃銀手當賞與額	241
200. 工場傷害扶助	241
201. 鑛夫人員	242
202. 鑛山變災死傷人員	242
203. 鑛夫傷病扶助	242

表號 頁
204. 組合 243
205. 勞働組合種類別 243
206. 官業員共濟組合 244
207. 友愛組合 245
208. 消費組合 246

10. 教育及宗教

209. 學校、教員、生徒數 247
210. 學齡兒童 248
211. 小學校及學教 249
212. 小學校教員 250
213. 小學校兒童 252
214. 幼稚園 253
215. 學齡兒童盲聾啞者 254
216. 盲、聾啞學校 255
217. 師範學校 256
218. 高等師範及臨時教員養成所 257
219. 教員檢定合格者 257
220. 中學校 258
221. 高等女學校 259
222. 實科高等女學校 260
223. 專門學校 261
224. 高等學校 263
225. 大學 263
226. 大學々生、生徒、學部別 264
227. 入學志願者及入學者 265
228. 學習院 265
229. 實業補習學校 266
230. 實業學校及職業學校 268
231. 實業專門學校 271
232. 各種ノ學校 272
233. 外國人教員及學生々徒 274
234. 文部省在外研究員 275
235. 博士 275
236. 生徒體格 276
237. 青年團及青年訓練所 280
238. 小學教員平均月俸 281
239. 公學資產 281
240. 公學費 282
241. 公學收入 282
242. 公學收入及公學費地方別 284
243. 出版圖書 285
244. 新聞雜誌 285
245. 圖書館 286
246. 神社及神宮神職 287
247. 寺院及住職 288
248. 佛道教會說教所 289
249. 神道 289
250. 基督教 289

11. 警察、衛生及災害

251. 司法警察官ノ取扱ロタル犯罪檢舉件數 290
252. 盜難及詐欺恐喝 292
253. 盜難月別 292
254. 被殺害者 292
255. 災害具事他ノ事故ニテ死セシ人員 292

表號 頁
256. 醫藥業 293
257. 種痘人員 294
258. 傳染病 296
259. 精神病者 297
260. 水道 298
261. 墓地及埋火葬 299
262. 水災、潮災及暴風雨被害 300
263. 火災 302
264. 消防員及機械器具 303
265. 貸座敷、料理屋及藝娼妓數 304

12. 司法

266. 區裁判所取扱件數 306
267. 地方裁判所取扱件數 306
268. 控訴院取扱件數 307
269. 大審院取扱件數 309
270. 區裁判所訴訟件數 308
271. " 件數金額別 308
272. " 終局件數 308
273. " 非訴訟事件 308
274. 和解事件 309
275. 督促事件 309
276. 戶籍ニ關スル抗告件數 309
277. 強制執行事件 310
278. 區裁判所取扱破產事件 310
279. 借地借家調停事件 310
280. 地方裁判所第一審訴訟件數 310
281. " 件數金額別 310
282. " 終局件數 311
283. 地方裁判所控訴件數 311
284. " 抗告件數 311
285. " 取扱破產事件 311
286. 小作調停事件 312
287. 控訴院控訴件數 312
288. " 上告件數 312
289. 公證事務 312
290. 供託事件 313
291. 執達吏事務 313
292. 外國人ニ關スル訴訟件數 313
293. 朝鮮、臺灣、關東州民事事件 314
294. 刑事事件取扱件數 315
295. 犯罪捜査終局事件及豫審終局被告人 315
296. 刑事第一審事件 315
297. " 控訴事件 316
298. " 上告事件 316
299. 朝鮮、臺灣、關東州刑事事件 316
300. 第一審刑法犯罪名別 317
301. " 原因別 318
302. " 年齡別 318
303. " 罪名及刑名別 320
304. " 受刑變數 321
305. 刑法犯執行猶豫及取消 321
306. 第一審刑法犯加重及減輕 322
307. " 特別法犯罪名及刑名別 323
308. 特別法犯執行猶豫及取消 323
309. 判決確定被告人 324

表號 頁
310. 刑事略式事件 324
311. 違警罪即決事件 324
312. 外國人ニ關スル第一審刑事事件 325
313. 登記 326
314. 在監人員 328
315. 入監出監人員 329
316. 在監受刑者罪名及刑名別 330
317. 懲役在監受刑者刑期別 330
318. 新受刑者罪名別 330
319. 新受刑者犯數別 330
320. 新受刑者ノ年齡、其他ノ關係 332
321. 新受刑者刑名別 332
322. 體刑及財產刑執行被告人 332
323. 在監人罹病及轉歸 333
324. 少年刑務所 334
325. 在監人作業 334

13. 財政

326. 歲入歲出總額 336
327. 歲入款別 336
328. 歲出所管別 337
329. 歲入經常部款項別 338
330. 歲入臨時部款項別 338
331. 歲出經常部款項別 339
332. 歲出臨時部款項別 345
333. 特別會計 354
334. 朝鮮總督府特別會計 356
335. 臺灣總督府 " 357
336. 樺太廳 " 359
337. 關東廳 " 360
338. 南洋廳 " 361
339. 豫算純計額 362
340. 所得稅納稅人員 366
341. 所得稅稅額 367
342. 第三種所得種類別 368
343. 所得金額 370
344. 地租納稅人員 371
345. 地租地目別 372
346. 營業收益稅 373
347. 國債現在高 375
348. 稅關收入 375
349. 國有財產 376
350. 大藏省預金部預金 378
351. 貸付金 378
352. 國庫支辨道府縣經費 385
353. 道府縣歲入 380
354. 道府縣歲出 381
355. 市歲入 382
356. 市歲出 383
357. 町村歲入 384
358. 町村歲出 385
359. 市町村基本財產 386
360. 水利組合及水害豫防組合歲入歲出 387
361. 地方債 388

14. 選舉、官公吏、軍事及恩賞

362. 貴族院議員多額納稅者議員及互選者 389
363. 衆議院議員選舉 390
364. " 年齡及職業別 391
365. 府縣會議員選舉 391
366. 市町村會 392
367. 郡市町村數及役所役場數 393
368. 文官人員及年俸 394

表號 頁
369. 文官部局別 395
370. 文官休職 397
371. 現役陸海軍人及年俸 398
372. 國有鐵道職員 398
373. 通信職員 398
374. 警察官署及職員 399
375. 司法官署及職員 400
376. 在外公館官吏 401
377. 宮內官吏人員及年俸 401
378. 宮內官吏部局別 401
379. 地方吏員及俸給 402
380. 徵兵檢査 404
381. 陸軍衛戍病院及職員 406
382. 憲兵隊人員 407
383. 憲兵取扱犯罪人員 407
384. 陸軍々法會議 408
385. 陸軍衛戍刑務所 408
386. 陸軍諸學校 409
387. 艦艇隻數及噸數 409
388. 海軍募兵人員 410
389. 海軍刑務所 411
390. 海軍下士官兵ノ費用 411
391. 海軍諸學校 411
392. 恩給及扶助料受給現在數 412
393. 恩給扶助料受領權裁定人員及金額 413
394. " 受給權消滅 413
395. 警察官恩給及扶助料 414
396. 年金恩給拂渡高口數及金額 414
397. 有爵人員 415
398. 有位人員 415
399. 勳章佩用 415
400. 外國人新敍勳人員 416
401. 外國勳章徽章佩用 416
402. 徽章佩用功勞者賜杯 416
403. 旭日勳章年金 417
404. 金鷄勳章年金 418
405. 勳章褫奪人員 418
406. 褒章 419
407. 褒狀、賞杯、金圓表彰 419

國際統計表

408. 面積及人口 420
409. 主要都市人口 421
410. 職業別人口 423
411. 婚姻及離婚 425
412. 出生 426
413. 死亡 427
414. 死産 428
415. 移民 428
416. 人口增加率 429
417. 主要農產物作付面積 430
418. 主要生產品 434
419. 貿易(特別貿易) 438
420. 船舶 440
421. 鐵道 441
422. 正貨準備高 442
423. 通貨流通高 443
424. 卸賣物價指數 444
425. 生計費指數 444
426. 勞働組合員 445
427. 歲入歲出總額 446
428. 國債 447
429. 小學校及中等學校 448
430. 議員及選舉有權者數 449

索引

本索引は主要項目を普通の發音一例へば「耕地(カウチ)」を「コ」の部に入れたるに依り、大體五十音順に配列せり

—(ア)—

阿片 110

—(イ、ヰ)—

違警罪即決事件 324
醫師 293
齒科醫師 293
移住者 58
移民
内國 59
列國 428
飲食店 287

—(エ、ヱ)—

營業收益稅
納稅人員 373
稅額 374
營利職業紹介 234
衛生 295-301
醫藥業 293
種痘人員 294
法定傳染病 296
精神病 297
水道 298
墓地及埋火葬 299
映畫檢閲 219
遠洋漁業 93

—(オ、ヲ)—

大藏省預金部
預金 378
貸付金 378
卸賣物價
内國 120
列國 444
恩給 412-414

—(カ)—

海軍 398-409-411
軍艦 409
現役軍人 398
募兵人員 410
刑務所 411
下士官及兵ノ費用 411
諸學校 411
海軍 200-209
海員
海技免狀受有者 207
船員手帳受有者 207
海員審判所 207
外國旅券下附人員 59
外國在留本邦人 61
外國人
現在人口(國勢調査) 37
職業別 64
國籍別 65
公館人員 65

教員、學生、生徒 274
民事訴訟 313
第一審刑事事件 325
新教勳人員 416
會社 126-133
資本金高別 126
地方別 128
營業種類別 129
植民地 130
營業種類細別 130
商船會社 209
商事會社登記 326
會員組織取引所 117
學校 247
學生 247
體格 276
學齡兒童 248
學齡兒童中盲聾啞者 254
學習院 265
各種ノ學校 272
火災 302
火葬 299
貸席 220
貸座敷 286
加重減輕 322
瓦斯 115
家畜
總數 76
生産及斃死 78
傳染病 78
交易 78
屠畜 79
搾乳 80
乳肉製品 81
家禽 76
家庭(内職)職業紹介 235
活動寫真 219-220
株式組織取引所 119
貨幣 151
官吏 294-401
官廳現業員共濟組合 244
簡易生命保險 156-157
觀物場 219

—(キ)—

議員選舉 389-392
貴族院 389
衆議院 390
府縣會 391
市町村會 392
國際表 449
氣象 14-17
總覽 14
月別 16
果年平均 16
記章 416
佩用 416
外國記章 416

汽船會社營業狀況 209
汽動車軌道 195
貴族院 389
軌道
電氣 195
汽動車 195
馬車 195
人車 195
救助 214-219
羅災救助基金 214
恤救人員及金額 216
棄兒 217
行旅病人及死亡人 218
日傭勞働者救濟 219
牛車 197-198
橋梁 184
教育 247-284
總覽 247
幼稚園 243
小學校(國際表ハ 448頁) 249-253
中學校() 258
高等女學校 259
實科高等女學校 260
盲啞學校 255
師範學校 256
高等師範學校 257
女子高等師範學校 257
臨時教員養成所 257
專門學校 261
實業專門學校 271
高等學校 262
大學 262
實業學校 268
實業補習學校 266
各種ノ學校 272
學習院 265
學齡兒童 248
中盲聾啞者 454
教員檢定 257
入學志願者及入學者 265
外國人教育、學生、生徒 274
文部省留學生 275
博士數 275
學生、生徒、兒童體格 276
男女青年團 280
青年訓練所 280
小學教員俸給 281
公學資產 281
公學收入 282
公學費 282
教員
總數 247
平均俸給(小學校) 281
教員檢定合格者
小學校教員 257

中等科教員 257
高等科教員 257
教會 289
漁業 87-93
漁業者數 87
漁船數 87
漁獲物價額 88
水産製造物價額 90
遠洋漁業 92
水産養殖 92
製鹽 93
行刑 328-329
供託事務 313
供託局職員 400
共濟組合
官業員 244
友愛組合 245
協調組合(地主、小作人) 243
基督教 289
銀行 134-143
總覽 134
日本銀行 136
橫濱正金銀行 136
日本勸業銀行 137
農工銀行 139
北海道拓殖銀行 140
臺灣銀行 141
朝鮮銀行 141
日本興業銀行 141
普通銀行 142
貯蓄銀行 143
金融
銀行 134-143
金利 146
正貨及紙幣流通高(國際表ハ 443頁) 137
信託業 144
無盡業 144
手形交換 145
清算取引 148
外國爲替相場 147
郵便爲替 148
貯金 149
振替貯金 150
貨幣 151
金利 146
日本銀行金利 136
金銀銅地金
産額 98
造幣局受入 151
輸移出入 183

—(ク)—

宮内官吏 401
區裁判取扱事件 306-310
區役所 393
郡數 393

キ、クの部

ア、イ、エ、ヲ、カ、キの部

郡役所	393
軍艦	409
勳章	
佩用數	415
褫奪	418
外國勳章年金	416
旭日勳章年金	417
金鷄勳章年金	418

—(ケ)—

刑事裁判	
總件數	315
第一審事件	315
控訴事件	315
上告事件	316
植民地	316
刑事略式事件	324
刑法犯第一審	
罪名別	317
原因別	318
年齡別	318
刑名別	320
罪名刑名別	320
受刑度數	321
加重減輕	322
外國人ニ關スル事件	325
刑法犯執行猶豫	321
刑ノ執行	332
刑務所	400
少年刑務所	334
警察	290—305
犯罪檢舉件數	290
盜難、詐欺、恐喝	292
被殺害者	292
警察署	398
計量器	116
藝妓	287
置場	287
劇場	220
現住人口(植民地)	19
現在人口(國勢調査)	
總數	18
世帯別	20
年齡配偶關係別	22
市別	35
町村別	36
民籍國籍別	37
健康保險	158—159
減輕加重	322
憲兵隊	
人員	407
取扱犯罪人員	407

—(コ)—

耕地	
反別	66

所有者戶數	67
鑛業	97—99, 111
鑛區	97
鑛產	98
石炭	111
石油	111
鑛夫	
勞役人員	242
傷病扶助	242
鑛山變災死傷人員	242
工業	100—110
製造場	100
各種工業職工數	102
生產	
內國	104
列國	434
蠶絲生產高	108
織物生產高	109
同種類細別	109
製糖	110
樟腦產出	110
阿片	110
工場	224
工場數	224
從業者數	241
傷害扶助	241
交通	184—209
道路	184
橋梁	184
港灣	206
通信	185
鐵道(國際表ハ 441頁)	190
軌道	195
諸車	196
航空	199
海運(列國ノ船舶ハ 440頁)	200
事故	194, 196, 199, 208
汽船會社營業狀況	209
港灣	206
航空	199
航路標識	200
旅行者救濟	
病人	218
死亡人	218
高等女學校	259
高等學校	263
高等科教員檢定	257
高等師範學校	257
公設職業紹介	232
公學資產	281
公學收入	282
公學費	282
公吏	357—403
公證	
公證人	400
事務	312

公館人員	
在外本邦公館	410
在本邦外國公館	65
控訴院取扱件數	
民事	307—312
刑事	316
小賣物價	123
小包郵便物	186, 187
小船	205
小作爭議	238
小作人組合	243
小作人、地主協調組合	243
國籍及民籍別人口	37
國籍變更	58
國有財產	376
國庫支辨地方費	379
國債	
內國	375
列國	447
國際表	420—449
娛樂場	220
婚姻、離婚、出生、死産、死亡	38
總數	
市別	39
內地外ノモノ	41
婚姻	
種類別	42
各自ノ年齡別	43
國際表	425
財政	336—388
歳入歳出(國際表ハ 446頁)	342—353
特別會計	354—361
豫算純計額	362—365
租稅	366—374
國債(國際表ハ 447頁)	375
稅關收入	375
國有財產	376—377
預金部預金及貸付	378
國庫支辨地方經費	379
地方財政	380—388
歳入歳出總額	336
歳入經常、臨時部別總額	336
歳入經常部款項別	338
歳入臨時部款項別	338
歳出所管別總額	337
歳出經常部款項別	339
歳出臨時部款項別	344
裁判	
裁判所及職員	400
民事々件	306—315
刑事々件	315—325
在監人	
人員	333
罹病	333
作業	334
受刑者罪名及刑名別	330

—(サ)—

受刑者刑期別	330
新受刑者罪名別	330
" 犯數別	330
" 刑名別	332
" 年齡別	332
" 飲酒關係	332
" 教育程度	333
" 身分別	333
" 職業別	332
" 養育者別	333
在外公館官吏	401
在本邦外國公館人員	65
災害	292, 300
搾乳	80
雜誌、新聞	285
産婆	293
産業組合	94
山林	83—86
商業	117—133
商業會議所	117
取引所	117
清算取引	118
米穀取引	119
卸賣物價(國際表ハ 444頁)	120
小賣物價	123
商事會社	126, 130, 131
齒科醫師	293
事故	
鐵道	194
諸車	196
航空	199
船舶	208
死傷	
災害事故(警察)	292
水災	300
潮災	300
暴風雨	300
其他(鐵道、諸車、航空、船舶ハ事故ノ項參照)	
死亡	
月別	47
年齡別	47
乳兒死亡	48
原因別	49
職業別	50
死因月別	51
死因年齡別	52
死因地方別	53
列國死亡	425
死産	
內國	46
列國	428
市歳入歳出	382
" 基本財産	386
市町村數	393
" 人口階級別	34
" 會數	392
" 役場數	393

—(シ)—

市町村吏員	402—403
市別現在人口及世帯數	35
〃 人口動態	39
支廳	293
恤救	216
失業統計調査	228—231
實業補習學校	266
實業學校	268
實業專門學校	271
實科高等女學校	260
執達吏	400
執達吏事務	313
執行猶豫	
刑法犯	321
特別法犯	323
自轉車	196, 198
自動車	197, 198
兒童數	247
〃 體格	276
師範學校	256
賜杯	416
司法	
裁判	312—325
登記	326—327
行刑	328—333
司法官署及職員	398, 400
借地、借家調停	310
爵位	415
社會事業	
施設類別	210
獎勵助成金	212
事業費	213
關係地方債	214
罹災救助基金	213
恤救	216
養育棄兒	217
行旅病人及死亡人	218
勞務者救済	219
宗教	287—289
神社	287
神官神職	287
寺院及住職	288
佛道教會説教所	289
神道	289
基督教	289
狩獵免狀下附數	285
出版圖書	285
衆議員	
議員選舉	290
議員職業別	291
種痘	294
出生	
身分別	45
地方別	46
列國表	424

所得稅	
納稅人員	366
稅額	367
金額	370
第三種所得稅種類別	368
傷害	
工場ニ於ケル	341
鑛山ニ於ケル	242
職業紹介	
公設	232
營利	234
日傭	235
家庭(内職)	235
消費組合	246
消防	403
樟腦	110
諸車	
車數	198
事故	196
小學校	
校數	249
學級	249
教員	250
兒童	252
教員檢定	257
教員俸給	281
國際表	448
女子高等師範學校	257
女子青年團	280
少年刑務所	334
人口	18—65
現在人口	18, 20—31, 35—37
列國人口	420
〃 主要都市人口	421
現住人口(植民地)	19
本籍人口	18
職業別	24—28
推計人口	32
人口階級別市町村數及人口	34
動態	38—55
生命表	56
北海道移住者	58
渡航及歸航者	58
國籍變更	59
移民	59
在外本邦人	61
在留外國人	64
列國人口增加率	429
人力車	196, 198
人車軌道	195
森林面積	84
神社	287
神官神職	287
神道	289
信託	
會社數	144
種類別	144
契約高	144
擔保附社債信託	144
新聞、雜誌	285

—(ス)—

推計人口	32
水道	298
水産	
産額	88
製造物價額	90
養殖	92
水利組合	
普通水利組合	381
水害豫防組合	381
棄兒(養育)	217

—(セ)—

生命表	56
製鹽	93
製糖	110
製藥者	293
精神病	297
清算取引	118
正貨現在高(國際表、442頁)	440
生計費指數(〃)	442
生徒	
生徒數	247
體格	276
青年團	280
青年訓練所	280
稅關收入	375
石炭	111
石油	111
船舶	201—209
入港船舶	201
貿易船出入	164
噸數別	202
船質	202
船齡	203
地方別	204
帆船	205
小船	205
造船所	206
船渠	206
遭難	208
國際表	440
船員手帳受有者	207
海技免狀受有者	207
專門學校	261
選舉	389—392
貴族院互選	389
衆議員	390
府縣會	391
市町村會	392

—(ジ)—

租稅	366—374
所得稅	366
地租	371
營業收益稅	373
爭議	236—239
勞働	236
小作	238
相場	
外國爲替	147
米穀	119
壯丁	404—406
身長	404
體重	405
體格	406
教育程度	406

造船所	406
遭難船舶及死傷人員	208
—(タ)—	
大審院取扱件數	
民事	307, 312
刑事	316
大使館	401
大學	262
臺灣銀行	134, 141
體格	
學生、生徒、兒童	276
壯丁	404

—(チ)—

地租	
納稅人員	371
地目別	372
地方財政	380—388
道府縣歲入歲出	380
市歲入歲出	382
町村歲入歲出	384
市町村基本財産	386
水利組合	387
地方債	388
地方鐵道	
運輸	190—193
職員	194
地方海員審判所	207
地方裁判所取扱件數	
民事	310—312
刑事	315—322, 325
中學校	
內國	258
列國	448
中學科教員檢定	257
朝鮮銀行	134, 141
朝鮮人蔘	110
貯蓄銀行	134, 143
徵兵檢査	404—406
町村別現在人口及世帯	36
町村歲入歲出	384
町村基本財産	386
賃銀	
職工平均賃銀手當賞與額	240
鑛夫平均賃銀手當賞與額	241

—(ツ)—

通貨流通高	
內國	137
列國	443
—(テ)—	
停車場	190
手形交換	145
鐵道	184
運輸	184—189
職員	194, 198
事故	194
營業收支	194
電氣	
事業數	113
發電力	113
發電所	113
需用	114
軌道	195
電信	
局所	185
通數	186—187
線路	188
職員	398

電話	頁
局所	185
加入者通話	189
線路	188
職員	398
傳染病(法定)	296
—(ト)—	
道路	184
同業組合及同聯合會	106
東洋拓殖會社經營土地	67
燈臺	200
道府縣	
歲入歲出	380
選舉	391
登記	
件數	326
登録稅及手數料	327
商事會社細別	326
職員	400
登錄	
實用新案	112
意匠	112
商標	112
登記登録稅	327
盜難	288
特許	
發明特許	112
阿片吸食特許者	110
特別會計	354—361
歲入歲出所管別	354
朝鮮總督府所管款項別	356
臺灣總督府所管款項別	357
樺太廳所管款項別	359
關東廳所管款項別	360
南洋廳所管款項別	361
特別法犯	
罪名及刑名別	323
執行猶豫	323
渡航者及歸航者	58
屠畜	79
圖書出版	285
圖書館	286
土地	8—13, 66—67
位置	8
周圍	8
面積	8
民有地	10
耕地反別	66
耕地所有者戶數	67
東拓經營土地	67
度量衡	116
取引所	
會員組織取引所	117
株式組織取引所	117
清算取引所	118
米穀取引所	119
ドック(船渠)	206
—(ニ)—	
荷車	197, 198
日本銀行	134, 136
日本勸業銀行	134, 137—138

日本興業銀行	134, 141
乳兒死亡	48
乳肉製品	81
入港船舶	
總數	201
貿易船	164
入學志願者及入學者	265
入監出監人員	329
—(ネ)—	
年金	
受給人員	412
受領權裁定人員	413
警察官	414
拂渡高	414
旭日勳章年金	417
金鷄勳章年金	418
郵便年金	159
—(ノ)—	
農業	66—75
耕地反別	66
耕地所有者戶數	67
農家戶數	67
農產物	68
東拓經營土地	67
養蠶	74
果實	82
農家戶數	67
農產物	68—73
作付反別(國際表> 430頁)	68
收穫高	70
反當收穫高	72
價額	73
農工銀行	134, 139
—(ハ)—	
賣藥	
方數	293
請賣人	293
行商人	293
博士	275
馬車	197, 198
馬車軌道	195
發電所	113
發電力	113
發明特許	112
帆船	205
犯罪橫擧件數	284
犯罪搜查終局事件	315
判決確定被告人	324
—(ヒ)—	
飛行	199
被殺害者	288
日傭勞働者紹介	235
表彰	419
病院	293
—(フ)—	
府縣	
歲入歲出	380
府縣會選舉	391
武官人員及年俸	398
扶助料	412—414
佛教	288, 289

物價	頁
卸賣	120
小賣	123
普通銀行	134, 142
文官	
人員及年俸	394
官廳別	394—397
休職	397
—(ヘ)—	
米穀取引	119
辯護士	400
—(ホ)—	
貿易	161—183
總額(輸移出入)	161
内外國產別(輸出入)	163
種類別(〃)	163
港別(〃)	164
月別(〃)	164
船舶出入	164
國別(輸出入)	165
品目別(輸移出入)	167
品目別國別(輸出入)	177
移出入(北海道)	182
輸移出入(南洋)	182
金銀輸移出入	183
國際表	438
褒章	419
褒狀	419
北海道拓殖銀行	134, 140
保安林	86
保險	
官營	156
民營	152
健康保險	158
郵便年金	159
墓地	299
本籍人口	18
—(マ)—	
埋葬(火葬、墓地)	299
待合茶屋	287
—(ミ)—	
民有地	
有租地	10
免租地	11
年期地	12
特別免租地	13
民籍及國籍別人口	37
民事裁判	306—315
—(ム)—	
無盡業	144
—(メ)—	
面積	
內國	8
列國	420
免狀受有者	
海技免狀	207
航空乘員免狀	199
教員檢定合格者	257
—(モ)—	
盲聾啞	
學齡兒童中	254
學校數	255
—(ヤ)—	
藥劑師	293

藥種商	293
—(ユ)—	
郵便	
局所	185
職員	398
郵便物	186
線路	188
爲替	148
貯金	151
振替貯金	150
年金郵便	159
有爵者	415
有位者	415
遊藝場	220
友愛組合	245
輸入稅	275
—(ヨ)—	
幼稚園	253
養蠶	74
養育費	217
養育棄兒	217
橫濱正金銀行	134, 136—137
豫審終局被告人	315
豫算純計額	362
預金部預金及貸付金	378
寄席	220
—(リ)—	
陸軍	398, 406—409
現役軍人	398
衛戍病院	406
軍法會議	408
衛戍刑務所	408
各學校	409
離婚	
種類別	44
夫婦關係繼續期間別	45
國際表	425
罹災救助	214
流通高(正貨及紙幣)	137
留學生(文部省)	275
料理屋	305
領事館	401
林業	83—86
林野面積	83
森林面積	84
林產物	84
狩獵免狀下附數	85
保安林	86
—(ロ)—	
勞働	221—246
勞働統計實地調查結果	221—223
失業統計調查結果	228—231
工場及從業者	224—227
職業紹介	232—235
爭議	236—239
賃銀	240
傷害(工場、鐵山)	241—242
勞働組合等	243
〃 組合員(列國)	445
共濟組合	244, 245
消費組合	246
勞務者共濟	219

フ、ヘ、ホ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、リ、ロの部

度量衡比較及合數並貨幣純分比價換算表

メートル法

度

耗「ミリメートル」(「メートル」ノ千分ノ一)	厘	3.30000
糶「センチメートル」(「メートル」ノ百分ノ一)	分	3.30000
粉「デシメートル」(「メートル」ノ十分ノ一)	寸	3.30000
米「メートル」	尺	3.30000
軒「キロメートル」(千「メートル」)	町間	550.000-9.10.000

量

壺「センチリットル」(「リットル」ノ百分ノ一)	勺	0.55435
粉「デシリットル」(「リットル」ノ十分ノ一)	合	0.55435
立「リットル」(升ノ二千四百〇一分ノ千三百三十一)	升	0.55435

衡

匙「ミリグラム」(「キログラム」ノ百万分ノ一)	毛	0.26667
匙「センチグラム」(「キログラム」ノ十万分ノ一)	毛	2.66667
匙「デシグラム」(「キログラム」ノ一万分ノ一)	厘	2.66667
瓦「グラム」(「キログラム」ノ千分ノ一)	分	2.66667
瓦「キログラム」(貫ノ十五分ノ四)	貫	0.26667

ヤード、ポンド法

度

吋「インチ」(「ヤード」ノ三十六分ノ一)	寸	0.83820
呎「フット」(「ヤード」ノ三分ノ一)	尺	1.00584
碼「ヤード」(尺ノ一萬二千五百分ノ三萬七千七百十九)	尺	3.01752
鎖「チェーン」(二十二「ヤード」)	尺	66.38544
	町間尺	11.0.38544
哩「マイル」(千七百六十「ヤード」)	尺	5310.835
	町間尺	14.45.0.835=0.40979

量

瓦倫「ガロン」(升ノ五萬分ノ十萬四千九百二十三)	升	2.09846
--------------------------	---	---------

衡

匁「オンス」(「ポンド」ノ十六分ノ一)	匁	7.56000
封度「ポンド」(貫ノ三千百二十五分ノ三百七十八)	匁	120.9600
噸(英)「トン」(二千二百四十「ポンド」)	貫	270.4504
以上ノ農商務省中央度量衡検定所編纂度量衡比較ニ據ル		
連	町	16.975
佛噸	貫	266.6667
擔「ピコル」	斤	100

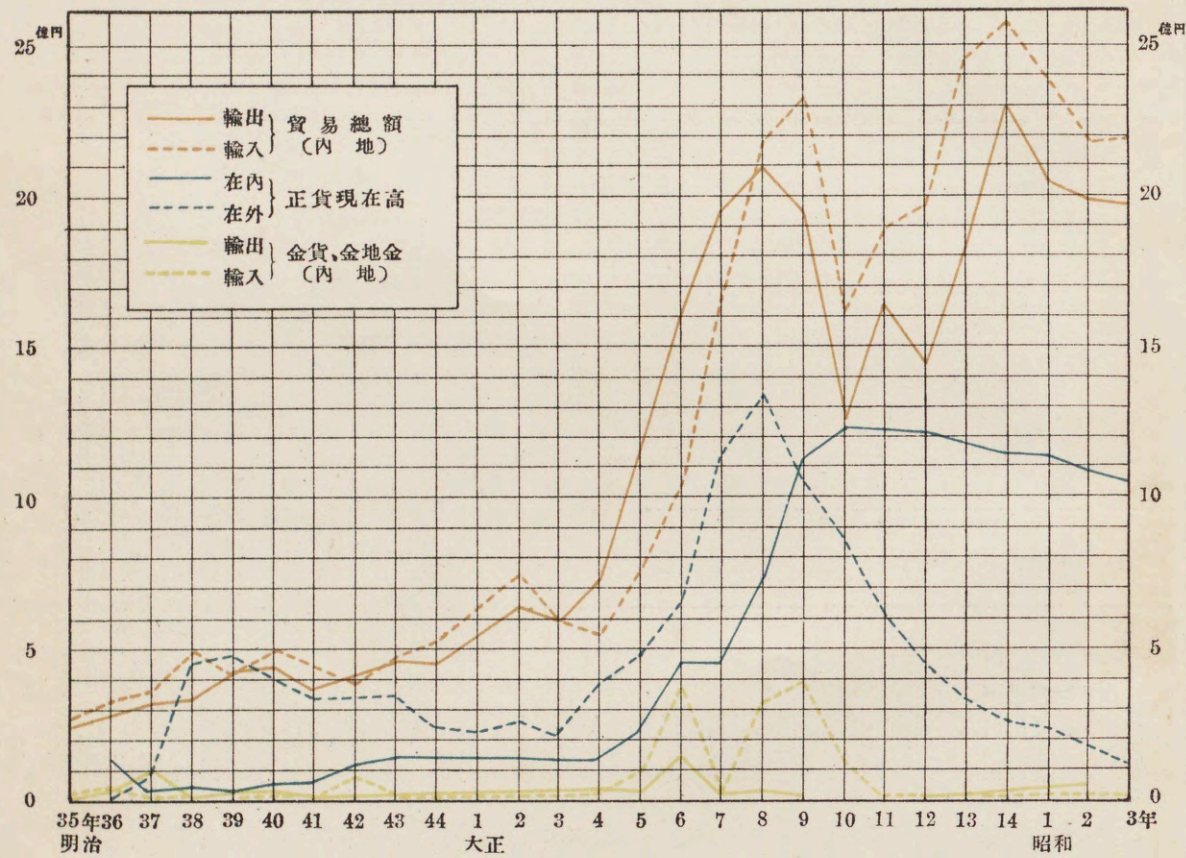
合數其仙

哥(グロツス)	匁	144
打(ダズン)	箇	12
甲(臺灣)	反	9.78
支那畝(關東州)	反	0.61
支那石()	石	2.5-約600

貨幣

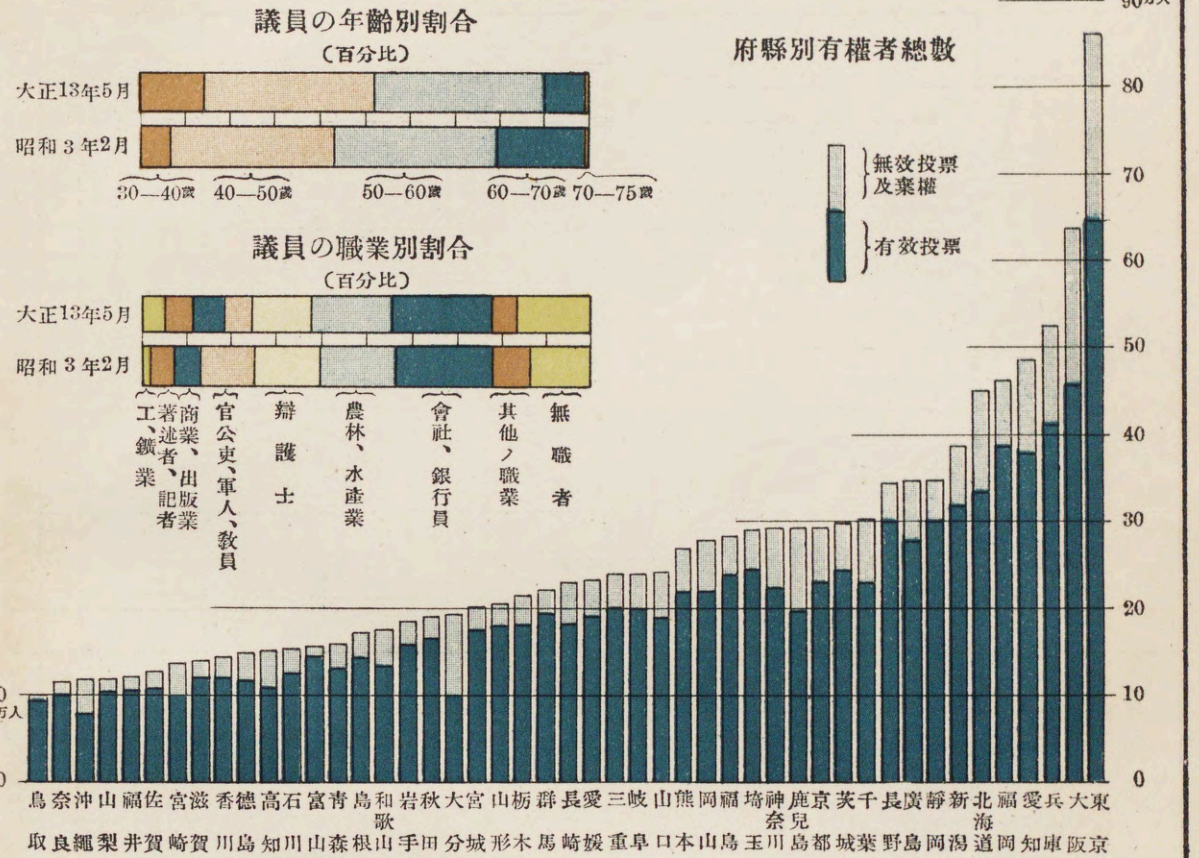
英 領 印 度 (留 比)	円	0.97632
暹 羅 (チ カ ル)		0.75102
土 耳 古 (土 耳 古 磅)		8.81964
埃 地 利 (シ リ ン グ)		0.28230
白 耳 義 (法)		0.38710
勃 爾 牙 利 (レ ヴ ァ)		0.38710
チエツコスロヴアキ (コ ル ナ)		0.40651
ア		
ダ ン チ ツ ヒ (ダンチツヒグアルデン)		0.39053
丁 抹 (ク ロ - ン)		0.53764
エ ス ト ニ ア (エ ス ト ニ ア 麻)		0.00538
芬 蘭 (芬 蘭 麻)		0.05053
佛 蘭 西 (法)		0.38710
獨 逸 (麻)		0.47790
希 臘 (ド ラ グ マ)		0.38710
洪 牙 利 (ク ロ - ン)		0.40651
伊 太 利 (利)		0.38710
ラ ト ヴ ァ イ ア (ラ ツ ト)		0.38710
リ ス ア ニ ア (リ タ ス)		0.20062
ル ク セ ン ブ ル グ (法)		0.38710
和 蘭 (グ ル テ ン)		0.38710
諾 威 (ク ロ - ン)		0.53764
波 蘭 (ツ ロ テ イ -)		0.38701
葡 萄 牙 (ミ ル レ イ)		2.16774
羅 馬 尼 亞 (レ イ)		0.38710
露 西 亞 (留)		1.03232
セルブクロアート (テ イ ナ - ル)		0.38710
スロヴエーヌ (レ セ タ)		0.38710
西 班 牙 (レ セ タ)		0.38710
瑞 典 (ク ロ - ン)		0.53764
瑞 西 (法)		0.38710
英 吉 利 (磅)		9.76321
加 奈 陀 (加 奈 陀 弗)		2.00620
コ ス タ リ カ (コ ロ - ネ)		0.93428
玖 馬 (弗)		2.00620
ハ イ テ イ - (グ - ル テ)		0.40124
墨 西 哥 (金 ペ ソ)		0.99997
北 米 合 衆 國 (弗)		2.00600
亞 爾 然 丁 (金 ペ ソ)		1.93562
ボ リ ヴ ァ イ ア (ボ リ ヴ ァ イ ア ノ)		0.78106
伯 刺 西 爾 (金 ミ ル レ イ)		1.09610
智 利 (金 ペ ソ)		0.24408
哥 倫 比 亞 (金 ペ ソ)		1.95263
パ ラ グ ア イ (金 ペ ソ)		1.93562
祕 露 (リ プ ラ)		9.76321
ウ ル グ ア イ (レ ソ)		2.07489
ヴ ェ ネ ズ エ ラ (ボ リ ヴ ァ イ ア)		0.38710
埃 及 (埃 及 磅)		9.91654
南 阿 聯 邦 洲 新 西 蘭 (磅)		9.76321

貿易總額、正貨現在高及金貨、金地金輸出入額

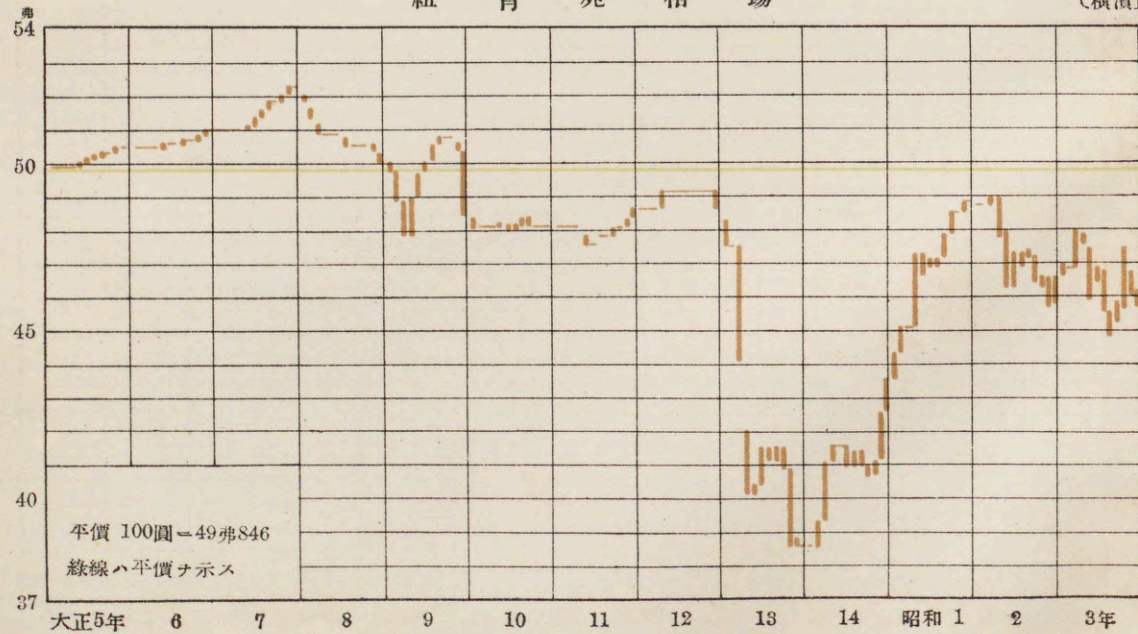


第一回普通選舉の結果 (衆議院)

(昭和3年2月20日)



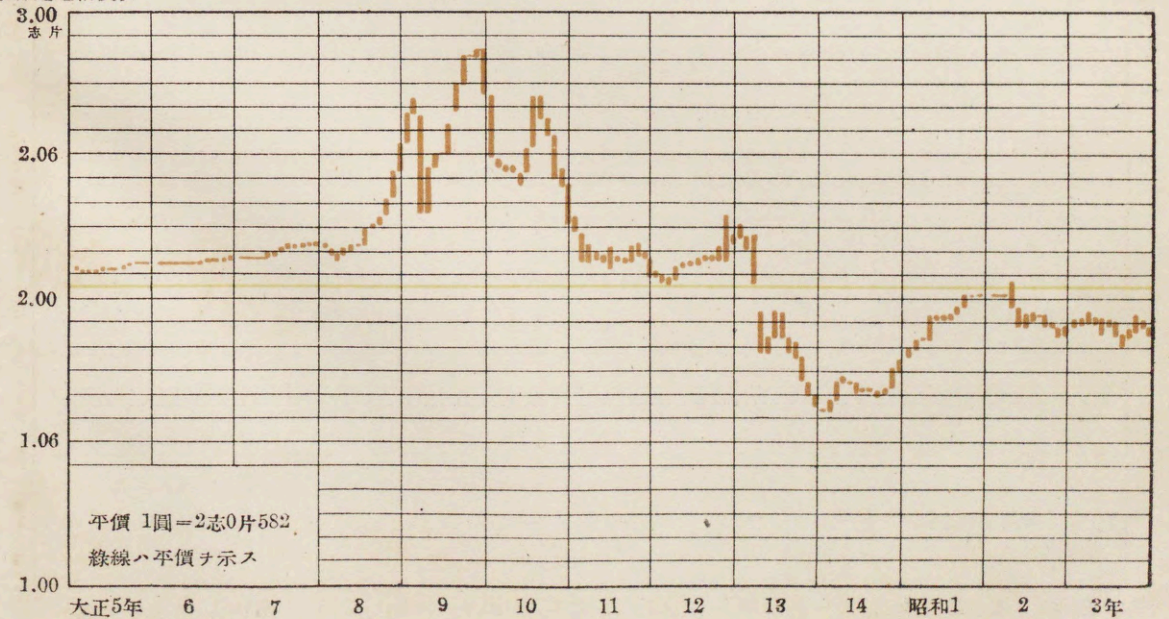
紐育宛相場



外國爲替相場 (大正5年—昭和3年)

(横濱正金銀行電信信實)

倫敦宛相場



略 說

1. 土地及氣象	2
2. 人 口	3
3. 農林及水產	6
4. 鑛業及工業	10
5. 商業及金融	12
6. 貿 易	17
7. 交 通	19
8. 社 會 事 業	20
9. 勞 働	21
10. 教育及宗教	23
11. 警察、衛生及災害	27
12. 司 法	28
13. 財 政	30
14. 選舉、官公吏、軍事及恩賞	32

I. 土地及氣象 (統計表8—17頁参照)

土地

我が帝國は極南臺灣高雄州恒春庄七星岩の南端北緯21度45分より極北千島列島阿頼度島の最北緯50度55分に至り、極西臺灣澎湖廳望安庄花嶼の西端東經119度18分より極東千島列島占守島の東端東經156度30分に至る間に於て亞細亞大陸の東に沿ひ斜に東北より西南に點在する樺太島の南半、千島、北海道、本州、四國、九州及臺灣を包含する所謂日本列島と大陸である朝鮮半島から成り、樺太の北部は露西亞、朝鮮の北部は露西亞及支那と境を接する外四面皆海で西は支那、南は比律賓、東は亞米利加大陸と遙に相對して居る。

【面積】 帝國の總面積は43,747方里餘で其中、内地は5割7分を占め、朝鮮は3割3分、臺灣と樺太は各々5分で樺太の方が臺灣より8方里廣い。

列國中面積の最も廣いのは露西亞の136萬方里(内、歐露は33萬方里)で之に亞ぐは支那の72萬方里、伯刺西爾の55萬方里、北米合衆國の50萬方里、亞爾然丁の19萬方里等である、帝國内地の面積は列國中の第18位で土耳其、瑞典、パラグアイは我が國の上に、波蘭、芬蘭、諸威は我が國の下に在る、又帝國の總面積を列國の屬領を含めた面積と比較しても尙等位である。

面積を府縣別に見ると最も廣いのは北海道の5,735方里で内地面積の2割3分を占め他に1,000方里以上の府縣はない。岩手、福島、長野、新潟は各800方里以上で面積の廣い地方に屬し、佐賀、沖繩、神奈川、東京、香川、大阪は何れも100方里臺で面積の狭い地方である。

【民有地】 昭和三年一月一日に於ける内地の民有地は1,915萬町歩で總面積の五割弱に當り逐年増加の趨勢である。各府縣の面積中民有地の割合を見ると最も多いのは山梨の9割2分で之に亞ぐは神奈川の8割餘、香川、千葉、沖繩、鳥根、埼玉の各7割餘、其の最も少いのは宮崎の3割未滿、秋田、青森、北海道、大分の3割乃至4割で他は5割内外の地方が多い。

民有有租地を地目別に見ると田は2,973千町歩、畑は2,809千町歩、宅地は416千町歩、山林は8,591千町歩、原野及牧場は1,761千町歩、鹽田、鑛泉地、池沼及雜種地は35千町歩で之を前年に比較すると田は2千町歩、畑は25千町歩、宅地は1千町歩、山林は59千町歩、原野及牧場は42千町歩を夫々増加し、鹽田、鑛泉地、池沼及雜種地は殆ど變りない。

【北海道地積】 民有地を除きたる北海道地積は昭和二年末に6,192千町歩在り内未開地、賣拂未成功地、貸付中未開地、未開地未處分地は大正十四年に652千町歩、總地積の7分を占めたが最

近には無くなつた。

氣象

昭和三年に於ける平均氣壓は朝鮮、滿洲及支那に高くて762耗乃至3耗を示し最高は大連の763.4耗である。本州は761耗内外のもの多く、北海道樺太及南洋は氣壓概して低く、最低はパラオの757.0耗である。臺灣及沖繩は760乃至2耗臺が多い。

【氣溫】 昭和三年中平均氣溫の攝氏20度を超ゆる地方は臺灣、沖繩及小笠原島及南洋で是等の中溫度最も高いのはパラオの27.1度である。四國、九州に屬する諸地方、銚子以西に位する太平洋沿岸諸地方は概ね15度内外、中國近畿兩區に屬する諸地方は14度内外、東山區に屬する諸地方は10度内外から13度以上のものがあつて、各地方間の差甚しく、奥羽地方は10度内外、北海道は南方の一部8乃至9度であるが5度内外の地方多く、樺太は4度臺以下で敷香の如きは1度未滿である、朝鮮の南部は10度乃至13度稀に14度を示すが最北部は3度に降り、滿洲及支那北部は10度内外、上海は15.6度、漢口は17度である。

氣溫の最高極は臺灣では臺北の37度1分、九州では佐世保の35度1分、支那では天津の41度4分で濟南の40度3分、芝罘40度2分漢口の39度1分之以亞で高い。最低極は北海道では旭川の零點下32度2分、樺太は落合の零點下32度6分、朝鮮では中江鎮の零點下40度0分、滿洲では奉天の零點下31度6分である。

【降水量】 昭和三年中の降水量は地方に依て甚しい差異がある、總量3千耗を超ゆるは、八丈島、高知、溫泉岳、名瀬、2千耗を超ゆるは足尾、秩父、銚子、勝浦、布良、館山、横須賀、高田、金澤、福井、敦賀、濱松、津、京都、潮岬、東平、室戸、足摺、佐賀、長崎、佐世保、嚴原、富江、熊本、宮崎、鹿兒島、那覇、石垣島、臺北、臺中、花蓮港、臺南、恒春の諸地方にして本州は概ね千乃至2千耗、北海道は800乃至1千耗、樺太は500乃至700耗で少雨の地方である、朝鮮、滿洲、支那も亦少雨の地方が多い。南洋はボナペ5千耗臺、パラオ4千耗臺で雨量多い。

【風】 平地に於ては各地の風速に甚しき逕庭なく1乃至3米のものも多く、唯紗那、羽幌、壽都、筑波山、新潟、八丈島、長津呂、伊吹山、四阪島、室戸、足摺、溫泉岳、那覇、澎湖、眞岡、青島は風速急で、何れも毎秒平均5米以上である、最大風速も亦地位に依て甚しき差異あり30米以上は紗那、壽都、筑波山、勝浦、八丈島、長津呂、伊吹山、四阪島、足摺、長崎、溫泉岳、那覇にして他は30米未滿の地である。

II. 人

口 (表18—65頁参照)

人口靜態

大正十四年國勢調査の結果に依る人口は帝國總數83,457千人で中、内地は59,736千人(7割2分)朝鮮は19,522千人(2割3分)、臺灣は3,993千人(5分)樺太は20千人(2厘)である、又同時に調査した關東州及南滿洲鐵道附屬地の人口は1,055千人、南洋委任統治区域内の人口は56千人である。

歐米諸國最近の國勢調査に依ると北米合衆國は10,571萬人(大正九年一月一日調)獨逸は62,539千人(大正十四年六月十六日調)英吉利は44,248千人(大正十年六月二十日調)佛蘭西は40,743千人(昭和元年調)である、又推計に依る支那の人口は43,609萬(大正十二年)と稱し、露西亞の人口は146百萬(歐露昭和元年)と報じて居る、即ち列國中我が帝國の人口は第五位に在る、内地人口の増加率大正九年乃至十四年一年平均は1,000人に付男14.040、女12.931、其の平均13.487、朝鮮は26.168、臺灣は18.499、樺太は184.808である。

【男女別】 同調査の結果に依れば男女の割合は内地及内地外の各地域何れも男子は女子に超過するが其の程度は一様でなく女100に付男の割合内地は101で男女殆ど均衡を保ち、朝鮮は106、臺灣は106、南洋は115で、男子超過の程度未だ甚だしくないが、樺太は150、關東州は157で何れも男子超過の程度甚だ高い。

【年齢別】 年齢別人口を零歳以上14歳、15歳以上59歳、60歳以上の三大階級に大別して其の割合を見ると全人口1000中零歳以上14歳は3割7分、15歳以上59歳は5割6分、60歳以上は8分で各階級相互の割合が保たれて居る年齢構成である。

人口1,000人中6歳以上14歳の學齡人口の割合は2割、17歳以上40歳迄の兵役義務年齢人口は1割8分男總數に對すれば3割5分、15歳以上50歳の妊孕年齢女人口は2割4分女總數に對すれば4割8分、14歳以上の犯罪責任年齢人口は6割3分である。

【配偶關係】 人口1,000人中有配偶者の割合は4割、未婚者は5割2分、死別の者は7分、離別の者は1分の割合である。

【府縣別人口】 各府縣人口は甚だ不同で最も多いのは東京府の4,485千人、其の最も少いのは鳥取縣の472千人で最多と最少との比は8と1に當る、人口200萬以上300萬は大阪、北海道、兵庫、愛知、福岡、100萬以上、200萬は新潟、静岡、長野、廣島、鹿兒島、福島、神奈川、茨城、京都、千葉、埼玉、熊本、岡山、長崎、岐阜、群馬、三重、愛媛、山口、栃木、宮城、山形、100萬以下は青森、岩手、秋田、富山、石川、福井、山梨、滋賀、奈良、和歌山、鳥取、島根、徳島、香川、高知、佐賀、大分、宮崎、沖繩である。

尙一府縣平均人口は127萬人で平均以上の府縣は右の内熊本縣

より以上列記の18府縣、平均以下の府縣は同じく岡山縣以下29縣である。

【人口密度】 内地人口密度は1方に付2,417人で地方に依り甚だしく不同であるが最も稠密なのは東京の32,289人で大阪の26,493人は東京の密度に近く、遙に降て神奈川の9,292人、福岡の7,212人、愛知の7,077人、香川の5,853人、埼玉の5,655人は相亞で人口稠密の地方に屬し、4,000人以上5,000人の府縣は千葉、京都、兵庫、佐賀、長崎、3,000人以上4,000人は茨城、静岡、沖繩、2,000人以上3,000人は宮城、栃木、群馬、新潟、富山、石川、福井、山梨、三重、滋賀、奈良、和歌山、鳥取、岡山、廣島、山口、徳島、愛媛、熊本、大分、鹿兒島、1,000人以上2,000人は、青森、秋田、山形、福島、長野、岐阜、鳥根、高知、宮崎、1,000人以下は岩手の912人、北海道の437人で特に人口稀疏である。

一世帯に付人口は全國平均5人で、之を地方別に見ると大體三箇の分野がある、即ち富山、長野、静岡以北、北海道に至る各地方は何れも5人以上6人で殊に東北地方に至るに従ひ6人に近いものが多い、右分界縣に接する石川、岐阜、愛知以西の畿内、中國、四國及九州の大分、鹿兒島及沖繩は概ね5人以下で就中近畿、中國に屬する地方等が少く、奈良及九州に於て福岡、長崎、宮崎は全國平均と同位である。但し5人以上の分野中獨り東京は4人6分を示し、又5人以下の分野に在るから前者の如く著明ではないが大阪の4人5分、京都、兵庫の如き亦一世帯平均人口少く4人6分である。

蓋し前項の人口密度及一世帯平均人口の多少は固より天然上の影響のみでなく社會状態及經濟事情の然らしむる所である、東京、大阪其他大都市を包含する地方に於ては人口稠密で一世帯の人口少いのは人口の都會集中經濟組織の變遷に伴ふ小家族制の反映と見ることが出来るし、東北地方は人口稀疏で一世帯人員の多いのは天然の影響と一面社會状態、經濟組織に於て大に異なるものがあるからである。

【職業別人口】 大正九年國勢調査結果に依れば、總人口中農業最も多く48%を占め、工業の19%、商業の13%之に亞いで多く他は10%以下である。即ち農業27,138千人、水産業1,450千人、鑛業938千人、工業10,738千人、商業7,313千人、交通業、2,549千人公務自由業3,208千人、無職業1,498千人、家事使用人40千人其他1,091千人にして内本業者は27,378千人49%、本業なき従屬者27,950千人(50%)、家事使用人635千人(1%)である。本業者の割合比較的高きは農業で52%を示して居るが商業に於ては同割合低く44%となて居る。

【**都鄙別人口**】人口の多少に依て市町村を都鄙別に分て見ると村落（人口 5,000以下）人口は 26,413千人で 4割 4分、都會（人口 5,001以上）人口は 33,323千人で 5割 6分、右の内人口 100,001以上の大都會人口は 8,741千人で、1割 5分を占めて居る。都鄙人口の割合を第一回調査に比較する村落の減少するに反し都會人口の増加急速である。

全國 101 市中人口最も多いのは大阪市の 2,114 千人で之に亞ぐは東京市の 1,995 千人、名古屋市の 769千人、京都市の 680千人、神戸市の 644千人、横濱市の 406千人で、尙廣島、長崎、函館、金澤、熊本、福岡、札幌、仙臺、吳、小樽、鹿兒島、岡山、八幡、新潟、堺は何れも人口 100,001 以上の大都會である。

【**民籍及国籍別人口**】大正九年國勢調査の内地の現在人口中 9割 9分 9厘は内地人で内地人以外のものは僅々 1厘に過ぎぬ、内地人の中北海道アイヌは 15,575人、内地に在る朝鮮人は、40,755人、臺灣人は1,703人、樺太人は31人、南洋人 3人、外國人35,569人である。

外國人を洲別に見ると亞細亞洲人 22,451人、歐羅巴洲人 8,794人、北亞米利加洲人 3,984人、南亞米利加洲人 68人、其他 272人である。

人口動態

昭和三年内地に於て行はれた婚姻は 499,555 件で前年に比し 11,705 件を増加した。人口 1,000 に對する割合は 8.04 で前年に比して 0.08 高いが之を前數年に比べると漸次低下の歩調を示して居る。

昭和元年に於ける歐洲諸國の婚姻率を見ると人口 1,000に付白耳義は 9.6 (大正四年)獨逸は 7.7 佛蘭西 18.5 洪牙利9.0 埃地利は 8.1 (大正三年) 伊太利は 7.4 丁抹は 7.6 (大正四年) 和蘭は 7.4 英克蘭威爾斯は 7.2 瑞西は 7.1 (大正四年) 西班牙は 7.3 等である。歐洲諸國の大戦前に於ける婚姻率は概して我國より低かつたが近時我國より甚しく高きものゝあるのは大戦後に於ける一變象と見るべきである。

道府縣中婚姻率の概して高いのは東北、北陸、四國地方に屬する諸縣で其の率の低いのは東京、京都、兵庫、神奈川、大阪等の府縣である。

同年に於ける婚姻の種類は普通の婚姻 9割 2分、入夫婚姻 3分 婚養子婚姻 5分、之を既往に比較すると其の歩調甚だ緩慢ではあるが普通婚姻は漸増し婚養子婚姻は漸減し入夫婚姻は減少の傾向である。

婚姻者の年齢を見るに男は 25歳以上 29歳最も多く 4割を占め 20歳以上 24歳の 2割 9分、之に亞ぎ、殘餘の 3割 1分は 20歳迄及 30歳以上の者で、50歳、60歳の高齡者で婚姻する者も一萬數千ある、女は 20歳以上 24歳が最も多くて 4割 9分を占め 15歳以上 19歳の 2割 4分、之に亞ぎ、殘餘の 2割 7分は 15歳迄及 25歳以上

の者で、50歳、60歳高齡者で婚姻する者も數千ある。婚姻者の年齢を既往に比較すると男女共に漸次遅れて行く傾向である。

昭和二年朝鮮、臺灣及關東州に於ける婚姻總數は 229,429 餘件で内朝鮮 175,953件（内地人 174,653件）、臺灣45,572件（内地人 44,749件）關東州 6,698件（内地人 5,573件）である。

【**離婚**】昭和三年内地に於て行はれた離婚は 49,119 件で前年に比し 1,507 件を減じ、人口 1,000 に對する割合は 0.79 で前年より 0.04 を減じた。又婚姻千に對する離婚割合は 98 で前年に比し 6 を減少した。

昭和元年に於ける歐洲諸國の離婚率を見ると人口 1,000 に付英國 0.1 獨逸、佛蘭西共に 0.5 丁抹 0.6、和蘭、白耳義共に 0.3 等で何れも我國より遙かに低率であるが米國は 1.5 の高率を示して居る。

我國の離婚は嘗て實數に於て 100,000 件以上、割合に於て人口 1,000 に付 2乃至 3組の高率を示して居たが其の後逐次減少し大正九年以後は一組以下の低率を示すに至つた。

道府縣中離婚率の概して高いのは東北、北陸、中國、四國に屬する諸地方及沖繩、其の率の低いのは北海道、關東、東山、近畿に屬する諸地方であつて婚姻率の多少と離婚率の多少とは殆んど兩者相伴ふて居る。

同年に於ける離婚の種類は妻が夫の家を去る場合 8割 6分夫が妻の家を去る場合 1割 1分、戸内離婚 3分である。前項婚姻の種類に於て述べた如く入夫及婚養子婚姻の割合は、1割以下であるのに離婚では夫が妻の家を去る場合 1割以上を占めて居るのは婿入婚姻に以て破鏡を招くことの比較的多いが爲である。

離婚者の夫婦關係繼續期間は一年迄 1割 5分、二年迄 1割 6分 三年迄 1割 3分、四年迄 9分、五年迄 7分、合計 5割 9分は五年迄で殘餘の 4割 1分は五年以上の割合であるから我が國の離婚は婚姻後數年の短期内に起るものが多い。

【**出生**】昭和三年内地に於ける出生は 2,136 千人で前年に比し 76 千人を増加し、人口 1,000 に對する割合は 34.4 で前年に比し 0.8 増加した。

昭和元年海外諸國の出生率を見ると人口千に付英吉利 18.3 米國 20.6 獨逸 19.5 佛蘭西 18.8 伊太利 27.2 白耳義 19.0 和蘭 23.8 瑞西 18.2 等で何れも我國より低率であるが波蘭 33.0 葡萄牙 33.2 の如く我國に略等しく高率のものもある。

道府縣中出生率概して高いのは、東北、關東、北陸に屬する諸地方、其の率の低いのは近畿、中國である。

出生兒の身分は公生 9割 3分、私生(庶子を含む) 7分、之を既往に比較すると公生の割合は漸増し私生の割合は漸減の趨勢である。

出生兒の體性は女 100に付男 104.4 で前年に比し 0.7 を増加し

た。

昭和二年朝鮮に於ける出生總數は 698,189 人(内地人 687,142 人)で臺灣は 185,195人(内地人 177,422人)同樺太 7,705人(内地人 20人)で概して次第に増加の状態に在る。

【**死産**】昭和三年内地に於ける死産は 120,191 人で前年に比し 3,269 を増加し、人口 1,000 に對する割合は 1.93 で前年に比し 0.02 を増加した。

同年に於ける死産兒の身分は公生 8割、私生(庶子を含む)2割、之を出生兒の身分に比べると甚しく公生に少くて私生に多い。

死産兒の體性は女 100に付男 120.0 で出生兒に比し男子の割合遙に多く、又死産兒の體性を既往に比較すると男子超過の程度は漸進の趨勢に在る。

【**死亡**】昭和三年内地に於ける死亡は 1,237 千人で前年に比し 23 千人を増加し、人口に對する割合は 1,000 人に付 19.9 で前年に比し 0.1 を増加したが、同率は大正九年以降概して年と共に降下の趨勢にある。

昭和元年海外諸國の死亡率を見ると人口 1,000 に付英國 11.9、米國 12.2、獨逸 11.7、佛蘭西 17.5、伊太利 16.9、白耳義 13.3、和蘭 9.8 等で何れも我が國よりは遙に低く我國の如く 20 人以上の高率を示すは一、二に過ぎない。

道府縣中死亡率の概して高いのは東北、北陸、四國の諸地方、其の率の低いのは東山、東海、九州に屬する諸地方である。

死亡の季節は夏期に最も多く冬季之に亞き秋季は少しく春季は最も少きを例とする。大正七年以來流行性感冒の爲此の常型は破られて居る。

死亡者の年齢は 4歳以下に於て全死亡の 3割 7分を占め 5歳以上に於て 6割 3分を占むる、大正七年以來同九年までは青年期及壯年期の死亡常例に比し幾分高かつたが大正十年から低下して殆んど舊に復した。

死亡原因は下痢及腸炎が最も多くて 1割 2分を占め之に亞ぐは肺炎及氣管支肺炎の 1割 2厘、腦出血腦軟化の 8分、肺結核の 6分 9厘 畸形及先天性弱質の 6分 5厘、老衰の 6分 2厘、腎臟炎の 5分 腦膜炎の 4分 3厘等で、尙病及心臓の器質的疾患に依る死亡が右に亞で多い。

昭和二年朝鮮に於ける死亡總數は 441,015 人(内地人 402,840 人)で同臺灣は 94,843人(内地人 91,678人)同樺太 5,804人(内地人 38人)となつて居る。

【**人口の自然増加**】出生死亡の差増に依る人口の自然増加は年に依り多少あるが、大體逐次増加し明治の末年より大正に入り年々 700 千人以上の増加に上つたが大正五、六年少しく減少し尙七年には大に減少して 300 千人以下となつた(流行性感冒の影響)然るに大正八年には増加し約 500 千人となり尙遞増し續けて昭和元

年には實に 940 千人に達したが、昭和三年には下つて 899 千人人口 1,000 人に付 14.5 となつて居る。

【**生命表**】生命表は行政上、企業上及學術上の用途甚だ廣い本書には生存者、死亡者、死亡率、平均餘命、死力の五種を掲げた、生存者とは同一期に生れたる男女各 100,000 人に假定し各年齢に於ける死亡率に依り年々死亡する者を控除した殘數である、死亡者とは假定 100,000 人中一年間に於ける各年齢の死亡者である、死亡率とは各年齢の死亡者を當該年齢生存者を以て除し生存者 1 人に對する比である、平均餘命とは各年齢人口の將來生存し得べき豫定年數にして、死力とは各歳に於ける瞬間の死亡率を言ふのである。

本書に掲げたる生命表は大正十年乃至同十四年の統計に基き作成せられたるものにして同表に依れば零歳に於ける死亡率は男 0.162 女 0.144 にして殆ど 80 歳の死亡率に匹敵し零歳より年齢進むに従ひ死亡率は低下し 8歳乃至 12歳に於て人生中最も安全なる時代に達す、此年齢を過ぐれば死亡率は次第に増加し男は 19歳女は 21歳に於て青年期の最高率に達する、爾後死亡率は漸次低下し 30歳附近に於ては稍安定せる状態に達するが此時代を過ぐれば死亡率は上昇を續け女に於ては 40歳附近に於て一波瀾を呈するも次第に増加する。而して零歳に於ける平均餘命は男 42.06歳女 43.20歳で諸外國に比し未だ大なる遜色を示して居る。

【**移民**】昭和三年に於ける移民渡航許可員數は 19,850 人で前年に比し 1,809 人を増加した、此内 6割 6分は移民取扱人に依るもので其渡航地は伯刺西爾最も多く 12,002 人(6割)で比律賓群島の 2,077 人(1割)秘露の 1,410人、加奈陀の 1,050 人之に亞で多く他は 1,000 人未滿である。渡航許可人員の府縣別は沖繩最多く熊本、廣島、福岡、和歌山が之に亞ぎ他は 1,000 人未滿である、其職業別は農業最多く 7割 8分を占めて居る、而して同年に於ける歸國移民數は 15,004 人である。

在外本邦人及在留外國人及移民

昭和三年十月一日現在に於ける海外在留の内地人は 717,529 人で前年の調査に比し 43,588 人を増加した。

在外本邦人を洲別に見ると最も多いのは亞細亞の 299,694 人で之に亞ぐは北亞米利加の 169,569 人、太平洋の 147,151 人、南亞米利加の 98,037 人、遙に降て歐羅巴の 2,992 人、阿弗利加は僅に 86 人である、之を前年に比べると太平洋は 5,177 人、亞細亞は 21,271 人、北亞米利加は 4,568 人、南亞米利加は 13,349 人を増加し、歐羅巴は 178 人を減少した。各州に於ける在留の男は女より多い。

【**在留外國人**】昭和三年末に於て内地に在留する外國人の數は 34,917 人で前年に比し 2,000 人を増加した、外國人の多數在留する地方は兵庫の 8,721 人、東京の 7,692 人、神奈川の 5,015 人、大阪の 3,691 人、長崎の 1,415 人、京都の 1,229 人で其他は何れ

も 1,000 人未滿で 100 人臺のものが多い。

外國人の國籍は支那の 25,963 人が最も多く遙に降て英吉利の 2,104 人北米合衆國の 2,038 人、露西亞の 1,473 人、獨逸の 1,059

III. 農林及水産 (表66—96頁参照)

農 業

昭和二年末に於て耕作を營む農家戸数は 5,562 千戸で、前年に比し 6,451 戸を増加した。

農家中自作は 3割 1分、小作は 2割 7分、自作兼小作は 4割 2分て之を既往に比較すると自作農及自作兼小作農は漸増し、小作農は漸減の趨勢である。農家耕地の廣狭を見ると最も多いのは 1戸 5反未滿を耕すもの農家總戸数の 3割 5分を占め、5反以上 1町は 3割 4分、1町以上 2町は 2割 1分、2町以上 5町は 8分、5町以上は 2分で、小規模の經營に係る農業が大部分を占めて居る。然し之を既往に比較すると耕地5反未滿の小農割合は漸減し、5反以上 1町を耕すものゝ割合及1町以上 2町を耕すものゝ割合は漸増の傾向を示して居るが 2町以上を耕すものゝ割合は此の趨勢に背馳した形勢にある。

【作付反別】 (米、麥は昭和三年、他は二年) 農作物中主要なものゝ作付反別を挙げると米は 3,192千町歩、麥は 1,521千町歩で米は前年より増加し麥は減少して居る、而して桑は 595千町歩、大豆 382千町歩、甘藷の 273千町歩、小豆 115千町歩、蕎麥の 106千町歩、蘿蔔 103千町歩で、他は 10萬町歩未滿である。之を既往に比較すると米、桑の作付反別は逐次増加の趨勢を示すが、麥、粟、稗、黍、蕎麥、菜種の作付反別は漸減し、大豆、小豆は毎年多少の消長を呈して増減の傾向明でない。

【收穫高】 昭和三年に於ける米の收穫高は 60,303 千石で前年に比し 1,800 千石の減少であるが、過去五年の平均作に比すれば 2,300 千石の増収である。蓋し同年は苗代期に於ける天候概ね適順なりしを以て苗の發育良好であつたが移植期後は天候不順にして殊に土用入後曇雨天持續し且つ氣温漸して低かつたので稻の生育軟弱の嫌あり發育分蘖充分ならず加ふるに葉稻熱病の發生を見た九月に入つては天候極て順調と爲り日照時多く二百十日及二百二十日の厄日も極て平穩であつたが其後の天候は概して不良なりし爲である。米の收穫は毎年渺からず變動し、最近十年間に於て米の收穫記録は大正九年の 6,300萬石、其の最も少収であつたのは大正六年の 5,456萬石で兩者の間に約 860萬石の差がある。米の種類は粳米 9割、糯米 8分、陸米 2分で、近時此の割合に甚しき變動を見ない。

昭和二年朝鮮に於ける米收穫高は 17,299 千石、同臺灣 6,899 千石にして樺太、南洋には産せず關東州に於ては 11千石の收穫を示して居る。

大麥の收穫高は 7,606千石、稈麥 7,126 千石、小麥は6,389

人、佛蘭西の 486人が主となるもので他は概れ數10人乃至數人である。

千石で、前年に比し大麥は 37千石、小麥は330千石を増加し、稈麥は 188千石を減少した。最近の趨勢では麥類の收穫高には大麥に聊減収の傾向が見ゆる他一定した傾向を認め難い。

米麥以外の農産物は最近概して、減収の状態に在る。

昭和三年米の1反歩當り收穫高は 189升で、前年に比し 7升を減少した。地方別に見ると1反歩2石以上を收穫したのは秋田、山形、富山、石川、福井、山梨、岐阜、静岡、愛知、近畿全部、鳥取、岡山、香川、愛媛、福岡、佐賀である。

大麥の 1反歩當り收穫は 188升、稈麥は 140升、小麥は 130升燕麥は 183升で、前年に比し何れも燕麥を除き何れも増収を示した。

【農産物價額】 食用の農産物及菜種、麻、藍、楮、蔴、甘蔗、葉煙草等の工業原料用農産物の昭和二年見積價額は 2,702,615 千圓で前年に比し 107,643千圓を減少した、農産價額を地方別に見ると北海道、茨城、新潟、兵庫の各 1億圓以上、千葉、愛知、岡山福岡、鹿児島、の各 8千萬圓以上、宮城、秋田、山形、福島、栃木、北海道、富山、岐阜、埼玉、長野、岐阜、静岡、三重、滋賀、大阪、廣島、山口、愛媛の各 5千萬圓以上等が多いものに屬し山梨、鳥取の 2千萬圓臺、沖縄の 1千萬圓臺が少いものに屬する。

農産物價額中、米の價額は 1,764百萬圓、麥の價額は 275百萬圓で、農産總額中米は 6割 5分を占め、麥は 1割に當る、米産額の多いのは新潟の 90,888千圓、兵庫の 74,092 千圓、千葉の66,229千圓、福岡の 63,323千圓、愛知の 62,929千圓茨城の61,675千圓北海道、宮城、秋田、山形、岡山の 5千萬圓臺等である。人口1に付農産物の價額は44圓に當り、之を地方別に見ると、茨城、滋賀の70圓臺、宮城、秋田、山形、栃木、千葉、富山、岡山、香川、佐賀、の各60圓臺が多く、北海道、青森、岩手、埼玉、新潟、石川、福井、奈良、鳥取、山口、熊本、大分、宮崎、鹿児島は各50圓臺で右に亞ぎ其の最も少いのは東京の 6圓で大阪の 15 圓亦少く神奈川、京都の20圓臺、群馬、山梨、長野、静岡、愛知、兵庫、和歌山、長崎、沖縄は各30圓臺で少き地方である。

【養蠶】 昭和三年に於ける養蠶戸数は 2,165千戸で、前年に比し 624戸を増加した。右の内春蠶を飼育したもの 1929 千戸、夏秋蠶を飼育したるもの 2,029千戸で、前者に比し後者増加が急速である。

蠶種掃立枚数は春蠶 7,926千枚、夏秋蠶10,964千枚、合計18,890千枚で前年に比し 461千枚を増加した。其の産繭高は春蠶49,5

62千貫夏秋蠶 44,297千貫、合計93,850千貫である、之を前年に比べると 2,739千貫を増加したが夏秋蠶は少しく減少を示した。

昭和三年に於ける産繭價額は 551,684千圓で前年に比し 54,751千圓を増加した、産繭價額を過去十年間比較すると著しい變動があつて大正二年の歐洲大戰前は 188,000千圓であつたが三年四年と遞下して 150,000千圓となつた、五年には頗る増加して 273,000千圓となり尙八年まで遞増して 771,000千圓を示すに至つたが戦後の九年には 365,000千圓に激落した、然るに十年からは逐次挽回して大正十二年には 660,000千圓に上り十三年には減少を見たが又十四年には 800,000千圓を突破し昭和元年には再び 600,000千圓臺昭和二年には 400,000千圓臺に下り、昭和三年には聊々恢復して 500,000千圓臺に上つた。

掃立枚數に依て養蠶事業の地方分布を見ると、長野の 2,566枚が最も多く、全國總枚數の 1割 4分弱を占めて居る、之に亞ぐは群馬の 1,324千枚、埼玉の 1,218千枚、愛知の 1,105千枚、岐阜の 851千枚、山梨の 814千枚、福島の 700千枚、茨城の 660千枚三重の 589千枚愛媛の 556千枚、静岡の 545千枚等で其の産繭高は長野58,070千圓、群馬33,644 千圓、埼玉 27,523 千圓、愛知 27,397千圓、岐阜24,389千圓、山梨21,559千圓、福島20,033 千圓、茨城、三重、愛媛、静岡、山形、千葉、神奈川、京都、兵庫、鳥取、島根、岡山、徳島、高知、大分、宮崎、鹿児島、の各10,000千圓臺等が多い。

養蠶戸數一に付掃立枚數の多少に依て養蠶事業の規模を見ると、群馬の16.5枚最も多く長野の16.2枚東京の14枚、山梨14枚弱、千葉の12.5枚、埼玉の、12枚弱、神奈川、愛知、徳島の各11枚、茨城、岐阜、愛媛の各10枚で他は何れも九枚以下である。

家畜及家禽

昭和二年末に於ける牛は 1,474千頭で、前年に比し9千頭を増加した、牝牡の別を見ると牝牛は逐次増加の傾向なるに反し牡牛は逐次減少の状態にあつたが昭和元年には 2,000頭の増加を示した。昭和二年には牡 100に付牝 255の割合になつて居る。

昭和二年末に於ける馬は 1,495千頭で前年に比し 8,370頭を増加した、馬の現在數は數年前迄毎年 1,500千頭内外を往來し増減の趨勢は明でなかつたが大正十年から逐年増加し十三年に至つて又減少を示し爾來逐年減少し來つたが昭和二年には少しく増加を見た。

昭和二年末に於ける山羊は 194,984頭で、前年に比し15,895頭を増加した。

昭和二年末に於ける綿羊は18,814頭で前年に比し 913頭を増加した、綿羊頭數は十數年以前に於ては増減常なかつたが、近時に至り綿羊蕃殖に關する施設の結果其増加頗る著明となり、前項山羊と共に各種の家畜中増加の歩調最も急速である。

昭和二年末に於ける豚は 677,063頭で前年に比し 55,597頭を増加した、既往に比較すると逐年増加の歩調であつて、十年は約 30,000 を減少したが十一年は 46,000餘頭を増加し十二年以降は増加が著しく十三年の如きは 75,000増加したが十四年以降減少を續けたが昭和二年には増加をみて居る。

昭和二年六月末に於ける鶏42,253千羽で前年に比べると3,743千羽を激増し毎年増加して居る。

昭和二年末に於ける鶯は 522,057羽で前年に比べると 4,328羽を増加して居る。

【家畜及家禽の地方別】 昭和二年末に於て牛は本州の中部以西就中中國、四國及九州に多く、中部以北に於ては北海道、青森、岩手、茨城、千葉、東京、神奈川、新潟に多い。

馬は北海道、東北の諸地方、茨城、栃木、群馬、千葉、新潟、長野、福岡、熊本、宮崎、鹿児島に多くて本州中部以西及四國には一般に少い。

山羊は沖縄に 6割 6分を占め、鹿児島之に亞ぎ尙長野、高知、長崎に多い。

綿羊は北海道、岩手、宮城、福島、長崎、鹿児島に多い、外に全頭數の 2割 6分官有のものがある。

豚は沖縄に最も多くて全數の 1割 6分を占め、鹿児島、静岡及關東地方が之に亞いで多い。

鶏は愛知の 4,119千羽最も多く之に亞ぐは千葉の 2,442千羽、鹿児島 2,183千羽、茨城の 1,912千羽、北海道の 1,575千羽、福岡の 1,460千羽、兵庫の 1,424千羽、静岡の 1,320千羽等である。

【家畜傳染病】 昭和二年中家畜傳染病で最も發病頭數の多いのは豚虎列刺の 4,024、之に亞ぐは豚丹毒の 2,639狂犬病の 998牛炭疽の 237等である。

【屠畜】 昭和二年末に於ける全國屠場數は 601箇所ある。食用屠殺は成牛 282,712頭、犢23,714頭、馬69,831頭、豚561,366頭て之を前年に比較すると豚が減少したる他何れも増加してゐる、尙既往に比較すると牛馬は毎年多少の増減があり豚は逐年著しい歩調で増加して來たが、十一年及十二年は減少し十三年十四年は著しく増加した、犢は十一年に甚しく増加したのに反し近年は稍減少の傾向である。

屠殺獸の價額は成牛 50,647千圓、犢 888千圓、馬 5,786千圓豚 21,467千圓、合計 78,788千圓で前年に比し 7,598千圓を減少した。

【牛乳】 昭和二年中の搾乳高は 797,441石で前年に比し 18,312石を増加した、人口に對する搾乳高は一人に付13合に當り、前年に比し 1勺を増加した。

【乳肉製品】 昭和二年中の乳製品の總價額は 13,306千圓で前年に比し 3,448千圓の増加である。製品の主なるものは、煉乳

7,764千圓、バター 2,774千圓、人造バター 376千圓である、總價額を地方別に見ると、最も多いのは北海道の 6,826千圓、之に亞ぐは、静岡の 1,760千圓、千葉の 1,733千圓、神奈川の 769千圓等である。

肉製品の總價額は 1,758千圓で前年に比し 2千圓を減少した、製品の主なものはハム 1,313千圓、ベーコン 297千圓等である。總價額を地方別に見ると最も多いのは神奈川の 1,355千圓で全産額の 7割 7分を占め之に亞ぐものに長崎の 128千圓、鹿兒島の 107千圓が在る。

【果實】 昭和二年に於ける主要果實の産額は梅 428千石、桃 13,750千貫、梨 39,147千貫、生柿 58,094千貫、干柿3,207千貫、蘋果19,071千貫、葡萄10,980千貫、柑橘類 74,697千貫で前年に比し梅、桃、梨、葡萄は増加し他は何れも減少した。

果實の産額を地方別に見ると梅は埼玉、鹿兒島、和歌山、茨城、千葉、静岡、福島に多く、桃は岡山、神奈川、特に多く、大阪、広島、新潟、福島、奈良に多い。梨は静岡、愛媛、新潟、福島、茨城、岡山、千葉、埼玉に、柿は、福島、長野、新潟、広島、京都、福岡に多い。蘋果は青森特は多く全産額の八割近くを占め北海道が右に亞で多い。葡萄は大阪、山梨特に多く岡山、広島、長野にも多い。柑橘類は和歌山最も多く、静岡、愛媛、広島等亦多い地方である。

山林及狩獵

毎三年定期調査に依る昭和二年末に於ける全国の立木地面積は 19,675千町歩で總面積の 3割 5分を占めて居る、之を大正十三年末の面積に比べると 122千町歩を増加した。

無立木地は 3,222千町歩、總面積の 6分前記立木地面積と共に國土の過半は林野である。之を各國の林野面積に比較すると瑞典は 5割 9分(1920年)で我國と伯仲の間に在るが獨逸は 2割 6分(1913年)佛蘭西は 1割 9分(1919年)、白耳義は 1割 8分(1910年)伊太利は 1割 6分(1919年)、北米合衆國は 1割(1910年)、和蘭は 8分(1922年)、英吉利は 4分(1917年)で我が國より遙かに少ない。

立木地を所有者別に見ると私有 4割、國有 3割 8分、公有 1割 6分、御料 6分、社寺有 6厘で無立木地は私有 4割 9分、公有 3割 6分、國有 9分、御料 5分、社寺有 4厘で立木無、無立木地共從來私有増加し他は概して減少するの趨勢であつたが、昭和二年には之に反する傾向が示されて居る。

立木地面積を地方別に見ると北海道の 5,424千町歩が最も廣く遙に降て福島の 960千町歩、岩手の 860千町歩、長野の 731千町歩、秋田の 702千町歩、岐阜の 669千町歩、山形の 559千町歩、青森の 547千町歩等相並ぎ其の狭き地方は大阪の31千町歩、東京の65千町歩、佐賀の73千町歩、香川の89千町歩等である。各地方

原野の廣狭も大體森林と相似て居る。

【森林植栽】 昭和二年中に於ける森林新植面積は 108,086町歩で、前年に比し 4,898町歩を増加した、植栽面積を地方別に見ると北海道の 7,225町歩が最も廣く之に亞ぐは長野の 6,046町歩静岡の 5,524町歩、秋田、福島、熊本、宮崎の各 4,000町歩、青森、岩手、大分、鹿兒島の 3,000町歩臺である。

森林の補植は 66,469千本で前年に比し 2,558千本を減少した。

【天然造林】 昭和二年中に於ける天然造林は 323,013町歩で前年に比し 45,439町歩を増加したが之れを八、九年前に比較すると其の 2分の 1に及ぶに過ぎず、前記新植面積の不振と共に天然造林事業も近時甚だ不振である。天然造林の主なる地方は北海道の 122千町歩、静岡及新潟の各16千町歩之に亞ぎ、福島の11千町歩、広島、岩手の各10千町歩弱にして他は何れも 9千町歩に達せない。

【林産物】 昭和二年中に於ける用材の産額は 116,343千圓で前年に比し 1,636千圓を減少した、薪炭材は 76,572千圓、竹材は 5,815千圓で前年に比し前者は増後者は減少を示してゐる。

林産物價額を地方別に見ると用材は北海道の 15,919千圓、長野の 6,942千圓が最大で之に亞ぐは秋田、奈良の 5,000千圓臺、三重、宮崎の 4,000千圓臺等が主なるものである。薪炭材は岩手の 5,022千圓最も多く之に亞ぐは、静岡の 4,524千圓、北海道、福島、山口、宮崎の各 3,000千圓臺が主なるものである。竹材は京都の 492千圓が最も多く之に亞ぐは山口の 354千圓、鹿兒島の 340千圓福岡の 327千圓大分の 315千圓等で他は 200千圓臺及びそれ以下である。

【狩獵】 昭和三年中に於ける狩獵免狀下附数は 114,005で前年に比し 3,631を減少した、免狀には銃器を用ひない甲種と銃器を用ひる乙種との別があり其の割合前者は 1割 2分後者は 8割 8分前記に比し甲種の割合少しく増加をみた。

【保安林】 昭和二年末に於ける全国の保安林は 376,550箇所、其の面積 1,907千町歩で、逐年増加の趨勢である。保安林は國有に最も多くして 4割 9分を占め、公有は 3割 2分私有は 1割 8分前記に比し御料及社寺有には甚だ少い。

保安林の目的は水源涵養と土砂扞止とが最も多く此の兩者で保安林全面積の 9割以上を占め其の他は防風、魚附、風致、水害防備等が主なるものである。

保安林を地方別に見ると北海道の 555千町歩が最も廣く岐阜の 159千町歩新潟の 158千町歩、山形の 139千町歩之に亞ぎ尙 50,000町歩以上ある地方は秋田、福島、富山、山梨、長野、岡山等である。

水産業

昭和二年末に於ける全国の漁業者は 1,480千人で總人口千に付 24.0に當り之を前年に比

べると實數に於て 28,736人を増加した。右の内漁業を本業とする者と副業とする者とは其數殆んど相匹敵して従前と比較しても亦同様の割合が維持されて居る。

漁業者を地方別に見ると北海道の 188千人が最も多く、長崎の 12千人、千葉の65千人、青森、鹿兒島の 5萬人臺静岡、三重、山口、愛媛、熊本、大分の各 4萬人臺之に亞ぎ、尙 3萬人臺は岩手、宮城、東京、神奈川、新潟、石川、愛知、兵庫、鳥根、広島、高知2萬人臺は茨城、富山、滋賀、和歌山、香川、福岡である。而して北海道は漁業を本業とする者副業とする者より遙に多いが他は概ね兩者同等か又は副業とする者が多い。

【漁船數】 昭和二年末に於ける全国の漁船數は 354,554隻で前年に比し 3,611隻を増加したが既往數年間を比較するに逐次減少の趨勢が窺れる、漁船を種別に見ると動力を有せざるもの 9割 4分を占め、動力を有するものは僅に 6分である、然し前者は逐次減少するに反し後者は逐年増加しつつある。動力の種類は發動機を備ふるもの大部分を占め蒸氣機關を備ふるものは一部分に過ぎない。

地方別に漁船の多少を見ると北海道の 59,638隻最も多く長崎の 22,810隻之に亞ぎ他に 20,000隻以上を有する地方はない、10,000以上 20,000隻を有するは千葉、三重、兵庫、広島、山口、愛媛で其他の地方は何れも10,000隻以下で、山梨、奈良には 1隻もなく、埼玉83隻で、栃木、群馬、長野、岐阜の海に面しない地方は各數百隻である。

【漁獲物】 昭和二年中に於ける内地沿岸漁獲物の見積總價額は 229,138千圓で漁業者一人に付 155圓に當り、漁獲物總價額を前年に比べると、1,846千圓を増加した。

漁獲物を大別すると魚類 134,303千圓(59%)貝類 4,637千圓(3%)藻類 17,447千圓(8%)其他72,751千圓(30%)で前年に比し其の割合に大差ない、魚類中最も多いのは鱈の27,860千圓で、鰯の 18,244千圓、鯛の16,447千圓、鱒の12,127千圓、鯖9,374千圓之に亞ぎ 5,000千圓以上 9,000千圓未滿は。鮪、鮮及鰯、鰻である魚類以外のものでは烏賊及柔魚の14,098千圓、昆布の14,034千圓、鰻の 8,243千圓が主なるもので其の他は何れも 5,000圓未滿である。

各種の價額を前年に比べると魚類及貝類は減少し、他は増加をみた。

漁獲物總價額を地方別に見ると北海道の 59,584千圓首位を占め長崎の 11,405千圓、静岡の 8,837千圓、山口の8,553千圓、千葉、神奈川、愛知、高知、福岡の 7百万圓臺之に亞ぎ尙 5,000千圓以上の地方に青森、三重、兵庫、和歌山がある。

同年朝鮮に於ける漁獲物總額は 64,075千圓、同臺灣 10,822千圓、同關東州 3,514千圓にして、同樺太及南洋は50万圓未滿であ

る。而して其の内容は内地とは大差ない。

【水産製造物】 昭和二年中に於ける水産製造物の總價額は 183,084千圓で前年に比し 120千圓を減少した。

水産製造物中重要なるものは搾粕肥料の 20,626千圓、鰹節の 19,447千圓、素乾鰯の 14,486千圓、乾海苔の 13,860千圓、煮乾真鱈の 11,046千圓、等の其の他は何れも 5,000千圓以下である。

水産製造物總價額を地方別に見ると北海道の60,041千圓最も多く之に亞ぐは静岡の13,824千圓、東京の11,162千圓等である。同年朝鮮に於ける水産製造物價額は 40,290千圓、同臺灣 2,519千圓樺太15,207千圓にして關東州、南洋は何れも1,000千圓未滿である。

【遠洋漁業】 昭和二年に於ける遠洋漁業に依る漁獲物價額は内地沖合 78,500千圓で前年に比し 6,935千圓を減少した、露領沿海州、堪察加、薩哈連州に於ける獵虎、臘腸歌及捕鯨業は同族の繁殖保護に依る條約締結、遠洋漁業獎勵法廢止又は出獵船數の制限等に依り其の進況著明でなく、又トロール漁業は歐洲大戰當時は一時殆んど廢絶せんとしたるが其の後挽回せられ近年は年々漁獲高千萬圓前後を擧げて居る。

【水産養殖】 昭和二年末に於ける水産養殖場は 138,918箇所、其の面積は 165,641千坪で之を前年に比べると 1,995千坪を減少した、收穫物の價額は 22,921千圓で前年に比し 5,639千圓を増加した、水産養殖は柴菜の 11,150千圓、鰻の 4,258千圓、鰻の 2,882千圓、牡蠣及鯛の各 1,000千圓臺等が主なるものである。

【製鹽】 昭和二年度末に於ける製鹽業者は 5,148人、従業者 44,787人で、製鹽反別は 5,776町歩である、之を前年に比べると製造者 317人製鹽反別64町歩を減少した外は著しい増減を見ず尙最近十年間に於て製造者及従業者數は逐次減少の趨勢であるが製鹽反別には大なる増減がない。

昭和二年度中に於ける製鹽高は 1,031,897千斤で前年に比し 8,341千斤の増加を示した。

製鹽高を人口に對比すると大正三年に於ては一人に付19斤產出したが爾後逐次減少し七年には12斤となり其後多少の消長を以て經過し十三年度は18斤に上つた。十四年に於ては18斤6分を產出し昭和二年度に於ては17斤弱を產してゐる製鹽高を府縣別に見ると最も多いのは香川の 299,512千斤、之に亞ぐ兵庫の 144,295千斤、山口の136,664斤等である。殖民地に於ける製鹽高は朝鮮の182,950千斤臺灣の169,227千斤が其の主なるものである。

産業及同業組合

昭和二年六月末に於ける各種産業組合は14,186で前年に比し 187を減じた、右の中主なるものは信用販賣購買組合の 3,437信用利用販賣購買組合の3,395、信用組合の 2,556、信用購買組合の2,333で他は數百又は數十程度のもが多い。

昭和元年六月末に於ける産業組合を其の目的別に見て組合数を舉げると信用組合は 11,847組合員數 3,390千人、販賣組合は7,541組合員數2,248千人、購買組合は 9,851組合員數2,744 千人利用組合は4,348、組合員數1,415千人で一組合平均組合員數信用は 286人、販賣は 298人、購買 279人、利用は 325人で何れも前年より増加した。

昭和元年に於ける産業組合の組織は有限責任 8割 8分、無限責任 1割、保證責任 2分で、之を既往に比較すると割合上有限は漸増し、無限は漸減し、保證は甚しい變動を見ない。

【同業組合】 昭和二年末に於ける重要物産同業組合數は 1,575

IV. 鑛業

鑛業 昭和二年末に於ける全国の稼業鑛區數は 1,183其の坪數670,059千坪で前年に比し、12區域 1,107千坪を減少した、休業鑛區亦前年に比し94區 16,121千坪を減少した。鑛區及其の坪數は大正九年以來前年迄引續き減少し、同十二年以來此の形勢は稍挽回の傾向にあつたが、本年度は前年度に比して上述の如く稍減少をみた。

稼業砂鑛區は河床 25箇所、其の延長 29里、河床以外の鑛區 98、其の坪數 6,944 千坪で前年に比し鑛區河床延長共非常に減少した。休業鑛區は河床 688箇所、其の延長 733里河川以外の鑛區 1,528其の坪數 165,493 千坪で前年に比し何れも増加して居る。

稼業鑛區を鑛種別に見ると石炭の 405,136千坪最も廣く遙に降て石油の 45,191千坪、金銀銅鉛亞鉛硫化鐵及金銀の各 23,000千坪、銅、硫化鐵 17,655千坪、金銀銅 17,576千坪、が右に亞ぎ尙 10,000千坪以上のものは金銀銅鉛亞鉛、銅、亞炭である。砂鑛に在ては砂金砂白金及砂鐵が主なるものである。

植民地に於ける稼業鑛區數は昭和二年末朝鮮の 362を最とし臺灣の 199之に亞ぎ遙に降りて樺太の56、關東州の24がある。而して其坪數及河床延長は朝鮮の 310,717千坪、延長5里に亞ぐに臺灣の 82,289千坪を以てし以下に於ては關東州の 39,860千坪、樺太の 32,955千坪の順位である。休業鑛區及坪數は朝鮮の1,813 (1,240,291千坪延長42里) 臺灣の 573(121,684千坪) 關東州の37(5,700千坪)にして稼業鑛區は關東州を除き前年に比して増加し休業鑛區は亦何れも減少を示してある。鑛種は朝鮮に於ては金銀鑛最も多く臺灣及樺太に於ては石炭、關東州に於ては苦灰石が最も多い状態にある。

【鑛産額】 昭和二年中に於ける各種鑛産物の價額は 368,568千圓で前年に比し 22,046 千圓を増加した。鑛産物中其の價額の最も多いのは石炭の 257,281千圓で全鑛産額の 7割弱を占め、之に亞ぐは銅の 47,889千圓、金の13,171千圓、石油(原油)の 12,466

で前年に比し37を増加した。

【同業組合聯合會】 昭和元年末に於ける同業組合聯合會は78で前年に比し 7を増加した。

【漁業組合】 昭和元年末に於ける漁業組合は 3,801、其の組合員 479,271人で前年に比し組合10、人員 2,596人を増加した。

【水産組合】 昭和二年末に於ける水産組合數は46組合員 54,189人、前年に比し組合數15、組合員 22,253人を増した。水産組合聯合會は 1、加入組合數 3 で前年に比し變りない。

【森林組合】 昭和二年末に於ける森林組合數は729、其の組合員數 93,652人で前年に比し組合數173、組合員20,801人を増加した。

及工業 (表97—116頁参照)

千圓、鐵の 8,199千圓、硫化鐵鑛の 7,373千圓、亞鉛の 6,158千圓銀の 5,453千圓、硫黃の 3,302千圓等で是等を前年に比較すると、金鐵、硫化鐵鑛、石炭硫黃等は増加し他は減少を示して居る。

鑛産額を地方別に見ると金は大分の 5,091千圓最も多く茨城の 2,299千圓、鹿兒島の 1,619千圓、北海道の 1,259千圓が多く他は 1百萬圓未滿である。銀は大分の1,205千圓最も多く茨城、秋田の各700千圓臺、栃木、香川、愛媛の各500千圓臺多く、銅は秋田の 10,406千圓最も多く、愛媛、栃木の各 9百萬圓臺、大分の6百萬圓臺等多く、亞鉛は福岡に 4,644千圓を産して全額の 7割 5分を占め、鐵は岩手の 5,596千圓、富山の 1,693千圓で、全産額の8割 9分を占め、硫化鐵鑛は香川の2,103千圓、岡山の1,481千圓静岡の 1,028千圓特に多く、石炭は福岡の 143,586千圓特に多くして全額の5割以上を占め遙に降て北海道の49,490千圓、長崎の 18,322千圓、福島 of 17,238千圓、佐賀の 11,448千圓相亞で多く、石油は新潟に 7,652千圓、秋田に 4,264千圓を産して全額の 9割6分を占め、硫黃は岩手 1,240千圓北海道に 1,067千圓を産する。

植民地に於ける鑛産物は昭和二年中に於て總價額關東州の80,465千圓を最高とし朝鮮の24,150千圓之に亞ぎ以下臺灣の 21,103千圓、樺太の357千圓の順で南洋には 1,335 千圓を産した。而して右の内朝鮮に於ては金の 5,725千圓最も大で關東州に於ては石炭の 75,421千圓が大部分で臺灣亦石炭の 16,933千圓が最も多く南洋に於ては燐鑛の 1,335千圓が全部である。

【土石類】 昭和二年中に採取した石材額は 25,457千才、同土石及鑛水額は 17,169千貫である。

地方別に見ると石材は千葉 1,736千才、茨城及栃木の各 1,500千才臺愛知の 1,395千才神奈川の 1,296千才北海道の 1,163千才等多く土石及鑛水は兵庫の 2,259千貫を最とし、岐阜の 1,776千貫愛知の 1,496千貫等が主なるものである。

工業 昭和二年末に於ける各種製造場中其數最も多きは製茶業の 1,147千戸にして、織物業の183

千戸は遙に降りて之に亞ぎ他は何れも 100千戸未滿である、而して 100千戸未滿に於ては蠶表製造業の84千戸麥稈經木麻真田製造業の78千戸等多く刷子及刷毛製造業の734、酒精及酒精含有飲料製造業の 278等は其の少なき部類に屬する。

各種工業製造場につき其従業職工數をみるに總數に於て最も多きは綿織物の 288,560人にして絹織物及絹綿交織物の 217,771人木製品 of 181,620人、蠶表 of 121,779人等之に亞ぎ他は概して10萬人未滿である。而して其の特に少なきは精製樟腦の231人である。尙又此等各種工業中男工女工の割合につきて觀るに男工の數は女工に比して特に多きものは皮革製造業の總數中9割以上漆器業の8割 5分、粗製樟腦製造業の8割2分、瓦製造業の 8割2分等にして之に對して女工の數特に大なるは織物業にして就中麻織及麻交織物業の如きは總數中女工の占むる割合は前者9割5分に及んで居る、織物業以外に於て女工割合高きものには莫大小、蠶表、莫蘆及花筵、帽子、蓆製品、精製樟腦各製造業等がある。

【工産物】 昭和二年に於ける工産額の大宗は織物の1,454,586千圓で、之に亞ぐは蠶絲の 818,440千圓、紡績の 623,461 千圓、煙草の 272,081千圓、紙の 175,318千圓、肥料の 170,585千圓、小麥粉の 120,993千圓、染物の 101,366千圓、醬油及酒の 80,051千圓、工業用藥品の 79,294千圓、陶磁器の 74,363千圓、莫大小の 67,603千圓、製革の 52,568千圓、硝子製品の 44,268千圓、等にして尙 3千萬圓臺のものに瓦、石鹼、植物油、漆器、製茶、 2千萬圓臺のものに人造絹帽絲が在り、蠶表、燐寸の 15,000 千圓で尙 1千萬圓臺のものに煉瓦、罐詰、帽子、澱粉、味噌等がある。

酒類及砂糖も亦多額を産して勿論上記の列中に入るべきものであらうが其の價額の調査を闕て居る。

重要工産物に付其の地方別を見ると、織物は愛知 273,878千圓大阪 193,036千圓、兵庫 102,257千圓、京都 100,982千圓、が特に多く他は100百萬圓未滿にして5千萬圓以上の産額を有するものには群馬、東京、石川、福井、静岡である。蠶絲類は長野211,800千圓、特に多く愛知71,104千圓、群馬55,422千圓、埼玉39,278 千圓、山梨 32,798千圓、山形、福島、岐阜、三重、兵庫の各2千萬圓臺が多い。紡績は大阪 145,010千圓、兵庫の 63,404 千圓、愛知の 55,369千圓、三重 42,330千圓、東京32,047千圓、岡山26,718千圓、静岡 26,220千圓等が其の多きものである。紙は東京、北海道静岡に多く産し何れも産額 2千萬圓を超えて居る。肥料は東京、大阪、兵庫、福岡及北海道に多く何れも産額1千萬圓以上である。工業藥品は大阪25百萬圓、東京19百萬圓が特に多く兩者で總産額の5割5分を占めて居る。人造絹絲は最近其産額の増加著しいものが在るが其の産地は滋賀の 8,504千圓山口の 6,503 千圓廣島の 5,502千圓が主要なものとなつて居る。

植民地に於ける工業生産品をみるに朝鮮に於ては煙草の 32,476千圓、紡績の 15,207千圓、織物の 4,532千圓、麥粉の 3,349千圓等が主なるもので臺灣に於ては製茶 18,379千圓、煙草 14,996千圓、肥料 4,169千圓が主なるものである。其他に於ては特に舉ぐ可き程のものもないが樺太の紙 40,455千圓關東州の麥粉 9,806千圓が其大なるものに屬する。

特許及登録 昭和二年に於ける發明特許は出願12,607、其の特許數 4,371、實用新案登録は出願27,675其の登録數 9,386、意匠登録は出願 9,181、其の登録 4,691、商標登録は出願19,696、其の登録 8,040で前年に比し商標、登録の場合を除き各種出願數特許登録數共増加を示した。

電氣 昭和二年末に於ける電氣事業數は 5,984で前年に比し 463を増加した、右の中電氣供給及電氣鐵道事業は761で更に細別すると電氣供給572、電氣鐵道117電氣鐵道電氣供給兼營72である、之を前年に比べると電氣供給24を減じ電氣鐵道18を増加し、電氣鐵道及供給兼營 1を増加した。

【發電力】 昭和二年末に於ける發電力は 348萬「キロワット」で前年に比し28萬「キロワット」を増加し10年以前に比べると約 4倍し其の發達甚だ急速である、發電は水力に依るもの6割1分、火力に依るものを3割9分で前年に比し水力の割合少しく減少した。

【電氣需要】 昭和二年末に於ける電燈需用戸數は 1,055萬戸其の箇數は3,232萬、燭光數 60,561萬燭光で前年に比し 39萬戸 216萬箇、5,769萬燭光を増加した。需用戸數1に付電燈箇數は 3,1箇其の燭光 58燭光に當り前年に比し 0,2箇4燭光を増加した。

人口に對する電燈箇數は10人に付 5.3燈で1人に付 9.9 燭光に當り前年に比べると 10人に付 0.3箇、1人に付 0.9燭光を増加した。

面積に對する電燈燭光は一方里に付 24,456燭光で前年に比し 2,326燭光を増加した。

昭和二年末に於ける電動機裝置數は34萬、其の電氣力 179萬「キロワット」で前年に比べると裝置數4萬、電氣力8萬「キロワット」を増加した。

電燈需用戸數の最も多いのは東京の 996千戸で之に亞ぐは大阪 675千戸、兵庫の522千戸、愛知の487千戸、福岡の404千戸、廣島の346千戸等にして尙 30萬戸以上は、神奈川、新潟、長野、静岡、20萬戸以上は北海道、埼玉、千葉、岐阜、三重、京都、岡山、愛媛、熊本である、而して10萬戸未滿に岩手及沖繩がある。

電燈燭光と人口との割合は 1人に付東京の24燭光最も多く京都の21燭光大阪の19燭光、神奈川の16燭光、愛知の13燭光、兵庫の10燭光之に亞ぎ他は何れも10燭光未滿である、而して其の最も少きは沖繩の 0.55燭光である。

電力裝置の最も多いのは大阪の 52,347、之に亞ぐは東京の

52,091降つて兵庫の 20,862、福岡の 19,061、愛知の 18,779、神奈川の 13,529、静岡の 13,109、京都の 12,893にして他は1萬未滿である。

瓦斯

昭和二年三月末に於ける瓦斯供給事業者は74其の拂込資本金 606,378千圓で前年に比し事業者數 3を減じ、資本金は85,465千圓を減少した、平均一事業の拂込資本金は 8,194千圓で前年に比し 1,006千圓を減少した。

瓦斯取付口數は燈用、熱用とを合して 223萬にして前年に比し 19萬を増加した。

瓦斯動力供給は 6,525馬力で前年に比し 113を減じた、尙既往に比較すると逐次減少の趨勢で在る。

供給瓦斯量は一年間 48,661萬立方米で前年に比し 6,268萬立方米を増加した。

供給量を地方別に見ると其の主なるものは東京の 23,769萬立方米、之に亞ぐは大阪の 7,416萬立方米、兵庫の 3,681萬立方米、愛知の 3,269萬立方米、京都の 2,543萬立方米等である。

度量衡

昭和二年度中に於ける度量衡器の檢定箇數は度器 8,158,014、量器 1,115,028、瓦斯メー

V. 商業

商 業

昭和二年末に於ける全國の商業會議所數は77で前年より 1増加した。議員數は 2,339人、特別議員は669人で前年に比し前者 53人後者15人を減少し選舉權者は 115,485人で前年に比し 14,360 人を増加した。一箇年の經費は2,219千圓で前年に比し166千圓を減少し、平均一會議所に付28,818圓に當つて居る、一箇年經費を地方別にみれば東京は245千圓、大阪241千圓、愛知232千圓、北海道194千圓福岡137千圓其の他の府縣は10萬圓未滿である。

47府縣中商業會議所を設けないのは千葉、奈良、大分、宮崎、神繩の 5縣で他は 1若くは 2を有するもの多く北海道には 6、愛知には 5を有する。

【取引所】 昭和二年末に於ける株式組織の取引所數は34で前年と變りなく取引員は 1,089人、拂込資本金は 97,121千圓である。一年間の収入は 18,665千圓で其の 6割6分は賣買手数料、支出は 7,401千圓で其の2割5分は取引所税である。外に會員組織の取引が 4ある。

地方別に拂込資本金を見ると東京の 38,250千圓、大阪の 37,000千圓、特に多く之に亞ぐは神奈川の 6,500千圓、愛知 4,725千圓京都 3,500千圓、他は數10萬圓乃至10數萬圓のものが多い。

昭和二年に於ける株式取引所數は11、賣買高は12,816萬株、其の受渡高18,141千株で賣買高の1割4分強に當る。米取引所數は28賣買高は 17,608萬石、其の受渡高 91萬石で賣買高の 5厘に當る。

生絲取引所數は 1、賣買高3,122萬斤、其の受渡高48萬斤で賣買高

トル 440,072、衡器 2,493,993 で前年に比し度器瓦斯メートルは減じ、量器、衡器は増加した。

檢定不合格率は各種百中度器甲種檢定 2.9、同乙種 1.9、量器 3.5及3.0、瓦斯メートル 0.9、衡器3.1及1.6 で前年度に比し同率には甲種檢定には量器、衡器に増し乙種には一般に減少した。

昭和二年度中に於ける度量衡器需用數は度器 6,103,951、量器 919,922衡器 1,453,479で前年に比し一般に減少を示した。

昭和二年度中に於ける計量器檢定箇數は 2,380千箇で前年に比し 509千箇を減少した。同檢定 箇中不合格割合は前年に比し不良で其割合最高は計壓器の 8.1最低は生絲織度檢定器の 2.6となつて居る。

植民地に於ける同年度中の度量衡器需要の状態をみるに朝鮮に於ては度器 230,476、量器83,323、衡器23,119、臺灣に於ては度器 168,986、量器 32,560、衡器 44,124、樺太に於ては度器41,299量器 4,683、衡器 3,081、で 1人 1,000に付ての割合は樺太が最も大きい。

及 金融 (表117—160頁參照)

の 2分弱に當る。

株式取引所で賣買高の多いのは東京株式の 6,082萬株、大阪株式の 3,863萬株が特に多く遂に降つて名古屋株式の 1,032萬株、京都の636萬株、神戸の 603 萬株等である、米は大阪の堂島米穀の 6,001萬石、東京米穀商品の 3,998萬石、神戸の 1,249萬石、名古屋の 1,153萬石、京都の 1,118萬石等である。

昭和二年に於ける米穀取引所清算取引先物平均相場は 1石に付 33圓82錢で前年に比し 2圓72錢を下落した。之を月別に見ると1月の34圓臺より次第に上昇し 5月に36圓臺に達したが再び臺われを示して36圓臺に歸り漸落を續け12月には29圓臺に迄下落した。

【卸賣物價】 昭和三年中の東京市卸賣物價を食料、衣類、建築材料及燃料其他42品に就いて前年と對比するに騰貴したるものは大麥、小豆、清酒、鹽鮭、綿絲、綿木綿、晒木綿、煉瓦、丸釘、杉板、菜種油粕、石炭、半紙、辨寸の14品にして他は何れも低落してゐる。

【小賣物價】 公設市場小賣物價は前年に比し騰落商品數略々同じく保合のものも多數在り、卸賣物價に於ける如く顯著に低落の狀勢を示して居らない。

會 社

昭和二年末に於ける全國の會社數は38,516其の拂込資本金及出資額 126億圓で前年に比し會社數 2,448を増し拂込資本及出資額 6億圓を増加した。

會社の組織は株式4割7分合資 3割8分合名 1割5分で前年に比し殆ど同株式の割合少しく減じ合資の割合増加したが、既往に比較

すると株式の増加が最も著しく合名之に亞ぎ合資の増加は最も少い。平均1會社の拂込資本金は株式 597千圓、合資54千圓、合名 183千圓で前年に比し株式は17千圓を増加し合資は 7千圓合名は 12千圓を減少した。

會社を資本金高別にしてみると株式では10萬圓以上50萬圓の3割5分最も多く5萬圓未滿の2割3分之二に亞ぎ5萬圓以上10萬圓の1割6分、50萬圓以上100萬圓、100萬圓以上500萬圓は各1割1分見當、500萬圓以上は 4分である。之を既往に比較すると、10萬圓以上各階級の割合は漸増して10萬圓未滿のものは漸減の趨勢であつたが 5萬圓未滿の小會社は稍々回復の傾向を示した。合資では 5萬圓未滿のものは8割5分を占め 5萬圓以上10萬圓のもの約 1割あるの外大資本の會社は甚だ少い。合名では5萬圓未滿のもの6割8分、5萬圓以上10萬圓及10萬圓以上50萬圓の各1割4分ある外是亦50萬圓以上の大資本會社は甚だ少い。

會社を業態別とし其の拂込資本金を見ると株式では工業4割3分商業3割8分、運輸1割2分、鑛業6分、農業 8厘、水産 7厘、合資では商業 5割6分、工業 2割1分、鑛業2割、運輸2分、農業 1分、水産 3厘合名では商業8割6分、工業1割2分、農業1分2厘、運輸 9厘、鑛業 2厘、水産 2厘である。

拂込資本金を地方別に見ると東京の 516,697萬圓最も多く大阪の 240,691萬圓、兵庫の 97,650萬圓、愛知の 40,069萬圓、神奈川の 36,923萬圓、福岡の 28,846萬圓、京都の 24,732萬圓順次相亞き尙 1億圓臺は北海道、新潟、富山、長野、静岡、三重、岡山廣島、其の最も少いのは沖繩の 208萬圓で、宮崎 1,607萬圓、徳島 2,590萬圓、鳥取 2,934萬圓、島根 3,913萬圓等は少い地方に屬する。

【銀行】 昭和二年末に於ける帝國に本店を有する銀行は1,449で其支店及出張所數は6,070である。

前年に比べると 129行を減少した、支店及出張所は前年に比し82を減じ、本店 1 に付支店、出張所は 4.2に當る。

拂込資本金は 192,420萬圓、積立金は 96,700 萬圓で前年に比し資本金 3,709萬圓積立金 916萬圓を減少した。本店 1に付拂込資本金は 133萬圓、積立金は67萬圓で前年に比し前者は11萬圓、後者は 6萬圓を増加した、之を數年前の増加に比べると餘程其の程度を低下した。

昭和元年の入金は 67,108,145萬圓、 出金は 67,101,321萬圓で之を前年に比べると入金 5,871,158萬圓、出金 5,796,986 萬圓を増加し、純益金は 34,298萬圓、配當金は 14,393萬圓で前年に比し純益金227萬圓配當金 3,093萬圓を減じた。

拂込資本金 100圓に對する純益は17圓82錢、配當歩合 8歩 8厘で前年に比し、前者は 8錢後者は 1厘を減少した。

昭和二年中の預金は 20,314千萬圓其の年末現在高 1,189,622萬

圓で之を前年に比べると前者は 1,408 千萬圓を減少し、後者は 10,807萬圓、を増加した。借入金は2,534,840 萬圓、其の年末現在高 151,981 萬圓で前年に比し、前者は 170億圓を減じ、後者は 8千萬圓を増加し、再割引手形は 545,487萬圓、其の年末現在高40,386萬圓で前年に比し前者は152,306萬圓を増加し、後者は 18,364萬圓を減少した。昭和二年中の貸出金は 7,546,423萬圓、其の年末現在高984,078萬圓で前年に比し前者は138億圓、後者は41,038萬圓を減少した。割引手形は 2,559,287萬圓、其の年末現在高 286,021萬圓で前年に比し前者は 191,504 萬圓を増加し、後者は 21,866萬圓を減少した、荷爲替手形は 519,385萬圓、其の年末現在高は 23,202萬圓で、前年に比し前者は84,485萬圓、後者は 1,018萬圓を減少した。

銀行の預け金は 6,703,571萬圓其の年末現在高は 80,405萬圓で前年に比し前者は 1,012,864萬圓後者は11,537萬圓を減少した、銀行所有の有價證券年末現在高は實價にして 419,670萬圓、金銀年末現在高は 109,828萬圓で前年に比し前者は62,529萬圓を増加し、後者は2,792萬圓を減少した。

【日本銀行】 昭和二年末に於ける支店は16、拂込資本金は3,750萬圓、積立金は 8,027萬圓で之を前年に比べると支店、1を増し、拂込資本金に増減なく、積立金538萬圓を増加した。

入金は11,872,009萬圓、出金は 11,872,804萬圓で前年に比し入金1,751,709萬圓、出金1,253,004萬圓を増加し、純益金は10,358千圓で前年と變りなく、配當金は 375萬圓で前年及過去10年間より 25萬圓を減少し、其の配當率は1割2分である。

昭和三年末に於ける兌換銀行券發行高は 173,910萬圓で前年末に比し5,710萬圓を増加した、正貨準備高は 106,164萬圓で發行高は6割1分に當り、其割合を前年末に比すると 2分減である、保證準備高は 67,746萬圓、制限外發行高は 55,746萬圓で、之を前年に比べると正貨は 110萬圓を減少し保證發行高及制限外發行高各 5,781萬圓を増加した。

【横濱正金銀行】 昭和二年末に於ける支店は43、拂込資本金は 1億圓、積立金は、100,858千圓で前年に比し資本金に増減なきも積立金858千圓を増加した。

入金は 5,480,172萬圓、出金は5,481,259萬圓で前年に比し入金 153,224萬圓、出金151,156萬圓を減少し、純益金は1,808萬圓、配當金は1,000萬圓で前年に比し純益金26萬圓を減少し、配當率は1割である。

昭和二年中横濱正金銀行の支那に於ける銀行券發行高は 15,014萬圓で前年に比し 231萬圓を増加した。

昭和二年中取扱ひたる爲替は、買爲替手形各地へ向けたるもの 298,050萬圓、各地より受けたるもの 298,449萬圓、賣爲替手形各地へ向けたるもの 347,790萬圓、各地より受けたるもの 351,468萬

圓、代金取立手形各地へ向けたるもの10,117萬圓、各地より受けたるもの19,421萬圓、賣爲替預金手形各地へ向けたるもの4,847萬圓、各地より受けたるもの4,860萬圓、利付買爲替手形各地へ向けたるもの57,002萬圓、各地より受けたるもの54,740萬圓である。

【日本勸業銀行】昭和二年末に於ける拂込資本金は7,488萬圓、積立金は4,547萬圓で前年に比し資本金500萬圓積立金770萬圓を増加した。

入金182,361萬圓、出金182,340萬圓で前年に比し入金、出金共に2億5千萬圓餘を増加した。

純益金は1,182萬圓、配當金は698萬圓で前年に比し純益金46萬圓を増加し、配當金は1萬圓減じ、其の配當率は1割である。

昭和二年中債券發行高は8,050萬圓で前年に比し281萬圓を増加し、本年償還高は6,004萬圓で前年に比し3,352萬圓を増加し、年末に於ける現在高は76,700萬圓で前年末に比し2,046萬圓を増加した。

昭和二年末に於ける年賦償還貸付金は74,476萬圓で前年に比し4,543萬圓を増加した。其年限は十箇年最も多く十五箇年及二十箇年之に亞ぎ又數箇年の短期四十五箇年の長期もある。貸付者の業態は農業の2割3分、工業の1割2分最も多く、耕地整理組合の1割市區町村の8分1厘が亞いで多い。定期償還貸付金は5,621萬圓で前年に比し371萬圓を減少した。年限は五箇年内で貸付者の業態は大體前項に似て居る。

【農工銀行】昭和二年末に於ける農工銀行は46、其の支店及出張所60、拂込資本金は8,680萬圓、積立金は5,349萬圓で前年に比し19行2店を増加し、資本金249萬圓を減じ、積立金135萬圓を増加した。

入金は308,184萬圓、出金は307,358萬圓、純益金1,370萬圓、配當金は800萬圓で其の配當率は9分2厘である。

昭和二年中に於ける債券發行高は13,282萬圓、償還高は6,729萬圓、年末に於ける現在高は44,298萬圓で、前年に比し何れも増加して居る。

昭和二年末に於ける年賦償還貸付金は52,654萬圓で年限は十五箇年以上二十箇年最も多く十箇年以上十五箇年、二十箇年以上二十五箇年之に亞ぐ、借主の業態は農業最も多く4割1分を占め商業の2割3分、工業の1割2分が主なるものである。定期償還貸付金は7,980萬圓で借主には農業者及工業者が最も多い。

【北海道拓殖銀行】昭和二年末に於ける本行の支店及出張所は28、拂込資本金は12,500千圓、積立金は8,178千圓で前年に比し支店、出張所6を加へ資本金は増減なく、積立金938千圓を増加した。

入金は3,686,852千圓、出金3,686,731千圓で前年に比し入金出

金共に128百萬圓餘を増加し、純益金は2,497千圓、配當金は1,125千圓で前年に比し純益金263千圓、配當金125千圓を減じ其の配當率は9分である。

昭和二年中に於ける債券發行高は35,494千圓で前年に比し10,902千圓を減少し、償還高は18,200千圓で前年に比し36,021千圓を減少し、年末に於ける現在高は115,943千圓となり前年に比し17,294千圓を増加した。

昭和二年末に於ける年賦償還貸付金は110,560千圓で前年に比し8,022千圓を増加した。年限は十五箇年最も多く二十箇年、十箇年及十七箇年之に亞ぐ、借主の業態は農業3割8分を占め、土功組合の2割5分、商業の1割8分が主なるものである。定期償還貸付金は15,869千圓で前年に比し4,982千圓を減少した。年限は五箇年以内で、貸付者の業態は商業、農業が最も多く、漁業及土功組合及水産業が亞いで多い。

【臺灣銀行】昭和二年末に於ける臺灣銀行の支店及出張所は33、拂込資本金は13,125千圓で前年に比し拂込資本金26,255千圓、を減少した。

入金22,771,380千圓、出金は22,773,443千圓で前年に比し入金出金共1,528千萬圓餘を減少した。尙損失金757千圓を生じた。昭和三年末に於ける臺灣銀行券發行高は55,713千圓にて前年末に比し2,111千圓を増加した。

【朝鮮銀行】昭和二年末に於ける本行の支店及出張所は30、拂込資本金25,000千圓、積立金は1,001千圓で前年に比し支店及出張所數1、積立金181千圓を増加した。

入金は22,199,761千圓、出金は22,192,712千圓で前年に比し入金、出金共107千萬圓餘を減少した。純益金は1,382千圓、配當金は政府持分を除き940千圓で前年に比し純益金208千圓、配當金235千圓を減少し、其の配當率は4分である。昭和二年末に於ける朝鮮銀行券發行高は132,444千圓にして前年末に比較して7,917千圓を増加して居る。

【日本興業銀行】昭和二年末に於ける本行の支店は3、拂込資本金は50,000千圓、積立金は17,566千圓で前年に比し支店數資本金に増減なく積立金1,056千圓を増加した。

入金5,817,200千圓で出金5,816,857千圓で前年に比し入金、出金共73千萬圓餘を増加した。純益金は6,195千圓で、前年に比し1,085千圓を減少し、配當金は3,000千圓で前年より2,050千圓を減少し、其の配當率は6分である。

昭和二年中に於ける債券發行高は69,000千圓で前年に比し31,400千圓を増加し償還高は91,877千圓で前年に比し39,383千圓を増加し、年末に於ける現在高は248,498千圓で前年末に比し、22,877千圓を減少した。

【普通銀行】昭和二年末に於ける本店は1,283、支店は5,254 拂

込資本金は1,481,479千圓、積立金は629,115千圓で前年に比し、本店137、支店83を減少、資本金15,131千圓、積立金33,935千圓を減少した、本店1に付支店は4.10で前年に比し0.35を増加し、平均一行の拂込資本金は1,155千圓、積立金は490千圓で前年に比し資本金87千圓、積立金23千圓を増加した。

入金は430,568百萬圓、出金は430,499百萬圓で前年に比し入金55,324百萬圓、出金54,604百萬圓を増加した。純益金は263,284千圓、配當金は105,582千圓で前年に比し純益金1,324千圓を増加し配當金22,948千圓を減少し、其の配當率は8分3厘である。

本店數に依り地方別にみればその最も多いのは兵庫の115で之に亞ぐは静岡の105、東京の91、福岡、長野の各62、山梨の56、新潟の46、大阪の35等にして、其の最も少いのは樺太、沖縄の各1、臺灣、徳島の各3で、高知の4、奈良の5、北海道の8、島根の6、香川の6、宮崎の10等は少ない地方である。

拂込資本金は東京の414,633千圓最も多く大阪の205,613千圓之に亞ぎ、遂に降て兵庫の78,616千圓、愛知の56,524千圓、新潟の49,232千圓、静岡の48,470千圓、富山の46,447千圓、長野の46,330千圓之に亞ぎ尙10,000千圓以上は青森、岩手、宮城、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、神奈川、石川、福井、山梨、岐阜、三重、奈良、和歌山、岡山、愛媛、福岡、佐賀、長崎、大分、鹿児島で、其の少いのは沖縄の250千圓、樺太の1,475千圓、徳島の2,150千圓、熊本の4,269千圓で、他は何れも5,000千圓以上である。

配當金は東京の30,607千圓最も大阪の15,213千圓之に亞ぎ遂に降つて愛知の4,731千圓、兵庫の4,547千圓、静岡の3,711千圓、富山の3,678千圓、新潟の3,522千圓、長野の3,040千圓之に亞ぎ、尙2,000千圓以上のものに愛媛1,000千圓以上のものに青森、岩手、栃木、埼玉、石川、山梨、岐阜、三重、奈良、和歌山、福岡、長崎、鹿児島がある。

【貯蓄銀行】昭和二年末に於ける本店は113、支店は576、拂込資本金は42,916千圓、積立金は31,063千圓で前年に比し本店11、支店は19を減じ、資本金1,786千圓、積立金3,653千圓を増加した、本店1に付支店は5.1で前年に比し0.3を増加し平均一行の拂込資本金は380千圓、積立金は275千圓で前年に比し資本金50千圓、積立金75千圓を増加した。

入金は7,611百萬圓、出金は7,607百萬圓で前年に比し入金1,546百萬圓、出金1,554百萬圓を増加した。純益金は15,760千圓、配當金4551千圓で前年に比し純益金1,310千圓増加し、配當金381千圓を増加し、其の配當率は1.26割である。

地方別にみれば本店の最も多いのは東京の15、之に亞ぐは愛知の12、大阪の8、大分、岐阜、静岡各4等で其の本店がない地方

は京都、山口、熊本、沖縄、樺太である。

拂込資本金の最も多いのは東京の14,849千圓、之に亞ぐは大阪の5,113千圓、愛知の3,634千圓、神奈川の1,222千圓、其の少いのは富山、奈良、高知、鹿児島各125千圓である。

配當金の最も多いのは東京の2,605千圓、之に亞ぐは愛知の309千圓、大阪の232千圓、新潟の148千圓、長崎の98千圓、其の少いのは神奈川、山口、熊本、沖縄の無配當、富山、奈良、高知、鹿児島各8千圓等である。

昭和三年度中貨幣鑄造の爲造幣局の受入れた
貨 幣 地金の量は金1,593貫匁、銀47,493貫匁で前年度に比し金197貫匁、銀16,019貫匁、を加増した。

昭和三年度中の貨幣鑄造高は、銀貨11,801千圓、白銅貨4,000千圓、青銅貨30千圓、前年度に比し、青銅貨95千圓を減少し、銀貨1,801千圓及白銅貨250千圓を増加したが金貨、銅貨は鑄造がなかつた。同年度中貨幣發行高は銀貨11,800千圓、白銅貨4,000千圓、青銅貨30千圓で、前記鑄造高の殆ど全額を發行した。發行貨幣の種類は50錢銀貨、10錢白銅貨、一錢銅貨である。

【通貨流通高】昭和三年末に於ける通貨流通高をみるに小額紙幣12,487千圓、日本銀行兌換券中銀行券準備充當金を除きたる差引流通高1,665,897千圓、補助貨幣420,054千圓にして此の計2,098,438千圓にして此の他に朝鮮銀行券132,444千圓及び臺灣銀行券55,713千圓があるも之等は内地に於ては殆んど流通せざるものと看做し得るであらう。

而して之を前年に比すると内地流通高は39,547千圓の膨脹を示して居る又朝鮮、臺灣、兩銀行券も之を前年に對比すれば前者は7,917千圓、後者は2,111千圓の増加である。

昭和二年に於ける信託業の營業狀況をみるに
信 託 本店39、支店11、資本金88,425千圓積立金10,584千圓金銀在高2,866千圓で其の入金7,962,992千圓、出金7,953,439千圓、純益金9,431千圓、配當金2,288千圓を示してゐる、年末現在信託高は926,057千圓でして前年より312,716千圓を増し中金錢信託は最も大にして7割4分を占め之に亞いで是有價證券信託にして1割7分に當り土地及定着物信託及其他によりて殘餘を占められてゐる。

【擔保付社債信託事業】昭和二年末に於ける會社數は30、拂込資本金580,347千圓、積立金292,311千圓で前年に比し、2社増したるも、資本金1,153千圓、積立金3,039千圓を減少した、年末現在契約口數は83、其の金額357,045千圓で前年比し、17,545千圓を減少した。

【無盡業者】昭和二年末に於ける本店は251、支店90で、之れ

に前年比べると本店 7、支店 14を減少した。

拂込資本金 12,825千圓積立金 4,815千圓で之を前年に比べると前者は 1,615千圓を増し、後者は 214千圓を減少した。

無盡組数は同年 37,169在り其無盡口數 1,291,581で 1組に付無盡口數35に當り、前年に比して一を増した。掛金契約高は 891,903千圓で平均無盡 1口に付き 691圓である。

手形交換及金利 昭和三年中に於ける手形交換は 36,375千枚 其の金額 68,411,260千圓で前年に比し 1,645千枚 5,658,857千圓を増加した、交換高を三大都市別に見れば東京の 31,126,238千圓最も多く、之に亞ぐは大阪の 21,684,366千圓で、京都の 1,535,241千圓は最も少ない。

【金利】 昭和三年中に於ける金利の變動を觀察するに上半期(六月)に於ては定期預金最高 0.64(年利)最低 0.57 證書貸付最高 1.12 最低 0.89 割引手形日歩最高 2.85錢最低 2.29錢であつたが下半期(十二月)に於ては定期預金最高 0.63 最低 0.55 證書貸付最高 1.13 最低 0.84 割引日歩最高 2.88 錢最低 2.14 錢となつてゐる、而して此等は概して何れも前年より低下して居る状態にある。

外國爲替 昭和三年に於ける正金建値外國爲替相場年平均は紐育宛(電信賣) 46.00弗、倫敦宛 1志10片8、巴里宛 11.61法、上海宛 71.5兩、孟買宛 125.00留にして前年に比して圓價低落を示した、而して之を月別にみると紐育宛は上半期三月に最高 48弗を示し以來漸次悪化し十二月 46.13弗を以て越年し倫敦宛も亦四月 1志11片5であつたが以後低落し 9,10月頃少しく回復したるも十二日 1志10片8 を唱えて居る、上海宛は四月 74.5兩に上りたるも漸次低落十月より少しく引戻し十二月には 71兩5 を示してゐる。

郵便爲替貯金及年金 昭和元年度中に於ける内國郵便爲替振出口數 36,693千口、其の金額 989,907千圓、平均 1口の金額 26圓98錢で前年に比し 1,931千口、40,542千圓を増加し、平均 1口 30錢を減少した、拂渡は口數 36,593千口、其の金額 990,298千圓、平均 1口の金額 27圓06錢で前年に比し 1,876千口 40,471千圓を増加し平均 1口 29錢を減少した。

昭和二年度中に於ける外國郵便爲替は外國へ振出口數 57,721、其の金額 2,455,520圓、平均 1口の金額 42圓54錢で前年に比し 344口、60,786圓、平均一口の金額は 77錢を減少した、外國より振込口數は 141,585、其の金額 6,769,577圓、平均 1口の金額 47圓81錢で前年に比し 854口 169,402圓を増加し平均 1口1圓1錢を増加した。

外國へ振出金額別に見ると支那の 1,500千圓最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の 306千圓、獨逸の 220千圓、英吉利の 100千圓 佛蘭西の 69千圓、加奈陀の 32千圓等外國より振込金額は支那の

2,324千圓最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の 2,334千圓、加奈陀の 921千圓、布哇の 748千圓等が主なるものである。

【郵便貯金】 昭和二年度末に於ける内地及朝鮮、臺灣、樺太、關東、南洋各廳所管の郵便貯金及特殊郵便貯金人員は 32,749,372人、貯金現在高は 1,634,227千圓、預金者 1人の貯金高は 49圓 90錢である、前年との比較すれば 2,118千人、 333,254千圓を増加して居る。右の中内地に於ける貯金は人員に於て 9割 1分、金額に於て 9割 6を占めて居る。

【郵便振替貯金】 昭和二年度末に於ける加入人員は 262,881人、其の預金額 51,108,997圓である。

【郵便年金(官營)】 昭和二年度郵便年金は収入は 12,051,671圓にして内 9,015,011圓は掛金にして總額の 7割 5分に當つてゐる、其他の収入は利子及雑収入である、支出事業費 222,457圓支拂年金 104,140圓、返還金 336,406圓、年度末積立金 11,352,670圓となつて居る、本年度中に於ける新契約は 141,374件掛金 8,530,016圓其の年金額 11,648,305圓となつて居る、同年度中に於ける死亡は 451件、掛金 34,542圓年金額 43,731圓解約其他件數 37,109件掛金 562,923圓年金額 4,329,922圓にして年度末現在に於ける件數 172,368件其掛金 11,032,982圓年金額 13,790,532圓である。

保 險 昭和二年度末に於ける簡易生命保險契約は 11,666 千件其の保險金 1,486,426千圓で前年に比し 1,615千件 199,918千圓を増加した、1件に付保險金は 127圓となつてゐる、同年度中新規契約は 2,453,705件で前年に比し 53,411件を減少した、同年度に於ける被保險者の死亡は 129,540件其の保險金 17,343千圓である。

地方別に契約の多寡をみると東京の 1,358千件、251,145千圓最も多く之に亞いで大阪の 623千件、107,676千圓、北海道の 566千件、84,593千圓等で最も少なきは南洋の 106件、27千圓である。

昭和元年に於ける簡易生命被保險者の職業は商業 2割 6分、工業 2割 4分、農業 2割 3分、公務自由業 1割 2分の順位で以上で全數の 8割 5分を占め他は何れも 1割以下である。

昭和二年度に於ける簡易生命保險事業収入は 307,330千圓で前年に比し 80,719千圓を増加した、収入の内容は保險料 93,079千圓、前年度末積立金 200,917千圓、利子収入 13,146千圓、雑収入 188千圓である。支出は事業費として 14,738千圓、支拂保險金 13,477千圓、還付金 4,675千圓で本年度末に於ける積立金は 273,124千圓である。

前項の積立金中運用した額は 200,916千圓で其の種類は小學校建築資金に 34,105千圓、自作農創設維持に 30,830千圓、住宅資金に 12,459千圓、上水道に 14,988千圓、公債證券及預金に 58,113千圓を投じたものが主たるものである。

【民營保險】 昭和二年度末に於ける保險會社數(兼營を含む)は

生命保險 42、嚮兵保險 4、傷害保險 5、火災保險 50、海上保險 42、運送保險 34、自動車保險、盜難保險各 2、信用保險、機關汽罐保險、硝子保險各 1で前年と變りない。

生命保險契約年度末現在高は 4,825千件其の保險金 5,522,383千圓で前年に比し 20,267件、324,916千圓を増加した、被保險者の人口に對する割合は千人に付 78.8にして 1件平均保險金は 1,142圓である。年度中の新規契約は 643千件、其の保險金 1,051,675千圓で前年に比し 133千件、88,804千圓を減少した、新規契約 1件平均の保險金は 1,636圓で前年度に比し約 152圓多額である。

嚮兵保險年度末契約は 882千件、其の保險金 446,742千圓で前年に比し 47千件、47,809千圓を増加した、年度中の新規契約は 159千件、其の保險金 118,390千圓で前年に比し 9千件、816千圓を減少した。

傷害保險の年度末契約は 57,215件其の保險金 110,495千圓で前年に比し 22,941件、3,738千圓を増加した。

火災保險年度末の契約は 11,179千件、其の保險金 14,954,690千圓で前年に比し 1,295千件保險金額は 1,025,880千圓を増加し 1件平均 1,338圓である。

海上保險年度中の新規契約は 3,453千件、其の保險金 6,570,489千圓で前年に比し 319千件保險金額は却つて 485,136千圓を減じた、而して 1件當り平均は 1,903圓である。

運送保險年度中の新規契約は 1,548千件、其の保險金 3,473,199千圓で前年に比し 644件 60,646千圓を増加した、1件平均 2,247圓である。

VI. 貿

貿易總額 昭和三年中内地よりの輸出額は 1,171,955千圓で内地への輸入は 2,196,315千圓となつて

居る。輸出及輸入總額は明治初年僅に 3、40,000千圓に過ぎなかつたが二十一年に於て 100,000千圓臺、三十三年には 500,000千圓臺となり、尙駭々として増加し大正元年には 1,000,000千圓臺に上り殊に歐洲大戰勃發以後は其の進展甚だ急速で六年には 2,000,000千圓、七年には 3,000,000千圓、八年及九年には 4,000,000千圓に躍進したが、十年に至て頓に 1,500,000千圓を減少して 3,000,000千圓に降つた、十一年は 660,000千圓を増加して大正七年當時の總額に略々等しくなり十二年は前年より 100,000千圓餘を減少したが大正十三年には 800,000千圓を増加して大正八、九年當時の總額と等しいものとなり、大正十四年は尙も増加して 5、000,000千圓臺を示さんとするに至つたが昭和元年よりは輸出入共に減少を示すやうになつた。

輸出及輸入兩者の權衡は時代に依て一様ではない、明治初年から十四年迄は大體輸入超過し、二十六年迄は大體輸出超過し、大正二年迄は再び入超となり、三年乃至七年の歐洲大戰中は連年出

信用保險年度中の新規契約は 2,119件、其の保險金 5,574千圓で前年に比し 195件を減じ、保險金 556千圓を増加し 1件平均 2,639圓である。

機關汽罐保險年度末契約は 1,012件、其の保險金 4,637千圓、自動車保險は 52,644件、其の保險金 35,054千圓、盜難保險は 19,834件、其の保險金 2,750千圓あり、右の内機關汽罐保險金額は前年に比し減少したるも他は何れも前年度末より増加して居る。

昭和二年度末に於て實際事業を營める外國保險會社の内地支店は生命 3、火災 26、海上 15 で、前年と増減なく、年度末に於ける契約は生命 35千件、173,911千圓、火災 389件、1,315,699千圓、海上 12,786件、42,149千圓である。

【健康保險】 昭和二年度末に於て健康保險被保險者總數は 1,889,244人にして其内 1,859千人は強制被保險者 29,924人は任意被保險者 317人は任意繼續被保險者である。

政府管掌の被保險者總數は左の内 1,115,221人にして 5割 9分を占め他は組合管掌の被保險者である。

被保險者の最も多き地方は大阪府の 305,372人にして東京府の 199,031人之に亞き 100千乃至 150千の地方に長野、愛知、兵庫、福岡等ある、而して其の最も少なきは沖繩縣の 1,480人である。

保險金給付件數 6,806,473件にして其の内療養 5,705千件療養費 18,044千圓、傷病手当 971,633件等主なるものにして何れも業務外の件數が遙かに多い。

易 (表161—183頁參照)

超で然も其の額 600,000千圓に垂々とする盛況であつたが八年以降逆轉して入超相踵ぎ十三年は 651,000千圓の入超を示し未曾有の現象であつたが其後稍持直し昭和三年に於ては 224,360千圓の輸入超過を示してゐる。

内地對朝鮮及臺灣の移出入貿易額は次第に増加し來り昭和元年に於ては總額 910,000千圓に達し大正元年に比し 6倍餘に上つて居る、而して最近引續き内地への移入超過で昭和元年には 170,000千圓を示して居る。

昭和二年中朝鮮の輸出及輸入額は 142,078千圓で 85,810千圓輸入超過し、臺灣の輸出及輸入額は 110,438千圓で 21,243千圓輸入超過である。朝鮮の貿易は常に輸入超過し、臺灣は歐洲大戰當時輸出超過であつたが戦後後期からは連年入超に逆轉した。

昭和二年中の主要外國貿易は英吉利 1,805 百萬磅、佛蘭西 108,078 百萬法、北米合衆國 8,682 百萬弗、伊太利 35,984 百萬利、白耳義 55,560 百萬法等是等の諸中輸出超過は佛蘭西及北米合衆國の二國で他は皆輸入超過となつて居る。

【國別】 昭和三年の輸出は北亞米利加洲の 858,598千圓 (4割

4分) 亞細亞洲の 834,959千圓(4割2分)歐羅巴洲の 160,346千圓(8分)で全體の9割4分を占め殘餘の 6分は阿弗利加、南米、太平洋洲である。北米の中では合衆國が大部分を占め、亞細亞洲では支那の373,142千圓、英領印度の146,007千圓、關東州の110,190千圓、關領印度の 73,414千圓、香港の 56,204千圓、比律賓諸島29,055千圓海峽植民地の20,449千圓、暹羅の5,763千圓等の順位であり、歐羅巴洲では佛蘭西の 63,409千圓、英吉利の 58,904千圓、獨逸の 12,582千圓、以外は数百万圓から數十萬圓のものが多い。阿弗利加洲では埃及、南米では亞爾然丁、太平洋洲では濠洲が主なるものである。

輸入は亞細亞洲の 903,144千圓(4割1分)北亞米利加洲の693,621千圓(3割2分)歐羅巴洲の 403,703千圓(1割8分)で全體の9割1分を占め殘餘の 9分は太平洋洲、阿弗利加洲、南米である。亞細亞洲の中では英領印度の285,471千圓、支那の234,547千圓、關東州 150,439千圓、關領印度の 112,039千圓が主なるもので、北亞米利加洲では合衆國が大部分を占め、歐羅巴洲では英吉利の164,840千圓、獨逸の 133,534千圓、佛蘭西の24,006千圓、瑞西の19,940千圓、白耳義の 14,497千圓、瑞典の 10,767千圓が主なるものである。大洋洲では大部分濠太刺利、阿弗利加洲では埃及、南米では智利が主なるものである。

【物品種類別】 昭和三年に於ける貿易品の種類を大観すると輸出では原料用製品4割2分、全製品 4割1分、遂に降て製造食料品6分、原料品 5分、粗製食料品 2分を占め、輸入では原料品 5割3分、原料用製品 1割7分、全製品 1割5分、粗製食料品 1割、製造食料品 4分を占めて居る。之を前年に比較すると輸出では製造食料品の割合増加したる他大差なく、輸入では原料品の割合減少し、原料用製品及全製品つ割合増加した。

輸出品を箇々の品目に就いて見ると其大部分は生絲の732,697千圓(3割7分)で遂に降て生金巾の 69,809千圓、綿襪子の61,042千圓、細綫の42,101千圓、精糖の38,415千圓、壁織、縮緬の 35,713千圓、富士絹類の35,684千圓、陶磁器の34,643千圓、羽 二重の 33,040千圓等で尙 20,000千圓以上のものは小麥粉、綿織絲、綾木綿、生シーチング、晒金巾、晒シーチング、綿メリヤスシャツ、石炭、等にして 10,000千圓以上のものは豆類、綠茶、蟹罐詰、縞木綿、綿フランネル、更紗、ボンジー、帽子、印刷用紙、鐵製品、木材、等である。

輸入品の大部分は綿綿の 549,613千圓(2割5分)で羊毛の111,856千圓、木材 111,008千圓、豆糟 73,362千圓、小麥67,787千圓、砂糖の 64,959千圓、鐵板の55,854千圓、大豆の49,681千圓、原油及重油の45,163千圓、之に亞ぎ、30,000千圓臺のものは米及粳、石

油、硫安、毛織絲、毛織物石炭等にして 10,000千圓以上のものは印度護漢及カタパーチア、大麻黃麻マニラヘンプ、製紙用パルプ、燐礦石、鐵礦、銑鐵、丸角平テ形等鐵、ワイアロード、鐵屑及放鐵、鉛、亞鉛、自動車及同部分品、汽船、瓦斯石油熱汽機關、紡績機、數等である。

輸出品の主要なるものに付其の主要輸出先を見ると生絲は北米合衆國に特に多く(9割4分)佛蘭西、之に亞いで多い。綿織絲は英領印度、支那、香港。綿織物は支那、英領印度、關領印度、阿弗利加、香港、關東州。絹織物は濠太刺利、英領印度、北米合衆國、加奈陀、佛蘭西、英吉利、喜望峰。石炭は支那、香港、海峽植民地比律賓。陶磁器は北米合衆國、關領印度、英領印度、支那、關東州、加奈陀。メリヤス製品は英領印度、英吉利、比律賓、阿弗利加、關領印度、支那。精糖は支那である。

輸入品の主なるものに付其の主要仕出地を見ると實綿及繰綿は北米合衆國及英領印度、にて 8割7分を占め、支那、阿弗利加之に亞いで居る。羊毛は濠洲(9割4分)英吉利。鐵類は北米合衆國、英吉利、獨逸。油糟は支那、關東州。木材は北米合衆國、露領亞細亞、加奈陀、暹羅。毛織物は英吉利、獨逸。砂糖は關領印度(9割8分)玖馬。小麥は加奈陀、北米合衆國。豆類は關東州、支那。硫酸アンモニウムは獨逸、英吉利、北米合衆國。機械類は北米合衆國、英吉利、獨逸である。

昭和二年朝鮮の輸移出品中主要なるものは米の191,575千圓、大豆の 22,942千圓、生絲の13,607千圓柞蠶絲の12,259千圓、砂糖の5,986千圓、銑鐵の5,406千圓、で同輸移出品中主要なるものは粟の31,649千圓、藥材130,52千圓生金巾及生シーチング11,415千圓で尙10,000千圓以上のものは柞蠶絲各種織物、石炭、等である、而して同臺灣の輸移出品上主要なるものは砂糖の99,488千圓、米及粳の68,009千圓、魚介8,896千圓、芭蕉實の8,789千圓、等で同輸移出品中主要なるものは玄米精米粳の16,039千圓、豆糟の12,323千圓、等である。

【輸出及輸入港】 昭和三年輸出の最も多いものは横濱で輸出總額の3割8分を占め神戸の3割2分、大阪の2割1分之以に亞ぎ名古屋は2分5厘、門司は2分2厘である。輸入の最も多いのは神戸で輸入總額の 4割を占め横濱の2割8分之以に亞ぎ大阪の1割3分、名古屋 3分9厘門司の3分7厘之以に亞ぎ前年と略々同じになつて居る。

【金貨及金銀地金の輸出輸入】 昭和三年に於ける輸出は金無く銀は 3,436千圓、輸入は金 410千圓 2,287銀千圓で前年に比し金銀とも輸出減少し、輸入は金増加銀減少した。

國別に見ると金の輸出入は北米合衆國、銀の輸出入は支那、北米合衆國、關東州、香港である。

VII. 交

通 (表184—209参照)

道路及橋梁

昭和二年末に於ける道路(道路及次項橋梁は毎三年一回調査) 延長は國道 2,097里府縣道又は地方費道22,742里、市道は5,524里、町村道は 210,031里で1方に付國道は 3町、府縣道又は地方道は33町、市道 8町、町村道は 8里17町、合計 9里25町に當る。

【橋梁】 橋梁は國道 8,536、府縣道又は地方費道 88,046、市道は 9,003町村道 305,287である。其の構造鐵橋 1,864、石橋93,162、木橋146,441、土橋147,747、其他21,658である。

通信

昭和二年度末に於ける郵便局は一等局70、二等局208、三等局 8,593、合計 8,871で前年に比し一等局には増減なく、二等 5、三等82、合計87を増加し、電信局は一等普通局 3、無線局 2、二等普通局 6、無線局29、合計40で前年に比し一等無線 1 を減少し、電話局は本局 7、分局38で前年に比し分局 3を増した、尙電信取扱所普通 1,020、無線685電信電話取扱所 1、電話所193、公衆電話 1,800、切手賣所 66,269、郵便函 70,353、郵便私書函8,810 あつて前年にべると電話所の減少した以外は何れも増加した。

郵便局を地方別に見ると北海道の 576最も多く之に亞ぐは東京の479新潟 317、兵庫の 308、200以上は福島、長野、静岡、愛知三重、京都、大阪、岡山、廣島、山口、福岡、長崎、鹿児島で其他は100乃至200のものが多い。

【通常郵便物】 昭和三年度中の引受内國通常郵便物は4,764,671千通で前年に比し 98,617千通を減少したが、之を十年以前に比べると倍加して居る。人口に對する割合は一人に付77通に當り前年に比し 2通を減少した。

同年度中の外國通常郵便物は發送 24,564千通、到着38,708千通で前年に比し發送 2,327千通到着 2,201千通を増加した。

國別に見ると發送は支那の 10,573千通最も多く、北米合衆國の 3,931千通、グレートブリテンの 1,451千通、獨逸の 1,118千通等が之に亞ぎ、到着は同じく支那の 11,414千通最も多く北米合衆國の 9,875千通、グレートブリテンの 4,467千通、獨逸の 3,993千通等、が之に亞いで多い。

【小包郵便物】 昭和三年度中の引受小包郵便は63,335千箇で前年に比し 2,779千箇を増加した。

【電報】 昭和二年度中の電報發信は67,339千通、著信は69,899千通で前年に比し發信 169千通、著信 1,339千通を増加した。

右の中外國への發信は 1,126千通、著信は 1,193千通で前年に比し發信は 7千通を減少し、著信は 4千通を増加した。

發信を國別に見ると支那の 457千通最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の157千通、英吉利の100千通、印度支那の83千通、等であ

る。【電話】 昭和二年度末に於ける電話交換取扱局所は 2,450加入人員は 609,146人で前年に比し交換所188、人員 56,589人を増加し、人口に對する加入者の割合は 1,000人に付 9.9で前年に比し 0.9を増加した。

鐵道

昭和三年三月末に於ける開業鐵道は國有 8,837哩、地方鐵道 3,753哩、合計12,590哩で前年に比し國有 830哩、地方 416哩を増加した、尙未開業に係る國有鐵道670哩、地方鐵道2,382哩、合計3,052哩ある。開業に係る鐵道は100方に付51哩で前年に比し 5哩を増加した。之を歐米の諸國に比較すると 100方に付白耳義の 150哩、瑞西の 135哩、獨逸の 119哩、丁抹の 109哩、和蘭の 106哩、英吉利の 101哩等に及ばぬこと遙に遠く、洪牙利の88哩、佛蘭西の73哩にも亦及ばぬ。

停車場數は國有線に2,484 地方線に2,870、機關車は國有4,114輛、地方966輛、客車は國有 10,766輛、座席603,918輛、地方3,299輛、座席 184,232、貨車は國有 64,211輛、地方 10,561輛で前年に比し何れも増加した。

昭和二年度の列車走行哩は國有鐵道100,478千哩、地方鐵道15,852千哩等で、前年に比し國有 5,508千哩、地方672千哩を増加した。

昭和二年度末朝鮮に於ける鐵道哩數は2,014哩、未開業線1,961哩にして同臺灣 1,935哩、同樺太 157哩にして是等を合するも内地の 3割の延長を有するに過ぎず。

【乗客數】 昭和二年度の乗客數は國有 789,949千人、平均一日 2,164千人、地方307,582千人、平均一日843千人で前年に比し何れも著しく増加した。鐵道乗客は三等客が殆ど全部を占め一等客は1毛にも達しない。輸送貨物の噸數は國有77,384千噸、地方23,494千噸で前年に比し何れも著しく増加して居る。

【營業收支】 昭和二年度に於ける國有鐵道は營業收入506,445千圓、營業費 281,988千圓、益金 224,457千圓で資本金に對する益金割合は 100圓に付10圓58錢に當り前年に比し 2圓65錢を増加し、地方鐵道は營業收入 74,696千圓、營業費 42,105千圓、益金 32,592千圓で資本金に對する益金割合は 100圓に付 3圓38錢に當り前年に比し31錢を減少した。

【電氣鐵道】 昭和二年度末に於ける電氣鐵道事業者は96、線路 1,183哩、車輛 7,094、平均一日乗客數 4,898千人で前年に比し事業者 8、線路38哩、車輛358を増加し、平均一日の乗客171千人を増加した。

【交通事故】 國有鐵道死傷者は過失其他に依る死亡乗客 58人

職員 119人、公衆503人、傷者は乗客 1,190人、職員 58人、公衆 836人で鐵道自殺者は死亡 1,898人、負傷者126人である。地方鐵道では乗客職員公衆を通じ過失死亡165人、負傷者406人自殺者は死亡 142人、負傷 17人である。

昭和二年に於て自動車、自轉車、人力車、荷車等に因る事故件数は 49,115にして前年より 6,889 を増加した、總件数中最多きは自動車の 4割 2分で自轉車の 2割 7分、牛馬車の 7分之二に亞て居る、而して自動車、自動自轉車自轉車の事故件数は増加し他は減少して居る、尙同件数に於ける死亡者数は 2,083傷者数は33,222 で何れも前年より増加して居る。

【諸車】 昭和三年度末に於ける馬車は乗用 2,232、荷積用315、933、牛車は、85,278、荷車は2,116,281、自動車は乗用40,063、荷積用 20,470、人力車は43,463自轉車は自動19,028通常5,025,124で前年に比べると馬車、牛車、荷車及人力車は減少し他何れも増加した。

航空

昭和三年末に於ける民間航空機臺数は、106、乗員免狀受有者336人、製作所13で機臺數同じき他何れも前年より増加して居る、同年に於ける飛行回数は17,528回、同時間 8,393時間35分である、同年航空事故に依る死傷人員24人内死亡17人で前年に比し死亡14人を増し負傷 3人を増加して居る、飛行 10,000 時間に付事故回数は次第に減少の状態に在り昭和二年には 34.5回で飛行 10,000回に付死傷人員数は13.7人である。

船舶

昭和二年中に於ける主要港への入港船噸數最も多いのは門司の 25,080千噸で、神戸の22,996千噸大阪の17,637千噸、下關の15,655千噸、横濱の14,903千噸若松の10,036千噸、小樽 7,384千噸で尙2,000千噸以上5,000 千噸臺の入港船のある港は、函館、室蘭、青森、清水、名古屋、四日市、宇品、御手洗、高松、高濱、三池、長崎である、各港への入港船は主に汽船であるが獨り御手洗は避難港であるが爲帆船が大部分を占めて居る。

【汽船、帆船】 昭和二年末に於ける汽船は 8,091隻、其の噸數 3,729千噸で前年に比し 312隻、67千噸を増加した、汽船を噸數階級別に見ると、10,000噸以上 11隻(1厘) 6,000噸以上10,000噸 106隻(1分3厘) 3,000噸以上6,000噸353隻(4分4厘) 1,000 噸以上 3,000噸 433隻(4分4厘)500噸以上 1,000噸235隻(2分9厘) 100噸以上 500噸 565隻(7分) 20噸以上 100噸 1,584隻(2割) 5噸以上 20噸未滿 4,804隻(5割9分)で前年に比し割合上20噸未滿の不登簿船及大船は増加し千噸未滿の割合は概ね減少した。

VIII. 社 會 事 業 (表210—210頁參照)

施設

社會事業の行政機關としては一般關係は社會局の所管に、釋放者保護、不良兒の審判及矯

帆船(噸數船)は 43,243隻、其の噸數 1,273 千噸で前年に比し 1,082隻 3千噸數を増加した。

石數帆船は 5,377 隻、其の積石數 674,856 石で前年に比し 14隻38,003 石を減少した、既往に比較すると逐次減少の趨勢で十年以前に比べると隻數は半減し石數は3分の1に減少した。

【小船】 昭和四年三月末に於ける 5噸又は50石未滿の帆船、傳馬船、倉庫船耕作用船等の小船(漁船を除く)は 185,514 隻で前年に比し 5,225隻を減少した。

之を地方別に見ると最も多いのは大阪の 15,615 隻で之に亞ぐは茨城、11,980隻廣島の11,632、滋賀の 10,593隻、長崎の9,198 隻、5,000隻以上 10,000 隻を有するは千葉、新潟、静岡、愛知、兵庫、島根、高知、熊本である。

【造船所】 昭和二年末に於て20噸以上の船舶を建造する設備ある造船所は 356で前年に比し 37 を増加した。船渠は46、浮船渠は 1で前年に比し前者は 3を減少した。

大正十四年中に於ける 100噸以上の船舶建造數は汽船31隻、其の噸數 51,658噸、噸數帆船 4 隻其の噸數 815 噸で前年に比し汽船は 4隻、355噸を増し、帆船は 1隻を減じ 255噸を増した。

【海技免狀受有者】 昭和二年九月末に於ける船長、運轉士、機關長、機關士の數は 63,961人で前年末に比し 3,807 人を増加し十年前に比べると三倍近く増加した。外に外國人 132人あつて前年と同數である。

【船員】 昭和二年末に於ける船員は 155,044人で他に外國人船員 3,246人ある。

【遭難船】 昭和二年中に於ける遭難船は 4,671隻で前年に比し 527 隻を増加した、遭難船は汽船 4,227 隻、帆船 444隻である。

遭難船の死傷人員は 446人で前年に比し 305人を減少した。遭難者中死亡は 116人、負傷は62人、行衛不明は 268人である。

【命航路に服する汽船會社】 昭和二年度末に於ける拂込資本金は日本郵船 64,250 千圓、大阪商船 62,500、日清汽船 10,125千圓、南洋郵船 4,563 千圓、北日本汽船 2,325千圓、である。

運輸成績を見ると日本 郵船は昭和二年度に於て船客 127千人貨物、3,938 千噸、大阪商船は昭和二年度 船客 2,150千人、貨物 8,121千噸、日清汽船は船客 170千人、貨物 719千噸、南洋郵船は船客 873人、貨物192千噸、北日本 汽船は船客 152千人、貨物 1,209千噸である。

正に關しては司法省に、社會教育、特殊教育關係は文部省に又社會衛生事項は内務省の所管に屬する、而して大正十四年末に於ける

355人が之に亞いで多い、而して男は 81% に該つてゐる。

【勞務者共濟】 昭和三年に於ける共濟組合數は 3同組合加入者數 1,171千人にして前年に比し1組合434千人を増加した。同年に於ける掛金又は會費總額は 50,803 圓其給付延數 17,485人31,978 圓である。給付中最も多きは傷病醫療及廢疾の 13,571人 24,552圓で休業失業が之に亞いで多い。

【映畫檢閲】 昭和三年中の檢閲總件數は 18,893にして、一箇月平均 1,574件は、大正十四年の1,148件昭和元年の 1,279件昭和二年の1,342件に比して遞増を示し、檢閲卷數、米數、手数料共之に準じてゐる、而し之を製作國別に見ると、日本物著しく増加せるに反し、米國物は前年より35%を減じてゐる。更にフィルムの種類を見るに、殆んど實體畫にして、娛樂劇其の49%を占めてゐる、日本物は現代物 100に付時代物 139に該り、米國物は現代物 100に付、時代物 8に過ぎず、歐洲物は同24である、之を前年に比すると、日本物は時代劇増加の傾向を示し、米國及歐洲物は、其の反對の現象を呈してゐる。

【娛樂場】 劇場の常設は、昭和二年末に於て1,846で、臨時のもの36,758あり、前年に比し、前者は 247 の増後者は984 の減である。常設、臨時を通じ、福島縣の 4,130最も多く、埼玉、愛媛、茨城、等之に亞ぎ、最も少ないのは沖繩縣の38である。

活動寫眞館は、劇場に比して常設、臨時共に累年増加し、昭和二年に於ては常設 1,078臨時69,863在り前年に比し前者50、後者 4,044を増加した常設活動寫眞館數は東京の195を最多とし、大阪の 97、福岡の67、神奈川の60、北海道の55が之に亞いで多い。

活動寫眞館の有料興業に於ける觀客數は、昭和二年中164,404千人で、常設館其の77%を、大人小人別に見ると、大人が72%を占めてゐる、又常設館に對する一日觀客數は323人で、人口1に對する觀客數2.7に該り年前より0.2増した。

寄席及觀物場の常設は昭和二年末前者679、後者 55にして同臨時17,641、11,737にして概して停頓の趨勢に在る。遊藝場は同年末 13,009 在り最近増加の趨勢を示して居る。

IX. 勞 働 (表221—246頁參照)

る社會事業相互の聯絡統一を圖る機關は、一道、三府二十四縣に設置を見、調査研究及養成機關は 23、助成機關は 75ある。

救護としては防貧事業最も多く普及し、兒童保護、司法保護亦施設せらるゝ所が多い。

【獎勵助成金】 昭和三年内務省社會局交付の團體數は 281金額 59,500圓にして前年に比し 31團體 5,500圓を増加して居る、内育兒最多く 70 團體 17,600圓にして幼兒保育及兒童少年保護の 52 團體 8,900圓、救療の30團體 5,000圓が之に亞いで多い。

【罹災救助金】 昭和元年救助金支出總額 962,860圓にして支出中食料費は 27% 避難所及小屋掛費 39% を占めて居る、地方別に見ると、京都府の 617,931圓特に多く静岡の 68,927圓、鹿兒島 24,461圓、廣島19,856 圓等が之に亞いで多い。

年度末に於ける基金現在高は 75,376,699 圓で、前年より約 260萬圓餘を増し、尙遞増の傾向にある。

【恤 救】 恤救規則に依る昭和元年救済人員 13,707 人で、前年より 1,650人を増加してゐる、年末現在者 9,627人中最も多きは老衰者の 3,620人で、疾病、幼弱、廢疾の順に亞いで居る。而して此の救済金 460,617圓中地方費は 78%を占めてゐる。

【養育棄兒】 養育棄兒數は前々年迄漸減の狀態であつたが、大正十四年に至り9人昭和元年に3人の増を示した、然し年末現在數は前年より 2人の減であつて、此の養育費は國庫、地方兩費より支給せるもの 75,534圓で、總額の 74%に該つてゐる。

【行旅病及死亡】 昭和元年中の行旅病人は 7,462人、前年より 351人の増で、地方別に見ると、東京府最も多く 2,047人あり、大阪府の 1,451人北海道の 814人之に亞ぎ、其他の府縣に於ては數十人臺のものが多い。而して男は總數に於て其 83%を占めて居る。同年中の行旅死亡人は 3,608人で、地方別に見ると、東京府の 653人最多とし、大阪府の 376人 兵庫の

【實地調査結果】 大正十三年十月十日勞働統計實地調査の結果に係る工場數(原則として30人以上の勞働者を使用するもの)は 7,130で勞働者は 1,326,289人中男 600,669人女 725,590人で 1工場に付平均勞働者 186人を使用して居る鑛山數(50人以上の勞働者を使用するもの) 335、勞働者 292,835人中男222,172人女 70,663人で 1鑛山に付平均勞働者 874人を使用して居る男女使用の割合を見ると工場では女 100に付男82.8で女子

が多いに反し鑛山では女 100に付男 314.4で約 3倍の男を使用して居る。

工場數を地方別に見ると大阪の 1,179を最多とし東京の915、愛知の 536、兵庫の 464、長野の 305之に亞ぎ静岡、廣島は 200臺北海道、群馬、埼玉、神奈川、新潟、石川、福井、三重、和歌山岡山、愛媛、福岡は 100臺で最も少ないのは大分、沖繩の各 9である。

鑛山數にありては福岡の86、最も多く北海道の46、長崎の31、福島

の26之に亞き秋田は15、山口は13、新潟、佐賀は各12、岩手10で其他は10以下である。

労働時間別に工場数を見ると11時間以内の2,097最も多く10時間以内の1,852、12時間以内の972之に亞き(全工場の7割は9時間以上労働する工場

失業調査 大正十四年十月一日に施行された失業統計調査の結果に依る調査人口は2,355,015人で其の内失業者は105,612人あり4分5厘に當る、給料生活者是有業者595,935人、失業者19,396人で失業率は3分9厘労働者是有業者1,487,155人、失業者46,278人で失業率は3分、日傭労働者是有業者166,313人失業者39,938で失業率1割9分4厘で前二者に比し遙かに高率である。

調査地域別に失業率を見ると給料生活者にありては佐世保市及其附近の5分8厘、八幡市及其附近の5分2厘等高く概して九州地方が多い、札幌市及其附近の4分6厘之に亞き比較的少なきは京都地方、名古屋地方、足尾地方である、労働者にありては横濱市及其附近の7分5厘、(横濱市8分7厘)最も高く、長崎市及其附近の5分8厘佐世保市及其附近並に門司市の各5分5厘、京都市、名古屋市、濱松市、金澤市、和歌山市、足尾地方の1分臺である、日傭労働者にありては岡山市及其附近の4割、横須賀市及其附近の3割2分佐世保市及其附近の3割、神戸市及其附近の2割7分等最も多く少ないのは夕張町1分6厘、金澤市及其附近の3分、札幌市及其附近4分4厘等である。

職業紹介 【公設職業紹介所】 昭和三三年中に於ける職業紹介所の状況を見るに、其取扱所數206に於て取扱にかゝる求人數690,275人求職者750,791人、就職者215,717人で求人數の7割1分、求職者の8割3分は男である、前年に比すると紹介所の數16を増し求人數65,725人増加し求職者數は43,895人減少を示し就職者は約109人の増加を示して居る。

求職者に対する就職者の割合は男2割6分、女4割3分で前年に比し男1分増、女1分を減少した。男は上半期より下半期が就職の割合が高く女も大體に於て同様の傾向を示してゐる。

昭和三三年中に於ける日傭労働求人數は2,977千人、求職者3,374千人其の紹介件數2,973千人で其の内男は何れも9割8以上を占めて居る、之を前年に比べると求人數、求職者數、紹介件數共に約600千人の激増である。

求人數、求職、就職者の業態別は求人數は商業の182,166人、工業及鑛業の161,305人、戸内使用人、136,138人等多く、尙其細分に付てみれば僕婢の104,181人、小店員の56,052人、土方日雇の52,796人、外交集金人の45,115人等が多く、其他20,000人以上のものは裝身具、店員、商店雑役、飲食店雇人、配達人である、求職者は工業及鑛業211,099人最も多く商業の157,884人雑業151,593人、戸内使用人128,728人等之に亞き其細分に於ては事務員の71,260人、店員58,294人僕婢の57,938人商店雑役の40,936人が、特に多く其他20,000人以上に機械器具、金屬工業、土方日雇、飲食店雇人、書生給仕、配達人が在る。就職者の多いのは工業及鑛業の50,636人最も多く、商業の46,912人戸内使用人の44,399人が、之に亞いて多い。

營利職業紹介所並に家庭職業紹介所に於ける状態をみるに前者昭和三三年に於ては年末營業者數3,414にして右の取扱に係る求職者數は972,400人求職者數713,971人、紹介件數747,191、就職者數464,439人を示し公設紹介所と趣き異にして求人數に比して求職者數は著しく少ない。

家庭職業紹介所に於ては求人數1,417人、求職者數1,237人、紹介件數1,064を示してゐる、而して其の主なるものは和服裁縫にして殆んど大部分を占めて居る。

労働争議 昭和二年年中に於ける罷業件數346件参加人員43,669人で争議の原因は待遇改善要求賃銀増額要求及賃銀減額反對其大部分を占め、待遇改善要求は總件數中3割7分増額要求は2割6分減額反對は1割6分で之を前年に比べると件數123、参加人員19,975人を減少した、尙一件當り参加人員は126人で前年より10人の減少である、之を既往に比較すると大體小罷業が漸く減じて大罷業増加の傾向を示してゐる。

労働争議中同盟罷業數を業態別に見ると染織87件最も多く雑工業65の化學工業の56、機械金屬品製造48件之に亞いて多い、其の最も少いのは通信従業員の1である、同年中に於ける怠業件數は17参加人員2,194人で前年に比し9件、1,396人を減少し、罷怠業に至らざる争議件數は20件参加人員809人あつた。

【小作争議】 昭和三三年中に於ける小作争議は1,866件で前年に比し186件を減少した。件數を地方別に見ると大阪の201件、特に多く、秋田の109件、岐阜の99件、新潟及兵庫の93件が之に亞いて多い其の少き地方は岩手の1件、熊本の2件、石川及高知の3件等にして大分及沖繩には發生をみながつた。

争議の關係者は地主19,474人、小作人、75,136人、關係地の種類

は田44,485町歩、畑3,770町歩、其他439町で争議1件に付地主10.4人、小作人40.3人、地主1人に付小作人は3.9人である。

賃 銀 昭和三三年に於ける職工賃金の最高は瓦葺工の3圓33銭で尙3圓以上のものは左官、煉瓦積、石工、2圓50銭以上3圓差は大工、ペンキ塗、墨工、洋服仕立工にして何仕は2圓39銭、植木器具工は2圓30銭、乃至40銭、化學工業に關する職工、飲食物に關する職工は各2圓内外、染織工業の紡績、機械等織維に關する女工は1圓内外、下男は月16圓餘、下女は月12圓餘である、之を前年に比較すると、概して大差なく保合の状勢を示して居る。

更に鑛夫の賃銀をみるに昭和三三年上半期總平均1圓79銭5厘下半期1圓80銭2厘、昭和三四年上半期1圓81銭5厘を示して之を昭和三二年に比較すると僅かではあるが上騰して居る、之を調査鑛種別にみれば總平均に於て最も賃銀の高きは銅其他の2圓52銭にして最低は鉛亜鉛の1圓35銭9厘及び銀銅の1圓38銭2厘である。而して概れ金屬鑛山鑛夫は他に比して賃銀は低い。

鑛 夫 昭和三二年六月末(砂鑛夫は年末)に於ける全國の鑛夫數は295,932人で前年に比し1,948人、而して其一年労働延人員は746,154人前年に比し16千人を増加して居る。鑛夫は石炭山に最も多くて總數の8割1分を占め金屬山は1割5分、其他は分である。

鑛山變災 昭二年年中に於ける鑛山變災回數は163,108回で前年に比し4,776回を増加した、罹災人員は死者1,002人、傷者164,595人で鑛夫千人に付死者は3.39人傷者は556人で前年に比し死者は増加し傷者は減少した。

鑛山の種別別に死傷者の割合を見ると鑛夫千人に付死者は石炭山3.08、金屬山0.26、石油山0.03、其他の非金屬山0.02、傷者は石炭山513.0、金屬山39.3、石油山1.8其他の非金屬山2.6で石炭山に於ける死傷率は甚しく高い。

組 合 昭和三三年末(労働組合は六月末)に於ける總數は6,685組合員815,776人にして其内労働組合は423、人員295,012小作人組合4,353、人員330,406、地主小作人協同組合1,909、人員190,358にして小作人組合最も多く總組合數の4割5分總人員の4割強を占めて居る、以上に於ける労働組合は組合員數1,000人以上のものに付てゐるが、同組

教 育 昭和元年度末に於ける學齡兒童中四月一日に於て既に就學の始期に達した者は男4,790、638人、女4,606,796人、合計9,397,434人で人口に對する割合は

合數はかく限定せざるときは489組合員數303,098人にして産別には機械器具の66組合98,390人化學の57組合、9,967人運輸交通の56組合115,630人等が多い。

【官業員共済組合】 昭和二年年末に於ける印刷局、警察、土木事業、專賣、造幣、陸軍、海軍、林野、製鐵、逓信、國有鐵道の諸官員共済組合の組合員總數は554,315人にして内國鐵道の192,251人最も多く總數の3割5分に該り逓信の152,788人之に亞きて2割8分を占め最も小なるは造幣局の458人である。

此等組合の收入は總額37,724千圓にして其の4割1分は掛金3割4分は政府の給與金2割2分は預金利子3分は其他の收入である、支出は總額14,576千圓にして内3割8分は脱退給與金1割6分は傷災給與並療養金同じく1割6分は殉職並死亡給與金等が主なるものにして他は何れも1割以下である。給與人員は總數666千人にして内疾病並療養338千人、健康保險付158千人脱退給與84千人等が多いものである。

平均一人當給與額は癩疾年金の168圓最も大にして殉職並死亡の125圓之に亞き最も少なきは健康保險給付の4圓餘である。

【友愛組合】 昭和三三年末に於ける組合數は3,011にして其の組合員數517,158人を有し組合數を其の目的に依りて分てば共済を主とするもの1,613、修養を主とするもの366、其他1,032となり、更に組合員數の多寡によりて分てば15人以上50人未滿の1,097が最も多く、總數の3割6分を占めて居る、之に亞いては50人以上100人未滿の735、100人以上300人未滿の591、15人未滿の218にして500人以上及300人以上500人未滿は何れも200以下である。

全國中組合の多き地方は兵庫の213、高知の202北海道の180福島の168、等にして其の少なきは滋賀縣の4、千葉の6である。

【消費組合】 昭和二年年末に於ける消費組合の状況は組合數151、組合員數128,525にして出資總額3,075千圓、中拂込額1,974千圓を有し他に諸積立金として786千圓がある。

1箇年購買品賣却高は21,036千圓にして一方預金1,994千圓借入金2,754千圓を示し、剩餘金として362千圓を示して居る。之を事業別にみれば組合總數中購買組合107にして最も多く7割1分を占め、之に亞いては信用購買組合22購買利用組合11、信用購買利用組合11にして之を構成別にみれば一般市民に依りて構成せらるゝもの57にして總數3割8分を占め之に亞いては俸給生活者の52會社官廳内或は學校内のもの17が多い。

五 教育 及 宗教 (表247—289頁参照)

は男女各100人中男14.8、女は14.7、其の平均14.75で前年に比し男1.5、女0.8を減少した。

學齡兒童の就學歩合は男9割9分5厘、女9割9分4厘、平均

9割 9分 5厘で前年と大差ない。

植民地に於ける學齡兒童の狀態をみるに朝鮮に於ては就學の始期に達したるもの、數男 29,080、女 27,292にして其の就學率は男 9割 9分 7厘、女 9割 9分 7厘にして却つて内地より高率を示して居る。

臺灣に於ては就學の始期に達したるもの男368,096、女 339,679にして其の就學率男は 4割6分、女1割7分にして甚だ低いが内地人に限り觀察するときは男 9割 8分 5厘女 9割 8分 4厘である。樺太に於ける就學始期に達したる者は男女合して、31,297人にして就學率は 9割 9分 9厘に達し他に比し著しく高率を示して居る。

【小校學】 昭和元年度末に於ける小學校數は 25,490 で前年に比し 31校を増加し平均一市町村に付 2.1校に當る。小學校は尋常科のみ 2割 9分、尋常科及高等科併置 7割、高等科のみ1分で之を既往に比較すると尋常高等兩科併置のもの、割合は増加し尋常科のみ高等科のみの割合は減少の趨勢である。

小學校の學級は 193,996で前年に比し 4,796を増加し平均一校の學級數は 7.6で前年に比し 0.2、十年前に比べて 1.71を増加した。

植民地に於ける小學校の狀態をみるに朝鮮に於ては公私立普通合して 1,935校 9,806學級、臺灣に於ては小學校公學校合せて 876校 5,604學級、樺太に於ては 180校 725學級、關東洲に於ては 876校 1,217學級、南洋に於ては 28校 65學級である。

【二部教授】 二部教授施行の尋常小學校は 240校、尋常高等小學校は 250校で前年に比し尋常は 29校減じ、尋常高等は 78校を減少した。

【小學校教員】 小學校教員總數は 216,831人で中、尋常小學校の教育に従事する者 8割4分、高等小學校の教育に従事する者1割6分である、教員の資格は本科正教員 7割7分、専科正教員5分、准教員 7分、で前年と比して本科正教員増加し代用教員は減少し他に於ては増減がない。

小學校教員中男は 6割 7分、女は 3割3分で前年と同割合であるが既往に比較すると女子の割合は漸増し男子の割合は漸減の趨勢に在る。

小學 1校に付本科正教員の割合は 6.5で前年に比し、0.30を増加した、地方別に見ると最も多いのは東京の 13.8にして大阪の 13.5、福岡 10.0、兵庫の9.8、神奈川及沖繩の9.2、愛知の 9.2之に亞ぎ 8人臺は京都、香川、佐賀、7人臺は群馬、埼玉、長野、静岡、鹿兒島で其の少いのは岩手、北海道の 3.4である。

植民地に於ける小學校教員をみるに朝鮮に於ては 1,859人普通學校 6,261人、臺灣に於ては 5,981人、(公學校を含む)樺太892人(土人教育所を含む) 關東州小學校 736人普通學校 804人、南洋

に於ては小學校 13人、公學校81人が各教育に従事して居る。

【小學校兒童】 昭和元年度末小學校兒童總數は、9,287,662人で前年に比し 99,102人を増加し平均一市町村に付 765人、學校 1に付 364人に當る、兒童數を地方別に見ると最も多いのは東京の 518,429人、之に亞ぐは北海道の433,769人、大阪の357,563人、兵庫の356,6000人、愛知の346,002人、福岡の342,929人、新潟の304,925人にして尙 200,000人臺は福島、茨城、埼玉、千葉、神奈川、長野、静岡、廣島、鹿兒島で其の少いのは鳥取の 74,877人、沖繩の 92,208人、奈良の 94,045人等である。

【幼稚園】 昭和元年度末に於ける幼稚園數は 1,066にして前年に比して 109を増加し保姆數 3,274 園児 94,422人にして、前年に比し前者は 449人後者 11,201人の増加である、幼稚園 1に付き園児の數は 89人、保姆 1に付園児の數は 29人にして前年に比し園児 2を増し、保姆 1に付 0.5を減少してある。

【盲聾學校】 昭和元年度末に於ける校數は 113、教員は 795人生徒は 6,405人、卒業者は 1,167人、で前年に比し校數4を増し、教員 125人、生徒 689人、卒業者 187人を増加した。

植民地に於ては臺灣に2校ありて教員23、生徒322人を有し卒業者 35人を出して居る。

【師範學校】 昭和元年度末に於ける校數は 102、教員は2,715人本科生徒は男 30,387人女 14,560人、本科卒業者は男 8,649人女 4,950人で前年に比し、教員 332人、本科生徒 634人、本科卒業者 473人を増加した。

植民地に於ては朝鮮に14校臺灣に 4校在り尙關東州に 1校あつて其教員數は朝鮮 233人、臺灣 101人、關東州43人にして、生徒數は朝鮮 2,511人、臺灣 1,554人、關東州 220人にして卒業者は朝鮮 869人臺灣 311人を出して居る。

【高等師範學校】 昭和元年度末に於ける高等師範(男子)は2校教員は 193人、生徒は 1,764人、卒業者は 429人にして、女子高等師範は 2校で教員は 105人、生徒は 847人、卒業者は 249人である。

臨時教員養成所は14、教員371人、生徒 1,175人、卒業者534人である。

同年度に於ける教員檢定合格狀況は小學校本科正教員 3,294人尋常小學校本科正教員 8,951人、實學校専科正教員 6,270人、小學校准教員 2,290人、尋常小學校准教員 4,350人、にして以上小學校教員檢定合格者總數 25,155人にして前年に比して 947人を増して居る。

其他教員檢定合格者は師範、中學、高女教員總數 6,841人、高等學校高等科 477人を示して居る。

【中學校】 昭和元年度末に於ける校數は 518、教員は 12,448人本科生徒は316,443人、本科卒業者は 45,126人で前年に比し校數

16、教員 700人本科生徒 19,946人、本科卒業者 7,558人増加した、平均1校の本料生徒は 611人、教員1に付本科生徒は 25人である。

【高等女學校】 昭和元年度末に於ける校數663教員は 11,604人本科生徒は 287,515人、本科卒業者は 59,169人で前年に比し校數は 45を増し教員は 1862人を増加し、本科生徒 49,144人本科卒業者 6,324人を増加した、平均 1校に付本科及實科生は 438人、教員 1に付同生徒は 25人である。

實科高等女學校は 199、教員は 1,264人、本科生徒は25,883人本科卒業者は 7,331人で前年に比し校數 12を増し、教員 7人を減じ、本科生徒は 1,131人、本科卒業者 906人を増加した、平均1校に付本科生徒は 130人、教員 1に付本科生徒は21人である。

【專門學校】 (實業專門學校を除く) 昭和元年度末に於ける校數は 89、教員 3,739人、生徒は53,697人、本科卒業者は 10,820人で前年に比し校數 4、教員 324人、生徒 5,402人、本科卒業者 5,248人を増加した。

生徒は男 8割 2分女 1割 8分で前年に比し男 3分を減少した。各學科中醫學、藥學、齒科醫學、文學、數理化學、宗教、音樂、體育は男女生在り、法學、經濟學、商科、美術、植民、測候技術、農業は男學生のみ在る。

昭和元年度末植民地に於ける專門學校は朝鮮に 5、臺灣に5、及關東州に 2である、朝鮮は京城法學專門學校、京城醫學專門學校、京城高等工業、水原高等農林、京城高等商業學校にして教員總數 245人、生徒總數 1,071人を有して居る。臺灣は臺北高等商業、同高等農林、同醫學專門學校、臺南高等商業學校及び臺北、臺南、臺中師範學校にして教員數 217 生徒總數 2,026を有して居る。關東州は旅順工科大学及び旅順師範學堂の 2にして教員120、生徒 546を有して居る。

【高等學校】 昭和元年度末に於ける校數は31、教員は 1,267人、生徒は 18,086人、卒業者は 4,977人で前年に比し校數2、教員104人生徒 1,244人、卒業者 490人を増加した。

【大學】 昭和元年度末に於ける帝國大學は 5 學部 33にして前年に比して 3學部を増し教員は 1,762人で、前年に比し 115人を増加した、東京は教員 636人、京都は教員 403人、東北は教員 240人、九州は教員226人、北海道は教員257人である。

學生及生徒は東京 7,396人、京都 4,383人、東北 1,265人、九州 1,504人、北海道 2,091人、合計 16,639人で前年に比し1,465人を増加し、學生の卒業者は東京 1,787人、京都1,042人、東北336人、九州 231人、北海道 148人、合計 3,755人で前年に比し769人を増加した。

昭和元年度末に於て大學令に依る大學は官立 6、公立 4、私立 22、合計32、教員は官立 391人、公立 252人、私立 2,162人、學生

生徒は官立 3,562人、公立 2,326人、私立 29,659人、學生の卒業者は總體で 3,755人を出して居る。

學科は官立は商學、醫學、公立は醫學、私立は法律、政治、經濟、商學を置くものが多いが中には文學、醫學又は理學工學科あるものがある。

【實業補習學校】 昭和元年度末に於ける校數は工業補習 136、農業補習 12,945、水産補習 196、商業補習 550、二科其他にして生徒數は工業補習 12,497、農業補習 928,443人、水産補習12,328人商業補習 48,921人、其他之を前年に比べると何れも増加を示して居る。

【實業學校及職業學校】 昭和元年度末に於ける實業學校校數甲種工業 85、乙種工業 34、甲種農業 187、乙種農業 151、甲種商業 209、乙種商業 42、甲種水産11、乙種水産 1、甲種商船 12で前年に比し、甲種工業 3、乙種工業 6、甲種農業17、甲種商業 13、乙種商業 4を減少した。

教員は甲種工業 1,704人、乙種工業 315人、甲種農業 2,097人乙種農業 940人、甲種商業 4,480人、乙種商業 386人、甲種水産 109人、乙種水産 7人、甲種商船 143人で前年に比し乙種工業、乙種農業、乙種水産、甲種商船に於て減少せるのみにて他は凡て増加して居る。

本科生徒數は甲種工業 23,749人、乙種工業 4,220人、甲種農業 36,098人、乙種農業 20,132人、甲種商業 102,230人、乙種商業 9,281人、甲種水産 1,300人、乙種水産 132人、甲種商船 1,297人にして前年に比して乙種農業、乙種水産及び甲種商船は減少し他は増加した。

乙種職業學校校數は 31、教員は 191人、本科生徒は4,056人、本科卒業者は 1,367人で前年に比し校數 15、教員 115人、本科生徒 669人を減少した。

昭和元年度末に於ける植民地實業學校は朝鮮に甲種農業學校16教員 33、生徒707人、甲種商業 2、教員44人、生徒793人、甲種水産學校 9、教員31、生徒214人があり臺灣に於ては甲種工業學校1、教員 61、生徒(本科) 546人、甲種農業 2、教員 25人、生徒434人がある。

【實業專門學校】 昭和元年度末に於ける校數は工業 21、農業 11、商業 16、商船 2で前年と變りなく、教員は工業 872人、農業 362人、商業 548人、商船 109人で前年に比し工業67人、農業14人商業 21人、商船 4人を増加した、本科生徒は工業 7,098人、農業 2,686人、商業 8,011人、商船 1,495人で前年に比し何れも増加し、本科卒業者は工業 1,948人、農業 743人、商業 2,153人、商船 271人で前年に比し工業 128人、農業 133人、商業260人、商船 14人を増加した。

植民地に於ける實業專門學校は工業に關するもの朝鮮に 1ありて教員 58人、生徒 164人を有し卒業者 46人を出して居る。關東

州にも 1、教員39人、生徒數 215人を有し、農業に關するものとしては朝鮮に 1、教員55人、生徒 168人ありて卒業者55人を出し臺灣に於て 1、教員 39人、生徒 121 人あり卒業者46人を出して居る。商業に關するものは朝鮮に 1、教員44人、生徒 224人あり卒業者 65人を出し臺灣に 2 校、教員34人、生徒 361人あり卒業者 77人を出して商船に關するものに植民地に於ては未だない。

【各學校入學志願者及入學者】 昭和元年度に於ける諸學校入學志願者は中學校前年より稍減少したる他何れも増加した。入學志願者 100人の中入學者の割合は中學校 52.9、高女 54.2專門學校 6.6乃至88.78、高等學校 9.92帝國大學 68.65、官立大學 62.83公立大學 100.0、私立大學 90.9官立實業專門學校 21乃至26 等で概して前年に比して入學が高くなつて居る。

【文部省在外研究員】 昭和元年度に於ける文部省在外研究員は 405人で前年に比し 54人を増加した。留學國は獨逸の 115人最も多く之に亞ぐは英吉利の42人、北米合衆國の24人、佛蘭西の19人、等。研究學科文學83人、醫學71人、工學68人、農學 57人、理學 51人、經濟44人、法學 21人等である。

【生徒の健康狀態】 昭和元年度中東京盲學校及聾啞學校、高師附屬小學校を除く文部省直轄學校に於て検査を受けたる男生徒 46,353人、女生徒2414人に就き其健康狀態をみるに發育甲のもの男は4割5分、女は 4割 5分、乙のもの男 3割 7分、女 4割 6分、丙のもの男 1割 8分、女 9分にして男は甲が最も多く女は乙が最も多い。榮養狀態は男に於ては甲 5割 9分、乙 3割9分、丙 2 分、女に於ては甲 5割 6分、乙 4割 3分、丙 1分にして概して榮養狀態は良好である。視力の檢診の結果は男に於ては 5割は兩眼正視にして 4割 3分は兩眼近視他は一眼近視、一眼正視、或は遠視の者である。女に於ては 7割 3分は兩眼正視にして兩眼近視は2割2分にして視力の狀態は女の方がはるかに優れ就中近視は一方の 4割 3分に對して他は僅かに 2割2分に過ぎない狀態である。

總検査人員に就き疾病の 狀態をみるに最も多きは齲齒にして男 3割7分女 4割7分を占め之に亞いては眼疾の男 5分女 6分である。

【青年團及青年訓練所】 昭和二年度に於ける 青年團は團體數 27,857、正團員數 4,073千人にして平均一府縣 593、團體平均團員 146人に該つて居る。青年團を男女に分てば男 15,210團體女は 12,647 團體、1,478千人にして一團體所屬人員男は 171人、女は 117人に該り男の方遙かに多い。

青年訓練所は所數 15,753にして之に所屬の主事 15,685人指導員 89,815人、生徒 883,607人、其終了者 125,735 人で前年度に比し生徒數を除く他何れも増加して居る。

【小學校教員平均月俸】 昭和元年度に於ける小學校教員平均月俸は尋常小學校本科正教員男73圓、女50圓に該り高等小學校に於

ては本科正教員73圓、女53圓に該つて居る。而して女教員月俸に對する男教員のそれは平均1.42倍となつて居る。専科正教員、准教員と次第に低下し最小額は代用教員の尋常男39圓、同女28圓、准教員の高等男42圓、女38圓にして之を本科正教員の男女に比すれば尋常男は5割3分、女は5割6分、高等男は5割8分同女は7割1分にして概して男に於ける正教員との差異が女に於けるそれより甚しい。

【博士數】 昭和元年度末に於ける博士の總數は 3,548内十人は外國人にして實人員は 3,477人を示して居る。學部別にみれば醫學の 2,325最も多く總數の6割6分を占め之に亞いては工學の391人、理學の 214人にして最も少なきは商學の 3、經濟學の9である。

【公學資産】 昭和元年度に於ける府縣、市、町村公學資産は 114,001萬圓で前年に比し 9,068萬圓を増加した、府縣公學資産は 27,379萬圓、平均一府縣583萬圓、市公學資産は 32,942萬圓平均一市 326萬圓、町村公學資産は 53,680萬圓平均一町村 45087 圓である。

【公學費】 昭和元年度に於ける府縣、市、町村の教育費は 44,123萬圓で人口に付 7圓 29錢當り前年に比し 5,253 萬圓を増加し國民一人當り 78錢を増加した、府縣公學費は 10,915萬圓、平均一府縣 232萬圓で主として中學校、實業學校、師範學校、高等女學校に支出する。

市公學費は 10,020萬圓、平均一市 992,079圓、大部分は小學校に支出し、町村公學費は 23,188萬圓、平均一町村 19,476圓でその大部分は小學校に支出する。

【公學收入】 昭和元年度に於ける府縣、市町村の公學收入は 13,383萬圓で前年に比し 384萬圓を増加した、府縣公學收入 3,610萬圓で主として授業料、寄附金、雜收入に依り、市公學收入は 16,486千圓で授業料及保育料國庫補助金、寄附金雜收入等町村公學收入は 81,245千圓で國庫補助金、寄附金雜收入、授業料及保育料より成つて居る。

【出版圖書】 昭和三年中に於ける出版圖書數は 19,880 部で、前年に比して 87を減じ種類の主なるものは教育の 3,383部、文學の 3,082部、神書宗教書の 923部、音樂の 895部、地誌紀行及社會問題、美術の 700餘部、政治法律語學の各 500部、醫學產業、經濟技藝の各 400餘部、哲學、歴史、傳記、理學の各 300餘部等である。

【新聞雜誌】 昭和三年度末に於ける新聞雜誌數は有保證金のもの5,482、無保證金のもの 2,963、總數8,445で前年に比し 95を増加した。總數を地方別に見ると東京の 1,807特に多く遙に降て大阪は 1,118、北海道 434、愛知 419、京都、兵庫、福岡は 300臺、長野、廣島、200臺、福島、茨城、神奈川、新潟、静岡、三重、奈良、岡山、山口、愛媛は 100臺で、他は數十のものが多い。

【圖書館】 昭和元年度末に於ける圖書館は官公立 2,934、私

立 1,403で前年に比し前者は 387、後者は 46を増加した。圖書冊數は 7,623,371冊、前年に比し 431,849 冊を増加した、平均一館の圖書は官公立 1,695冊、私立 1,888冊、和漢と洋との別は官公立和漢 9割 5分、洋 5分、私立和漢 9割 6分、洋 4分で前年に比し官公立共略同様である。

【宗 教】 昭和三年末に於ける神社數は神宮 1、官幣社 117、國幣社80、府縣社、郷社、村社 49,318 無格社 62,674 で前年に比し官幣社 5國幣社 5を増し府縣社、郷社、村社にて 1を減少し、無格社 209を減じた。

【神宮神職】 昭和三年末に於ける神職は 14,912 人で前年に比し、108人を増加した、平均一社の神職は神宮91人、官幣社4人、國幣社 4人、府縣社 1人 4分、郷社 0.9人、村社は 5社に 1人、無格社は66社に 1人の割合である。

【寺院】 昭和元年度末に於ける寺院數は 71,341 寺で前年に比し 12寺を増加した。宗派別に見ると眞宗最も多く 2割8分を占め、之に亞ぐは曹洞宗の 2割、眞言宗の 1割 7分、淨土宗の 1割2分、臨濟宗 8分、日蓮宗の 7分、天台宗の 6分殘餘の 2分は黃蘗宗、時宗、融通念佛宗、法相宗、華嚴宗である。

XI. 警察衛生及災害 (表290—305頁参照)

【警 察】 昭和三年中に於て司法警察官の取扱つた犯罪檢事件數は1,520,539人で其の内譯は刑法4割 8分警察犯處罰令違犯 1割 3分、廳府縣令違犯 2割 3分、其他の法令違犯 1割 5分である。

【盜難及詐欺恐喝】 昭和二年に於ける強盜は 1,730件、竊盜は 356,088件で前年に比し前者は 275件を増加し、後者は 24,411件を増加した、拘摸に遭ひし人は 12,750人、詐欺恐喝に遭ひし人は 121,171人で前年に比し前者は 2,081人を増加し、後者は 581人を増加した。

人口 1,000に付盜難其の他の割合は 8.02で前年に比し 0.35を増加した。

昭和二年の盜難は十二月が最も多く之に亞ぐは十月、五月、十一月、三月、六月で其の少かつた月は七月、一月及二月である。

【被殺害者】 昭和二年中に於ける被殺害者は 2,052人で前年に比し 1,277人を減少した、其の原因は爭論又は一時の怒に因るもの最も多く、之に次ぐは痴情嫉妬、怨恨、利慾、貧困、盜賊、暴行又は醉狂である。

【衛 生】 昭和二年末に於ける醫師は 47,108人、齒科醫師は 13,731人、藥劑師は 16,180人、産婆は 45,663人で前年に比し醫師 1,208人、齒科醫師 1,183人、藥劑師 1,354人、産婆 887人を何れも増加した。人口萬に對する割合は醫師 7.7、齒科醫師 2.2、藥劑師 2.6、産婆 7.4に當つて居る。

【任職】 昭和元年度末に於ける任職は 54,495 人で前年に比し 155人を減少した、寺院と任職との割合は任職 1人に付 1.3寺である。

【佛道教會說教所】 昭和元年度末に於ける說教所は 6,056で前年に比し 49 を増加した、其の宗派の眞宗の 2,173最も多く、之に亞ぐは眞言宗の 1,404、日蓮宗の 1,040、曹洞宗の 512、淨土宗の 359、天臺宗の 293、臨濟宗の 220である。

【神道】 昭和元年度末に於ける說教所は 12,721 で前年に比し 1,072を増加した、其の宗派は天理教の 8,189 最も多く、遙に降て金光教の 845、御嶽教の 680、神道の 627、黒住教の 475、修成派の 380等が多いものに屬する。教師は 89,691人にして前年に比して 1,122人の減少を示して居る。

【基督教】 昭和元年度末に於ける會堂及講義所は 1,595で前年に比し 73を増加した、其の種別は日本基督教會の 282 最も多く之に亞ぐは日本メソヂスト教會の 223日本聖公會の 221、天主教の 202、組合基督教會の 137、ハリストス正教の 105等で其の他100以下のもの數種ある。

宣教師數は 2,348人にして前年に比して 37人増加して居る。

昭和二年末に於ける賣藥方數は 188,263で前年に比し 26,292を増加し賣藥請賣人は 281,170人で前年に比し 3,962人を減少し、賣藥行商人は 203,835人で前年に比し 3,962人を増加した。

【種痘】 昭和二年に於ける第一期種痘(出生から翌年六月迄に行ふもの)人員は公種痘 1,828 千人で前年に比し 11千人を増加し、善感割合は 9割 3分、不善感と檢診未了は 7分で善感割合は前年と變りない。私種痘は 49,500人で前年に比し 5,568 人を減少し善感割合は 9割 7分、不善感 3分である。

第二期種痘(數へ歳十歳に行ふもの)人員は公種痘 1,548千人で前年に比し 54,920人を減少し、善感は 5割 6分、不善感と檢診未了は 4 割 4 分で前年より善感割合少しく減じた。私種痘は 7,257人で前年に比し 1,194人を減少し、善感割合は、4割 9分不善感は 5割 1分である。

【水道】 昭和二年末に於ける上水道は 214で前年に比し 44を増加した、地方別に見ると長野の20最も多く、山形の15静岡の12、神奈川の 11、北海道、東京の各 10、兵庫、福岡、山口の各 9長崎の 8、宮城、島根の各7山梨、岡山の各6之に亞ぎ岩手、埼玉、沖繩には未だ敷設されない。給水栓は東京の 380,718、最も多く、大阪の 297,456、京都の 123,801、神奈川の 92,726、兵庫の 87,110廣島の 56,403愛知の 55,548之に亞いて居る。

【傳染病】 昭和二年に於ける法定傳染病患者は虎列刺 2人、腸チフス 37,554人、赤痢(疫痢を含む) 21,397人、ダフテリア 15,211

人、パラチフス 4,748人、痘瘡 352人、猩紅熱 4,148人、流行性腦脊髄膜炎 332人、發疹チフス 7人、ペスト無しで前年に比し赤痢、チフテリア、パラチフス、猩紅熱、は増加したが其他は一様に減少してゐる。各病患者に對する死亡率 5割以上を示したるものは虎列刺、流行性腦脊髄膜炎である。

【墓地、火葬場及埋火葬】 昭和二年末に於ける墳墓地は981,716箇所其の面積 20,851町歩で一箇所平均 63.72 坪に當る、火葬場は 35,850で、同年中に於ける火葬死體は 580,000 で一箇所平均 16に當り前年に比し 1を増した。同年中の埋葬死體は 693,307で埋火葬死體中火葬は 4割 6分、埋葬は 5割 4分に當り前年に比し割合大略同様である。

火葬の割合を地方別に見ると富山は 9割 9分9厘、石川は9割8分9厘、大阪は 9割 1分、8割臺は東京、新潟、廣島で其の最も少いのは沖縄の 6厘、鹿児島 2分 4厘、宮崎 4分 2厘、高知の 7分、埼玉の 7分 2厘等である。

【精神病】 昭和二年末に於ける精神病者は 62,367人で前年に比し 1,958人を増加し、人口萬に付10.17に當り前年に比し0.19増加し、尙既往に比較すると逐年増加の趨勢である、人口萬に對する割合を地方別に見ると最も多いのは廣島の 21.0 之に亞ぐは香川の 18.6、福井の 15.9、熊本の15.2、京都の14.7三重の 13.9山形の 13.7で尙 10以上の地方は茨城、栃木、埼玉、東京、石川、静岡、愛知、滋賀、和歌山、鳥根、徳島、長崎、鹿児島で其の少いのは大分の 4.1、北海道の5.0千葉の 5.5高知の 5.6等である。

精神病者男女の割合は男 6割 5分、女 3割 5分で年々此の割合に大差を見ない。

精神病者の内精神病院法に依るもの（市區町村長の監置すべき者、犯罪者にして特に危険の虞あるもの、療養の途なき者、地方長官の必要と認めたる者）は 2,963人（5分）精神病者監護法に依る入院者及假監置者8,548（1割4分）監置を要せざる者50,856人（8割 2分）である。

災 害

昭和二年中に於ける水害を被つた市區町村は 3,368で全國民區町村の 2割 8分、汎濫面積数は 124,356町、田畑の流失及埋没は 9,414町歩、宅地其の他の土地埋没崩潰 1,356町歩、建物 3,917棟、船舶 347隻、人の死亡 142人、負傷 131人で損耗額は 10,571千圓、復舊費 20,980千圓である。

XII. 司

民事事件

昭和二年に於ける區裁判所新受の民事事件数は 953,181件、同終局件数は 943,983件で前年に比し終局件数 38,878件を増加した、事件は督促 361,761件、非訟事件 253,914件、第一審訴訟 268,825件、強制執行 33,014件、借

損耗の多い地方は長崎の2,158千圓、高知の 1,711千圓、鹿児島 978千圓、茨城 947千圓、秋田の 899千圓、新潟の 814千圓等で尙10萬圓以上の地方としては北海道、青森、山形、栃木、群馬、長野、福岡、佐賀、熊本及宮崎が在る。

【潮災】 昭和二年中に於て潮災を被つた市區町村は 121、田畑908町歩、宅地其他 375町歩、建物 1,745棟、船舶 369 隻で死亡者70負傷 25にして災害による損耗額は 4,438千圓、復舊費2,676千圓である。

【暴風雨被害】 昭和二年中に於ける暴風雨被害は市區町村1,047田畑損害 1,790町歩宅地其他 149町歩、建物 4,402棟、船舶 457隻、人の死亡 497人、負傷 149人で損耗額は 3,085千圓、復舊費は 3,312千圓である。

【火災】 昭和二年中に於ける火災度数は 18,596、内放火度数は 1,391にして之によりて全焼したる戸数は 21,775戸で平均一度當全焼戸数は 1.17戸である、其の損害見積額は 8,907萬圓の多きに上つた。

火災度数は北海道 1,599度最も多く東京の 1,290度之に次ぎ愛知の 803度、大阪の 775度、兵庫の 700度、新潟の 710度、廣島の 60度、岡山の 532度、神奈川の 590度、福岡の 508度、長野及群馬、埼玉の各 460度、秋田の 428度、千葉の 413度、京都の 401度、其の他は 2、300度臺のものが多い。損害見積額は京都の 1,927萬圓を最高とし、これに亞ぐは石川 553萬圓、北海道の 533萬圓、長野 515萬圓、福岡453萬圓、東京446萬圓等にして他は 200萬圓臺に5,100萬圓臺に 7,100萬圓以下のもの27縣にして其の多くは數十萬圓前後である。殖民地に於ける火災度数をみるに同年に於て朝鮮 3,657、臺灣 1,051、樺太 107、關東州 156にして火災度数一に付損害見積高の最も大なるは關東州の 4,000圓にして樺太の 3,700圓之に亞き朝鮮は 1,000圓、臺灣は 800圓である。内地に於ては 4,800圓を示して居る。

火災の季節は 1月乃至五月及十二月に多くて初夏の候之に亞き七、八、九、十月は最も少いことは例年殆ど同じである。

消防員及び機械器具の狀況を見るに昭和二年末に於ける特設消防署 141、消防組 10,738にして之等の機關の人員は 1,849千人に上り消防機械器具はガソリンポンプ 4,032、蒸氣ポンプ310ポンプ船 5水管車 9,075、腕用ポンプ 40,410となつて居る。

法 (表306—335頁参照)

地借家調停事件 10,590件、和解 10,277件、破産事件3,249件、和議事件 115件、戸籍に關する抗告 15件である。

督促事件は殆ど全部一定金額の督促、非訟事件は「隠居、廢家、子の懲戒、家督相続人及親族會に關するもの」及「戸籍に關する

もの」で大部分を占め、第一審訴訟事件は通常訴訟が大部分、假差押及假處分が之に亞で多い。

地方裁判所に於ける民事新受件数は 61,404件、同終局件数は 59,292件で前年に比し終局件数 426件を減少した、事件は第一審訴訟 42,695件、控訴 7,310件非訟事件 3,070件、抗告 2,873件破産宣告 24件、小作調停事件 3,320件である、第一審訴訟事件で最も多いのは金銭に關するもので之に亞ぐは人事、土地、建物及船舶等である。

控訴院に於ける民事新受件数は 4,482件、同終局件数は 4,209件で前年に比し終局件数 310件を減少した。

大審院に於ける民事新受件数は 2,781件、上告の結果は上告の理由なくして棄却せられたるもの 5割、原判決を破毀せられたるもの 1割 2分、取下 1割である。

【植民地に於ける民事事件】 昭和二年朝鮮に於ける民事争訟調停事件新受の数は 2,488にして終局 2,501を示し、臺灣に於ては新受12,880終局12,835、關東州は新受11、終局12を示し之等を前年末に比するに臺灣は纒り増加して朝鮮及關東州は減少して居る。

終局事件中最も大なる割合を占むるは朝鮮及臺灣に於ては執達吏事務取扱に關するものにして之に亞いでは督促事件である。關東州は督促が最も多い。

刑事事件

昭和二年中に於ける捜査数は 379,896件、豫審 4,665件で前年に比し前者は 3,842件増加し後者は 46件増加した、第一審は 96,629件で前年に比し 306件減少し控訴審は 6,848件で、前年に比し 442件減少した。其の他上告審は 278件減少し、抗告 18件、再審10件、各前年より減少し本年は非常上告 2を算してゐる。

昭和二年に於ける刑事事件の捜査終局事件数は 375,690件で、前年に比し 4,118件を増加した。捜査の結果起訴したるものは 2割 5分、不起訴のものは 5割 5分、他へ送致は 1割等である。

昭和二年に於ける豫審終結人員は 6,758人で前年に比し 12を増加した、豫審終結者の公判に付せられたるものは 9割 6分、免訴は 3分である。

昭和二年に於ける第一審裁判事件終局は 93,886件で前年に比し 41件を増加した、第一審裁判事件中刑法犯は 5割 8分、特別法犯は 4割 2分である。被告人は 164,320人で前年に比し 3,374人を増加し終局被告人 154,991人中有罪は 9割 9分、無罪免訴管轄違等は 1分である、人口 10,000に對する刑事被告人の割合を見ると 25.80で前年に比し 0.09を増加し、右の内刑法犯は 18.30特別法犯は 7.50にして後者に於て減少を示して居る。

昭和二年に於ける控訴事件終局は 5,924で前年に比し 505件を減少した、終局は刑の言渡 7割 9分、控訴取下 1割 6分、無罪 4分である。

昭和二年に於ける上告事件終局は 1,885件で前年に比し 286件を減少した、終局は上告棄却 6割 1分、決定 2割 1分、上告取下 1割 1分である。

第一審刑法犯有罪被告人に於て其の罪名を見ると男は賭博及富籤に關する罪 5割 8分、竊盜罪 1割 4分、傷害罪 9分、詐欺恐喝罪 5分、横領罪 2分、女は賭博及富籤に關する罪 6割 7分、失火罪 1割 5分、竊盜罪 4分、墮胎罪 3分、殺人罪 2分 3厘等である。

犯罪原因を見ると男は利慾最も多く習癖、出來心、憤怒、貧困、射倖等之に亞き、女は出來心最も多く利慾、習癖、貧困、憤怒等之に亞で多い。

犯罪者の年齢は男に在つては 30歳以上 40歳未満の者が最も多く 40歳以上 50歳未満、25歳以上 30歳未満之に亞ぐ、女は 40歳以上 50歳未満が最も多く 30歳以上 40歳未満が之に亞で多い。

第一審刑法犯有罪被告人の科刑は罰金刑最も多く總數の 6割 7分を占め有期懲役は 2割 8分、科料は 4分 5厘で他は無期懲役 57人、有期禁錮 37人、死刑 32である。

同被告人の受刑度数を見ると一度の者は男 7割 8分、女 8割 3分、二度の者は男 1割 4分、女 9分 5厘、三度以上六度の者は男 1割 5分女 7分、七度以上十一度の者は男 2分、女 7厘、十二度以上の者は男 5厘、女 5毛である。

第一審特別法犯有罪被告人の罪名を見ると商事産業の 2割 4分が最も多く、議員選舉其他2割、衛生1割 5分、警察著作出版新聞紙 1割 4分、通信運輸電氣 1割 2分、軍事 9分、租稅專賣 6分である。科刑は罰金最も多く其の 6割 9分を占め科料は 2割 8分、拘留 6厘である。

朝鮮に於ては罰金刑は 8割 4分を占め科料 1割 3分、臺灣に於ては罰金 2割 8分、科料 6割 9分を示し、内地に比して朝鮮に於ては罰金の率著しく大にして臺灣に於ては科料の率が夫である。

昭和元年中外國人に關する第一審事件を見るに被告人員 167人にして前年に比して 23人を増し國籍別に於ては支那人最大で162人で 9割 7分に當つて居る終局の結果は有期懲役の 132最も多く、他は罰金の 25、科料 4無罪免訴の 5である。

【登記】 昭和二年に於ける登記件数は 5,209,146件、登録税及手数料總額は 54,447 千圓で前年に比し 76,838件を増し、2,558圓を減少した。

登記件数は土地 8割 7分建物 1割 1分にして他は僅かに 2分に過ぎず其の主なるものは商事會社、産業組合の登記である。商事會社の登記に於ては株式會社最も多く 7割 1分を示して居る。朝鮮に於ては課税不課税共土地大部分を占め建物、商事會社、非營利法人、商號及び船舶之に亞き臺灣に於ては殆んど土地建物のみにして他は僅かに過ぎない。

【在監人員】 昭和二年末に於ける在監人員は 40,981人で前年に比し 1,762人を減少した。尙既往十年間を比較すると大正五年末には 52,776人であつたが大正六、七、八年に於て、少しく増加し、爾後再び減少の趨勢を呈したが大正十四年に再び増加をみたのであるが、本年末に於ては上述の如く減少した。

在監者は男 9割 8分女 2分で前年と殆ど同割合である。在監者の大部分は受刑者で總員の 9割 3分を占め他の 7分は勞役場留置者293人、刑事被告人 2,691人、乳兒 7人より成つて居る。

昭和二年中の入監人員は 64,274人、出監人員は 66,028人で前年に比し入監 4,043人、出監 6,034人を増加した、受刑者の出監は大部分満期で外に假出獄 1,411人、死亡 412人刑の執行停止 349人である。

昭和二年末及同年中の植民地及關東州に於ける在監入監出監をみるに朝鮮に於ては年末在監者 13,762人を示し本年中入監者數 31,326人、出監 31,545人を算して居る、臺灣に於ては年末在監者 3,390人年内中入監者 12,590人、出監者 12,456人にして關東州に於ては年末在監者 938人、年内中入監者 3,817人出監者 3,809人を示してある。

在監者を犯罪の種類に見ると男は刑法 9割 9分を占め他の 1分は陸海軍刑法犯 24人、森林法犯 19人、徴兵令犯 5人、警察犯處罰令違犯 195人、その他 139人にして女も亦刑法犯大部分を占め警察犯處罰令違犯 12人其他 2人である。

刑法犯のみに付其の罪名を見ると男は竊盜 5割 7分、詐欺及恐喝 1割、殺人 8分、強盜 7分、傷害 4分、放火 3分 8厘、横領 3分、賭博及富籤 1分 7厘等、女は竊盜 3割 6分、放火 2割 6分、殺人 1割 6分、詐欺及恐喝の 6分 2厘、傷害の 2分 1厘等で前年に比し男女共其の割合に著しき變化を示して居らない。

在監受刑者の刑名は男女共に有期徒刑 9割以上を占め、無期徒刑は男 488人、女 11人、有期禁錮は男 25人、女無し、拘留は男 210人、女 13人である。更に有期徒刑を刑名別に見ると三月未滿は男 1分、女 1分 5厘、六月未滿は男 4分 5厘、女 6分、一年未滿は男 1割 9分、女 1割 3分、三年未滿は男 3割 5分、女 3割 6分、五年未滿は男 1割 7分女 1割 8分、十年未滿は男 1割 7分、女 1割 8分、十五年未滿は男 5分、女 4分、十五年以上は男 2分

XIII. 財

【國家財政】 昭和四年度豫算に依る歳入總額は 1,681,061千圓で内、經常部 1,504,707千圓(8割 9分 5厘)臨時部 176,354千圓(1割 5厘)。歳出總額は亦同額にして内經常部 1,223,689千圓(7割 3分)臨時部 457,372千圓(2割 7分)である。之を前年度豫算に比べると歳入 39,972千圓を減じたが、内經常部に於ては 20,116千圓を増加し、臨時部に於て 48,406

7厘、女 2分 8厘である。

【新受刑者】 昭和二年に於ける新受刑者は男 30,194人、女 1,071人で前年に比し男 1,819 人を増し女 137 人を減少した、新受刑者の男は刑法犯 8割、警察犯處罰令違犯 1割 7分、その他 3分、女は刑法犯 4割 2分、警察犯處罰令違犯 4割 9分その他 9分で更に刑法犯を罪名別に見ると男は竊盜 5割 7分、詐欺及恐喝 1割 4分、賭博及富籤 8分、傷害 6分、横領 5分等、女は竊盜 3割 9分放火及失火 1割 5分、詐欺及恐喝 1割 1分、賭博及富籤 9分、殺人 2分等である。

新受刑者の刑法犯の犯人數を年齢別に見ると 18 歳未滿の男は初犯 9割 4分、再犯 6分、女凡て初犯で再犯はない。前年に比し男初犯の割合減少し女は變りない。18歳以上の男は初犯 5割 5分再犯 2割 1分 3犯以上 5犯 1割 9分、6犯以上 5分、女は初犯 7割 9分、再犯 9分、3犯以上5犯 8分、6犯以上 4 分で前年に比し男は初犯 6犯以上を減少し、女は再犯 6犯以上を減少した。

新受刑者の刑名は有期徒刑 8割、拘留 1割 9分 8厘で他は無期徒刑 46人、有期禁錮 88人、死刑 22人である。有期徒刑の刑期を見ると三月未滿は男 8分、女 1割 1分、六月未滿は男 1割 8分、女 2割 4分、一年未滿は男 3割 4分、女 2割 7分、三年未滿は男 3割、女 2割 8分、五年未滿は男 6分、女 8分、十年未滿は男 3分 4厘、女 2分 9厘、十五年未滿は男 3厘女 2厘、十五年以上は男 1厘女零である。

入監時の年齢は男20乃至 30歳、女 40乃至 50 歳最も多く男 30乃至 40歳、40歳乃至 50歳、女20歳乃至 30歳、30歳乃至40歳之に亞き以上の年齢者で新受刑者 8割 3分を占めて居る。飲酒は酒を嗜むもの男 6割 1分、女 1割 6分、資産状態は資産なきもの男 9割 6分、女 9割 7分、資産あるもの男 4分、女 3分である。職業は無職業 2割 2分、雜業者 2割 2分、工業 2割 7分、商業の 1割 3分農業の 9分等多いものに屬する。

昭和二年に於ける少年刑務所の狀況をみるに刑務所 9、職員 564 在監者總數 2,350人を算して居る、在監受刑者を刑名別にみると懲役無期 7有期 1,277、禁錮 1、拘留 8で之等の受刑者は主として窃盜強盜犯にして1,716に上つて居る。之に亞いては詐欺恐喝及横領の 167、放火の 119、殺人の 105が多く他は何れも 100以下である。

政 (表336—388頁参照)

千圓を減少し歳出亦同額を増加し中經常部に於て 23,702千圓を増加し臨時部に於て 51,768千圓を減少した。

明治十九年内閣制施行後に於ける國家財政の狀況を概観するに日清戦後の二十八年迄は毎年の歳出 80,000千圓、人口一に付 2圓内外であつたが翌二十九年度に於て一躍倍加して 169,000千圓となり翌々年度 200,000千圓臺に上り三十七年度迄は一進一退、同

年度277,000千圓(人口1に付5圓87錢)となり、日露戦後の三十八年度には頓に増加して 400,000千圓臺(人口一に付8圓88錢)四十年年度には 600,000千圓臺(人口一に付12圓27錢)となり翌四十一年度には尙 636,000千圓に上つたが四十二年度には 100,000 千圓を減少して 532,000千圓に下り大正三年度に於て一度 600,000 千圓を出たものあるを除き大正五年度迄は常に 500,000 千圓臺(人口一に付11圓内外)であつたが大正十六年度に至つては 735,000千圓更に七年度には 1,000,000 千圓臺(人口一に付17圓51錢)に躍進し爾來逐年増加して大正十年度には 1,489,836 千圓に上り十一年度には60,00千圓を減少して1,430,000千圓(人口一に付24圓80錢)となつたが十三年度に於て100,000千圓を増加し、人口一に付27圓48錢を示し、十四年度は 100,000千圓を減少したが昭和元年度は決算に比し 141,790千圓を増加して人口一人當27圓44錢となつた。

昭和四年度歳入經常部は租稅 6割、官業及官有財産收入3割2分印紙收入 6分、殘餘の 2分は教育改善及農村振興基金特別會計より繰入、預金特別會計より繰入及雜收入である。租稅は酒稅 23 4,627 千圓、所得稅 202,664千圓、關稅 150,298千圓、砂糖消費稅 82,797千圓、地租 67,809 千圓、營業收益稅 61,421 千圓、織物消費稅 39,879 千圓、相續稅 25,951 千圓、資本利子稅 15,821 千圓、取引所稅 11,343 千圓が主なるもので他は何れも 6,000 千圓以下である。官業及官有財産收入は郵便電信電話收入 237,297 千圓、專賣局益金 171,538 千圓、森林收入 46,304 千圓、配當金收入 11,659 千圓、刑務所收入 6,547 千圓、が主なるもので他は何れも 2,000千圓以下である。

歳入臨時部は前年度剩餘金繰入 55,484 千圓、公債金の 51,964 千圓、特別會計資金繰入 22,224 千圓、官有物拂下代 20,044 千圓が主なるものである。

昭和四年度歳出總額中皇室費の 4,500 千圓(全歳出の2厘7毛)を除き他を所管別に見ると大藏省 2割 1分 遞信省 2割、海軍省 1割 6分、陸軍省 1割 3分、内務省 1割 2分、文部省 8分、農林省 3分 2厘、司法省 2分、拓務省 2分、外務省 1分 3厘、商工商 7厘、前年度に比し拓務省の増加したる他著しき差違はない。

大正九年度及十年年度に於ては陸軍、海軍兩省で兩歳出の4割8分を占めて居たが昭和二年度以降に於ては 2割臺に減少した。

【特別會計】 昭和四年度に於ける特別會計は 38 で其の所管は外務省1、内務省1、大藏省 10、陸軍省 2、海軍省 3、文拓省3、農林省 2、商工省 3、遞信省 2、鐵道省 3、拓務省8 である。特別會計中には資金又は勘定の如く單に帳簿上の出納に止まるものがあるが、其額の多少に依て見ると鐵道の 1,077,871千圓(歳入)國債整理基金の 823,650 千圓、專賣局の 341,279 千圓(歳入)朝鮮總督府の 236,432 千圓公債金の 138,964 千圓等巨額のものに屬する。

【豫算純計】 前項に掲げた一般會計及各特別會計の歳入歳出金額の總額を計算した處で、實際の國家の歳入歳出の總額には當らない、或る會計で歳出に立て、ある金額も他の會計に入るものがあり又或る會計の歳入にして他の會計の歳出に依りて支拂はるゝものがあり従て同じ金が二重に歳入に又は歳出に計上せられて居るが爲眞の歳入歳出の總額と云ふものが分らない。故に其の眞の歳入歳出即ち豫算の純計が調製せられて居たが、右に依ると昭和四年度に於ける一般會計及特別會計の歳入豫算額は 5,384,688 千圓内純計額 3,823,252 千圓、控除額は 1,561,436千圓である、更に一般會計及特別會計の歳出豫算總額は 4,933,587 千圓内純計額 3,691,637 千圓、控除額は1,241,951 千圓である。豫算總額と純計額との割を見れば歳入 7割 1分歳出 7割 5分である。主要なる控除科目は歳入歳出各三十餘種數十科目に分れる、尙純計額調製方法の概略は統計表に掲げてある。

【所得稅】 昭和二年度に於ける所得 稅納稅人員は 第一種法人 31,132、第三種 1,002,616人で前年度に比し前者は 6,344を増し後者は101,575人を減少した。

所得金額は第一種法人 1,083,524 千圓、第二種公債社債銀行定期預金利子等 601,184 千圓、第三種 2,405,679千圓、合計 4,090,387 千圓で前年度に比し 202,041 千圓を減少した。

第三種所得は商業の 615,961 千圓最も多く、之に亞ぐは俸給々料歳費の 397,436 千圓、貸宅地貸家の 333,387千圓、配當の314,585 千圓、田小作の 212,973 千圓、賞與の 140,451千圓、庶業の115,204 千圓、工業の 88,953千圓尙 50,000千圓以上のものは田自作、貸金預金其他利子、諸給與である、所得稅納稅額は第一種 63,764千圓第二種 29,817千圓、第三種 116.637 千圓、合計 210,218 千圓で前年度に比し 9,623千圓を減少した、地方別に見ると東京の70,369 千圓最も多く大阪の 31,495 千圓、兵庫の 15,757 千圓之に亞き、5,000千圓以上 10,000 千圓は神奈川、愛知、京都、福岡、3,000千圓以上 5,000千圓は北海道、新潟、廣島にして百萬圓未滿のものに岩手、山梨、奈良、鳥取、徳島、高知、佐賀、宮崎、沖縄があり、内沖縄は 128千圓に過ぎない。

【地租】 昭和三年首に於ける地租納稅人員は 10,376 千人で前年に比し233千人を増加し人口100に付納稅者の割合は 16.92前年に比し 0.16を増加した。而して同年首に於ける地租 75,387千圓中主なるものは田の 45,640 千圓宅地の 17,650 千圓、畑の 10,240千圓で他は何れも 1,500千圓以下である、地租納稅額を地方別に見ると兵庫の 3,396千圓最も多く之に亞ぐは東京の 3,276 千圓、大阪の 3,234千圓、愛知の 3,222 千圓、新潟の 3,170 千圓 20,000 千圓以上は茨城、埼玉、千葉、三重、岡山、廣島、福岡、其の少き地方は青森、岩手、山梨、奈良、和歌山、鳥取、徳島、高知、長崎、宮崎、沖縄の 1,000千圓未滿である。

納税人員一に付納税額は全國平均にて 7圓 27 錢に當り前年に比し 16 錢を減少した、之を地方別に見ると東京の 21 圓、大阪の19圓特に多く他は概ね 5圓乃至 9圓で其の少いものは山口、長崎、大分、宮崎の 4圓臺、鹿児島、沖縄の 3圓臺等である。

【營業收益税】 昭和三年度に於ける營業人員法人 31,898 其純益額 1,021,529千圓内納税人員 31,601、純益金額 1,003,492千圓にして税額は 36,739千圓である。而して個人營業人員は 748,568人其純益額 937,118千圓にして納税人員は748,536人純益額 937,078千圓税額は 26,239 千圓である。

法人純益額は東京、大阪特に多く兩者の計 638,806 千圓に上り 6割 3分を占めて居る。個人に於ても東京、大阪の純益総額 23 0,340 千圓に上り 2割 5分を占めて居る。

【國有財産】 昭和三年四月一日現在の國有財産法の支配する國有財産總額は 7,503,412千圓、内一般會計所屬 4,798,480千圓、特別會計所屬 2,704,931 千圓である。各種財産毎の内譯は公用財産 5,317,371千圓、營林財産 1,795,826千圓、雜種財産 390,215千圓で前年に比し總額 246,162 千圓を増加した。財産種類の割合は土地 2割 3分、立木材 2割、建物 1割、工作物及器具機械 3割 1分船舶 1割 2分等である。

更に所管別に見ると鐵道省の 2,015,653千圓最も多く之に亞ぐは海軍省の 1,195,230 千圓、陸軍省の 844,312 千圓、内務省の 781,836千圓、大藏省の 620,964 千圓等で其の最も少いのは外務省の 21,847 千圓である。

【國債】 昭和三年度末に於ける國債總額は 7,569,577 千圓で前年に比し 2,171,707千圓を増加した、右の中内國債は 5,322,762千圓で前年に比し 1,378,289千圓を増加し外國債は 1,453,393千圓で前年と變りない。尙外に借入金 707,488 千圓、米穀證券 85,934千圓ありて前年に比し借入金 176,338 千圓、米穀證券は 29,074 千圓を増加した。人口一に付國債は内國債85圓68錢、外國債 23 圓40錢、合計 109圓08錢に當り前年に比し27圓60錢を増加した。

昭和三年に於ける列國の國債額は英吉利 7,714,084千磅、佛蘭西 292,900百萬法、伊太利 87,787百萬利、獨逸7,890,569千ライヒス麻、北米合衆國 17,727,796千弗で、人口一に付割合は英吉利 170磅佛蘭西 7,189法、伊太利 2,165利、獨逸 123ライヒス麻、北米合

衆國 141弗である。

【道府縣】 昭和三年度豫算に依る道府縣の歳入總額は 456,272千圓で平均一府縣 9,708 千圓に當り前年度に比し總額に於て 48,468千圓平均に於て 1,028千圓を増加した、歳入の主なるものは租税で全額の 5割 4分を占め、内直接國稅附加税 5割 3分を占め尙國庫補助金補助金及下渡金、道府縣債等が主な財源である。

同年度道府縣の歳出は土木費に 2割 7分、教育費に 2割 4分、警察費に 1割 7分、勸業費に 1割 2分等の割合となつて居る。

歳出總額を地方別に見ると東京の 50,410千圓最も多く之に亞ぐは大阪の 23,831千圓、兵庫の 21,207千圓、愛知の 18,226千圓で尙北海道、埼玉、神奈川、新潟、長野、静岡、京都、岡山、廣島福岡、熊本は 10,000千圓を超え他は 5,000千圓以上 10,000千圓の地方多く、5,000 千圓以下は滋賀、香川、佐賀、宮崎、沖縄である。

【市】 昭和三年度豫算に依る全國市の歳入總額は 751,576千圓で、前年度に比し 51,754 千圓を増加した、歳入の主なるものは公債金の 2割 8分、使用料及手数料の 2割 3分、租税の 1割 6分補助金の 1割等である。

昭和三年度豫算に依る市の歳出總額は 745,808 千圓で内電気瓦斯事業に 2割 1分、公債費に 2割 1分、土木費 1割 4分、衛生費に 1割 3分、教育費に 1割 3分といふ割合になつて居る。

【町村】 昭和三年度豫算に依る町村歳入總額は 505,950千圓で前年度に比し 24,368 千圓を増加した。歳入の主たるものは租税で 5割 4分を占め内直接國稅附加税 1割 8分を占め、税外収入の主たるものは國庫下渡金、前年度繰越金、公債金、使用料及手数料財産より生ずる収入等である。

町村歳出は教育費に 4割 6分、役場費に 1割 7分、土木費に 8分等が其の主たる項目を成して居る。

【地方債】 昭和元年度末に於ける地方債の總額は 1,844,434 千圓で前年度に比し 331,187千圓を増加した、團體別に見ると市債 1,258,942 千圓、道府縣債 379,439千圓、町村債 167,541千圓、水利組合及土功組合債 38,513 千圓で、其の目的は電気及瓦斯事業 3割、普通土木費 1割 8分、衛生費 1割 2分、教育費 9分、災害土木費 8分、社會事業費 7分、勸業費 2分の割合である。

XIV. 選舉、官公吏、軍事及恩賞 (表389—419頁参照)

選 舉

毎七年一回選舉に依る貴族院議員多額納税者議員最近大正十四年九月第六回選舉に於て互選人定数は6,600人(中、選舉當日の互選資格者は6,252人で、前年に比し約 9倍に増加した。是れ議員選舉規則の改正された爲である。

投票中有效 5,779票、無効26票である。互選權を有する者の直

接國稅總納額は 23,866千圓前年に比し約4倍に増加した。其の一人當納税額最高248,308圓で最低236圓前年に比し最高 16,603圓、最低に於て19圓の減少である。

大正十四年九月一日に於ける互選權者納税額の最も多いものは東京の1,920千圓で之に亞ぐは大阪の1,900千圓、兵庫の1,650千圓、

新潟の1,100千圓、京都の1,707千圓、其の他は1,000千圓以下で最低は沖縄の80,千圓である。

【衆議院議員】 昭和三年二月議員數は466人、議員一人に對する人口は136,600人で1府縣の議員數は東京府の31名を最多とし鳥取縣の 4名を最少とする。昭和三年二月の總選舉に於て選舉權を有する者の數は12,409,078人で人口 1,000 に對する有權者の割合は 199.75 人に當る、各府縣中右の割合最も多いのは鳥根の 237人で其の最も少いのは北海道の 175人である。議員 1人に對する有權者は 26,629人に當り、福島の35,329人最も多く佐賀の 22,090 人最も少い。

有權者中投票したる者と投票せざりし者との割合は前者8 割、後者 2割、投票中有效は9割9分、無効は 1分となつて居る。

衆議院議員の年齢を觀るに45歳以上49歳の 108人最も多く、60歳以上の98人、50歳以上54歳の92人、55歳以上59歳の76人、40歳以上44歳の64人、35歳以上39歳の24人、30歳以上34歳の 4人の順位である。職業は會社員92人、農林業76人、辯護士69人、無職業の65人著述通信及新聞雜誌記者43人、官吏41人等多く尙右以外の職業者多少の順位は醫師藥劑師、商業、教員、工業、鑛山業、銀行員、軍人である。

【府縣會議員】 主として昭和二年の選舉に係る議員數は1,787人中、市部 338 人、郡部 1,449人である、選舉有權者の總數は 10,989,955人で東京の724,760 人最も多く沖縄の 66,746人最も少い。議員 1人に付有權者は 6,150人で前年に比し 3倍近く増加した。

投票したる者と投票せざりし者との割合は前者7割4分、後者2割6分、投票中有效の割合は9割9分である。

【市町村會議員】 本項は前各項の如く選舉の結果に非ずして昭和二年末に於ける現在の調査である。

市會は101、議員 3,548人、選舉有權者1,426,204人で、議員 1人に付有權者402人である。町會は 1,573議員26,557人、選舉有權者 2,091,138人で議員 1人に付有權者79人である。村會は 9,848、議員 125,395人、選舉有權者5,984,284人で議員1人に付有權者48人である。町村組合會は49、議員714人、選舉有權者62,962人で議員1人に付有權者88人である。町村總會は1、選舉有權者11人である。

尙北海道一級二級町村制並東京府に於ける島嶼町村制に依るものがある、即ち町會は43、議員 812人、選舉有權者17,613人、村會は 241、議員 2,796人選舉有權者72,488人、町村組合會は1、議員6人、選舉有權者18人である。

官 公 吏

昭和三年末に於ける文官は勅任 1,263人俸給 7,474 千圓、奏任13,670人、俸給38,441 千圓、判任 215,953人、俸給 171,286 千圓、合計230,887 人、俸給總額 217,201千圓、雇員244,211人、給料124,780 千圓で平均俸給額は勅

任 5,918圓、奏任2,812圓判任 793圓、雇員 511圓である。

勅奏判任を通じて官吏を所屬別に見ると最も多いのは朝鮮總督の 30,847人之に亞ぐは逓信省の 25,157人、鐵道省23,930人、臺灣總督府の 18,271人、司法省の15,121人大藏省の 11,390人で、他は 10,000人以下である。即ち文部省は6,712人 農林省は3,583人關東廳は 3,886人、陸軍省 2,328人、内務省 1,712人、外務省 1,012人、商工省 1,753人、海軍省 1,403人、樺太廳1,251人、で其の他は 1,000人以下である、地方廳は北海道廳 4,204人、警視廳20,386人で、府縣56,887人、1府縣平均1,237人に當る。

【現役陸海軍々人】 陸軍 昭和三年末に於ける陸軍現役准士官以上の人員總數は17,234 人にして内將官及相當官213人、佐官及相當官 3,630人、尉官及相當官 9,930人、准士官 3,461人である。

海軍 昭和二年末に於ける海軍現役准士官 以上の人員總數は 7,850人にして内將官117人、佐官 1,930人、尉官2,782人、特務士官 1,318人、候補生177人、准士官 1,526人である。

尙海軍に於ては下士官 16,644人、兵56,102人、生徒549人が示されて居る。

陸海軍共年俸は詳細に知り得ざる爲め其記述を避ける。

【鐵道職員及通信職員】 昭和二年末國有鐵道職員は勅奏任及同待遇960人、判任及同待遇2,991人、雇員男69,954人、女4,409人傭男 105,395人、女4,757人、合計206,431人で前年に比し 1,331 人を増加した。

通信職員は一等局47,369、二等局30,259、三等局77,442、にして其雇員以下の數を見るに雇員に於ては通信事務49,522人電話交換手22,194人其他109人にして傭人に於ては遞送人 5,141人、集配人 45,104人其他4,166人である。

【警察官署】 昭和三年末に於ける警察官署は、警察署 1,227、警察官派出所 6,076、巡查駐在所及立番所14,165である、警察署及派出所は一府縣平均155、駐在所は一町村平均1.2に當る。

【警察職員】 昭和三年末に於ける職員は警視324人、警部1,764人、警部補 3,246人、巡查61,116人、合計66,450人で前年に比し一様に増加し合計に於て 5,655人を増加した、警官 1人に付人口は 1,016人で前年に比し 7人を増加した、昭和二年末植民地に於ける警察の状態をみるに朝鮮は警察署 250派出所 2,616を有し其職員總數18,449人あり、巡查 1人に付人口は 1,037である、臺灣に於ては警察署 6派出所 1,531を有し其職員總數 7,913あり、巡查 1人に付人口は 548樺人に於ては警察署 12、派出所87あり、職員 347を有し巡查 1人に付人口 638人で關東州は警察署 28 派出所 398あり職員 2,743人を有し巡查1人に付人口418人が屬し南洋廳に於ては警察署6、派出所18、立番所 1を有し、職員98 人あり巡查 1人に付人口 600人が屬して居る。

【**司法官署及職員**】昭和二年末に於ける裁判所数は340にして前年と増加がない、而して判事1,184、検事574書記長8、司法官試補231、書記4,776、延丁1,412、雇員4,529、總數12,718人が携はつて居る。裁判所は更に大審院1、控訴院7、地方裁判所51、區裁判所281に分たれて居る。

植民地に於ける裁判所は朝鮮に於て230臺灣に於て38である。臺灣に於ける法院は高等法院1、地方法院3、支部3、出張所31に分たれる。

刑務所（内地）は56支所39、出張所62にして警察留置場1,231がある、職員は典獄47人、典獄補30人、看守長405人、通譯4人、保健技師技手99人、教誨師139人、教師31人、作業技師及技手281人看守6,389人、女監取締149人、雇傭1,459人、總數9,033人である。

朝鮮に於ては刑務所16、支所10があり、臺灣(昭和元年末)に於ては刑務所4、支所2がある。職員總數は朝鮮に於て2,128人、臺灣に於て579人である。

【**在外公館官吏**】昭和三年末に於ける在外公館の官吏は大使館公使館265人、領事館437（警視警部及巡査を含まず）前年に比し前者は8人を減少し後者は2人を増加した。

昭和三年末に於ける現役在職武官は陸軍將官、佐官、尉官及同相當官13,773人俸給26,599千圓、前年に比し人員158人俸給25千圓減少、海軍は將官、佐官、尉官4,829人にして前年より5人を増した。

【**宮内官吏**】昭和三年末に於ける宮内官吏は勅任117人、奏任345人、判任2,234人、合計2,696人、他に雇傭1,992人あり、その俸給3,280千圓で前年に比し官吏197人減少し、61千圓を減少した。

宮内官吏の部局別は皇室林野局648人、大臣官房595人、諸陵寮278人、内匠寮204人、李王職、147主馬寮120、式部職119人他は100人に満たない。

【**公吏**】昭和三年末に於ける府縣名譽職參事會員は482人有給吏員は11,314人其の俸給7,470千圓で後年に比し參事會員12人、有給吏員441人を減少し、その俸給147千圓を増加した。

昭和三年末に於ける市名譽職及吏員は38,695人其の有給吏員俸給30,084千圓で前年に比し2,381人、1,715千圓を増加し、町村名譽職及吏員は332,402人其の有給吏員俸給32,206千圓で前年に比し1,846人、739千圓を増加した。

陸軍 昭和三年中に於ける壯丁検査人員は565,046人前で前年に比し12,727人を減少した、検査人員の最も多いのは東京の24,248人で15,000人以上の地方は尙北海道、新潟、長野、静岡、愛知、大阪、兵庫、廣島、福岡、鹿児島、其の最も少いのは樺太の482人、鳥取の4,519人、沖縄の

5,665人、宮崎の6,515人等である。壯丁の身長割合は1米57.5以上1米57.5未満の1割7分2厘最も多く1米57.5以上1米60.0未満の1割7分1厘、1米52.5以上1米57.5迄の1割4分8厘之に亞ぎ、尙是より長尺のもの及短尺のものゝ割合順次相亞ぎ、1米75.0以上は4厘、1米45.0未満は7厘である。尙此以外に測尺不能者3,261人あり前年に比して273人を減じた、而して平均身長は1米59.6である。

昭和三年に於ける壯丁の教育程度は高等小學校卒業及之と同等者最も多くて4割7分を占め之に亞ぐは尋常小學校卒業及同上中途退學者4割4分、中學校卒業及之と同等者8分、高等學校及専門學校卒業及之と同等者2厘、大學卒業及之と同等1毛、不就學者にして讀方算術を爲し得る者、4厘、讀書算術を知らざる者6厘で前年に比べると尋常小學校卒業者及同等者、高等小學校卒業者の割合は増加し、高等教育と算筆不能者の割合は減少した。

【**陸軍教育機關**】昭和三年末に於て、陸軍部内の教育機關は、陸軍大學校を始め20種ある、其教員は671人、卒業者は4,180人で前年に比し教員16人を減少し、卒業者1,142人を増加した。

【**憲兵隊**】昭和三年末に於ける憲兵隊人員は3,034人で准士官以上306人、下士官1,043人、(他に技手5人)兵卒967人、傭人585人(囑託98人、雇員35人)で前年に比し69人減少してゐる、其の取扱犯罪人は2,707人で前年に比し1,267人を減少した、取扱犯罪人は軍人925人、軍屬40人、一般の者1,742人である。

海軍 昭和三年末に於ける軍艦は67隻、排水量605,640噸、驅逐艦は101隻、排水量噸101,895噸で、前年に比し隻數は軍艦3隻を減じ、驅逐艦1隻を増加したが排水量は軍艦3,683噸驅逐艦4,442噸を増加した。

【**海軍募兵**】昭和三年に於ける募兵數は6,358人、内水兵の3,392人最も多く機關兵の2,441人之に亞ぎ主計兵260人、看護兵111人、船匠兵95人、軍樂兵59人に分たれ總數を前年に比すれば792人の増加である。

昭和三年度の募兵人員を地方別に見ると鹿児島352人最も多く之に亞ぐは廣島の278人、福岡の269人、熊本の258人、山口の254人岡山の220人兵庫の217人にして他は凡て100人内外の地方で其最も少いのは沖縄の12人、樺太の14人等である。

【**海軍教育機關**】昭和三年度末に於ける海軍の教育機關は海軍大學校、兵學校、機關、軍醫、經理、砲術、水雷、潜水工機の9校である。

其の教員は1,010人、學生、生徒は、1,036人、練習科生は2,932人である。

【**海軍刑務所**】昭和三年に於ける海軍刑務所の狀況は未決年末殘留21人にして前年より2人を増加してゐるが入監出監共に前年

より減少して居る。既決に就ては年末殘留111人にして前年より15人を減少して居る。

【**海軍下士官及兵の費用**】昭和三年末人員數72,746人に對する費用總額は28,733,322圓にして1人平均395圓に當り總額を費途別に分ては俸給に4割9分糧食に3割8分殘餘の1割3分は被服費に當てられて居る。

恩給 昭和三年末に於て政府より恩給を受くる人員は229,874人、金額102,345千圓、扶助料を受くる人員は118,209人、金額25,475千圓で前年に比し恩給は2,568人を増加し、扶助料685人を減少した。恩給は文官38,862人24,678千圓、陸軍々人113,565人、47,964千圓、海軍々人61,933人、22,831千圓其他となつて居る。

扶助料は文官17,784人、5,256千圓、陸軍々人81,507人、15,916千圓、海軍々人14,357人、3,420千圓其他である。

昭和三年中新に恩給を受領した者は文官1,693人、1,299千圓陸軍々人2,285人、1,741千圓、海軍々人3,455人、1,420千圓、教育職員700人、555千圓、警察監獄職員262人、62千圓、待遇職員特別年金20人、11千圓、傭外國人1人1千圓である。新に扶助料を受領した者は文官1,690人、541千圓、陸軍々人3,839人764千圓、海軍々人1,505人、337千圓、教育職員268人103千圓、警察監獄職員250人、24千圓、待遇職員15人5千圓、廢病院入院者14人1千圓である。

昭和三年中に於て恩給受領權の消滅した者は5,848人、2,654千圓、扶助料受領權の消滅した者は8,266人、1,539千圓である。

昭和三年中に於ける一時金受給者は5,282人、2,072千圓にして之を前年に比し175人330千圓を減少した。

爵位 【**有爵者**】昭和三年末に於ける有爵者は1,010人で前年に比し5人を増加した、總數の内譯は公爵17人、侯爵47人、伯爵111人、子爵396人、男爵439人

である。

【**有位者**】昭和三年末に於ける有位者は169,759人で前年に比し10,032人を増加した、總數の内譯は從一位1人、正二位36人、從二位62人、正三位289人、從三位565人、正四位1,342人、從四位2,560人、正五位5,918人、從五位8,912人、正六位10,135人、從六位15,488人等位階の下るに従ひ順次増加して正八位の54,649人最も多く從八位は2,001人である。

勳章 昭和三年末に於ける勳章佩用箇數は1,222,153其の人員數1,201,562で前年に比し60,623箇を減少した、各等勳章佩用人員は大勳位16人、勳一等312人、勳二等は998人、勳三等5,860人、勳四等9,036人、勳五等13,635人、勳六等33,804人、勳七等169,357人、勳八等904,964人である。

昭和三年末に於ける金鷄勳章佩用者は63,880人で前年に比し1,176人を減少した。

昭和三年末に於ける旭日勳章年金受領者は3,732人、其の金額236,420圓で前年に比し244人18,085圓を減少し、同年末に於ける金鷄勳章年金受領者は63,880人、其金額11,490千圓で、前年に比し1,176人238千圓を減少した。

昭和三年に於ける勳章褫奪人員は388人で前年に比し36人を減少し、金鷄勳章褫奪人員は17人で前年に比し1人を増加した。

昭和三年中外國人新敍勳人員は117人で前年に比し15人を増加した。

昭和三年中外國章佩用允許人員は218人で前年に比し27人を増加した。

【**褒章**】昭和三年中に於ける褒章受領者は785人で前年に比し433人を増加した、褒章は綠綬96、藍綬86、紺綬603人である。

褒狀、賞杯受領者及金員表彰者は昭和三三年中賞勳局より2,638人で、前年に比し194人を増加し、昭和二年中地方廳よりは22,434人で前年に比して524人を減少した。

1. 凡在本行存款之存款人，其存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 2. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 3. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 4. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 5. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 6. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 7. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 8. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 9. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。
 10. 存款人存款之種類，應依本行存款章程之規定辦理。

年 度		總 計		分 類	
年 度	總 計	分 類	年 度	總 計	分 類
1917	1,000,000	1,000,000	1918	1,200,000	1,200,000
1918	1,500,000	1,500,000	1919	1,800,000	1,800,000
1919	2,000,000	2,000,000	1920	2,500,000	2,500,000
1920	3,000,000	3,000,000	1921	3,500,000	3,500,000
1921	4,000,000	4,000,000	1922	4,500,000	4,500,000
1922	5,000,000	5,000,000	1923	5,500,000	5,500,000
1923	6,000,000	6,000,000	1924	6,500,000	6,500,000
1924	7,000,000	7,000,000	1925	7,500,000	7,500,000
1925	8,000,000	8,000,000	1926	8,500,000	8,500,000
1926	9,000,000	9,000,000	1927	9,500,000	9,500,000
1927	10,000,000	10,000,000	1928	10,500,000	10,500,000
1928	11,000,000	11,000,000	1929	11,500,000	11,500,000
1929	12,000,000	12,000,000	1930	12,500,000	12,500,000
1930	13,000,000	13,000,000	1931	13,500,000	13,500,000
1931	14,000,000	14,000,000	1932	14,500,000	14,500,000
1932	15,000,000	15,000,000	1933	15,500,000	15,500,000
1933	16,000,000	16,000,000	1934	16,500,000	16,500,000
1934	17,000,000	17,000,000	1935	17,500,000	17,500,000
1935	18,000,000	18,000,000	1936	18,500,000	18,500,000
1936	19,000,000	19,000,000	1937	19,500,000	19,500,000
1937	20,000,000	20,000,000	1938	20,500,000	20,500,000
1938	21,000,000	21,000,000	1939	21,500,000	21,500,000
1939	22,000,000	22,000,000	1940	22,500,000	22,500,000
1940	23,000,000	23,000,000	1941	23,500,000	23,500,000
1941	24,000,000	24,000,000	1942	24,500,000	24,500,000
1942	25,000,000	25,000,000	1943	25,500,000	25,500,000
1943	26,000,000	26,000,000	1944	26,500,000	26,500,000
1944	27,000,000	27,000,000	1945	27,500,000	27,500,000
1945	28,000,000	28,000,000	1946	28,500,000	28,500,000
1946	29,000,000	29,000,000	1947	29,500,000	29,500,000
1947	30,000,000	30,000,000	1948	30,500,000	30,500,000
1948	31,000,000	31,000,000	1949	31,500,000	31,500,000
1949	32,000,000	32,000,000	1950	32,500,000	32,500,000
1950	33,000,000	33,000,000	1951	33,500,000	33,500,000
1951	34,000,000	34,000,000	1952	34,500,000	34,500,000
1952	35,000,000	35,000,000	1953	35,500,000	35,500,000
1953	36,000,000	36,000,000	1954	36,500,000	36,500,000
1954	37,000,000	37,000,000	1955	37,500,000	37,500,000
1955	38,000,000	38,000,000	1956	38,500,000	38,500,000
1956	39,000,000	39,000,000	1957	39,500,000	39,500,000
1957	40,000,000	40,000,000	1958	40,500,000	40,500,000
1958	41,000,000	41,000,000	1959	41,500,000	41,500,000
1959	42,000,000	42,000,000	1960	42,500,000	42,500,000
1960	43,000,000	43,000,000	1961	43,500,000	43,500,000
1961	44,000,000	44,000,000	1962	44,500,000	44,500,000
1962	45,000,000	45,000,000	1963	45,500,000	45,500,000
1963	46,000,000	46,000,000	1964	46,500,000	46,500,000
1964	47,000,000	47,000,000	1965	47,500,000	47,500,000
1965	48,000,000	48,000,000	1966	48,500,000	48,500,000
1966	49,000,000	49,000,000	1967	49,500,000	49,500,000
1967	50,000,000	50,000,000	1968	50,500,000	50,500,000
1968	51,000,000	51,000,000	1969	51,500,000	51,500,000
1969	52,000,000	52,000,000	1970	52,500,000	52,500,000
1970	53,000,000	53,000,000	1971	53,500,000	53,500,000
1971	54,000,000	54,000,000	1972	54,500,000	54,500,000
1972	55,000,000	55,000,000	1973	55,500,000	55,500,000
1973	56,000,000	56,000,000	1974	56,500,000	56,500,000
1974	57,000,000	57,000,000	1975	57,500,000	57,500,000
1975	58,000,000	58,000,000	1976	58,500,000	58,500,000
1976	59,000,000	59,000,000	1977	59,500,000	59,500,000
1977	60,000,000	60,000,000	1978	60,500,000	60,500,000
1978	61,000,000	61,000,000	1979	61,500,000	61,500,000
1979	62,000,000	62,000,000	1980	62,500,000	62,500,000
1980	63,000,000	63,000,000	1981	63,500,000	63,500,000
1981	64,000,000	64,000,000	1982	64,500,000	64,500,000
1982	65,000,000	65,000,000	1983	65,500,000	65,500,000
1983	66,000,000	66,000,000	1984	66,500,000	66,500,000
1984	67,000,000	67,000,000	1985	67,500,000	67,500,000
1985	68,000,000	68,000,000	1986	68,500,000	68,500,000
1986	69,000,000	69,000,000	1987	69,500,000	69,500,000
1987	70,000,000	70,000,000	1988	70,500,000	70,500,000
1988	71,000,000	71,000,000	1989	71,500,000	71,500,000
1989	72,000,000	72,000,000	1990	72,500,000	72,500,000
1990	73,000,000	73,000,000	1991	73,500,000	73,500,000
1991	74,000,000	74,000,000	1992	74,500,000	74,500,000
1992	75,000,000	75,000,000	1993	75,500,000	75,500,000
1993	76,000,000	76,000,000	1994	76,500,000	76,500,000
1994	77,000,000	77,000,000	1995	77,500,000	77,500,000
1995	78,000,000	78,000,000	1996	78,500,000	78,500,000
1996	79,000,000	79,000,000	1997	79,500,000	79,500,000
1997	80,000,000	80,000,000	1998	80,500,000	80,500,000
1998	81,000,000	81,000,000	1999	81,500,000	81,500,000
1999	82,000,000	82,000,000	2000	82,500,000	82,500,000
2000	83,000,000	83,000,000	2001	83,500,000	83,500,000
2001	84,000,000	84,000,000	2002	84,500,000	84,500,000
2002	85,000,000	85,000,000	2003	85,500,000	85,500,000
2003	86,000,000	86,000,000	2004	86,500,000	86,500,000
2004	87,000,000	87,000,000	2005	87,500,000	87,500,000
2005	88,000,000	88,000,000	2006	88,500,000	88,500,000
2006	89,000,000	89,000,000	2007	89,500,000	89,500,000
2007	90,000,000	90,000,000	2008	90,500,000	90,500,000
2008	91,000,000	91,000,000	2009	91,500,000	91,500,000
2009	92,000,000	92,000,000	2010	92,500,000	92,500,000
2010	93,000,000	93,000,000	2011	93,500,000	93,500,000
2011	94,000,000	94,000,000	2012	94,500,000	94,500,000
2012	95,000,000	95,000,000	2013	95,500,000	95,500,000
2013	96,000,000	96,000,000	2014	96,500,000	96,500,000
2014	97,000,000	97,000,000	2015	97,500,000	97,500,000
2015	98,000,000	98,000,000	2016	98,500,000	98,500,000
2016	99,000,000	99,000,000	2017	99,500,000	99,500,000
2017	100,000,000	100,000,000	2018	100,500,000	100,500,000
2018	101,000,000	101,000,000	2019	101,500,000	101,500,000
2019	102,000,000	102,000,000	2020	102,500,000	102,500,000
2020	103,000,000	103,000,000	2021	103,500,000	103,500,000
2021	104,000,000	104,000,000	2022	104,500,000	104,500,000
2022	105,000,000	105,000,000	2023	105,500,000	105,500,000
2023	106,000,000	106,000,000	2024	106,500,000	106,500,000
2024	107,000,000	107,000,000	2025	107,500,000	107,500,000
2025	108,000,000	108,000,000	2026	108,500,000	108,500,000
2026	109,000,000	109,000,000	2027	109,500,000	109,500,000
2027	110,000,000	110,000,000	2028	110,500,000	110,500,000
2028	111,000,000	111,000,000	2029	111,500,000	111,500,000
2029	112,000,000	112,000,000	2030	112,500,000	112,500,000
2030	113,000,000	113,000,000	2031	113,500,000	113,500,000
2031	114,000,000	114,000,000	2032	114,500,000	114,500,000
2032	115,000,000	115,000,000	2033	115,500,000	115,500,000
2033	116,000,000	116,000,000	2034	116,500,000	116,500,000
2034	117,000,000	117,000,000	2035	117,500,000	117,500,000
2035	118,000,000	118,000,000	2036	118,500,000	118,500,000
2036	119,000,000	119,000,000	2037	119,500,000	119,500,000
2037	120,000,000	120,000,000	2038	120,500,000	120,500,000
2038	121,000,000	121,000,000	2039	121,500,000	121,500,000
2039	122,000,000	122,000,000	2040	122,500,000	122,500,000
2040	123,000,000	123,000,000	2041	123,500,000	123,500,000
2041	124,000,000	124,000,000	2042	124,500,000	124,500,000
2042	125,000,000	125,000,000	2043	125,500,000	125,500,000
2043	126,000,000	126,000,000	2044	126,500,000	126,500,000
2044	127,000,000	127,000,000	2045	127,500,000	127,500,000
2045	128,000,000	128,000,000	2046	128,500,000	128,500,000
2046	129,000,000	129,000,000	2047	129,500,000	129,500,000
2047	130,000,00				